

三郷村の埋蔵文化財第4集

三郷村埋蔵文化財

(資料集)

1999・12

三郷村教育委員会

三郷村埋蔵文化財

(資料集)

1999・12

三郷村教育委員会

序

三郷村における遺跡包蔵地の数は、現在までに50余の地点を数えるまでになっています。これらの遺跡については、昭和55年に発行された「村誌Ⅰ」に南松原遺跡（昭和45年12月発掘調査）を中心に記載され、また、黒沢川右岸遺跡（昭和58年9月発掘調査）、東小倉遺跡（平成5年2月発掘調査、平成8年4月県道排水路工事に伴う緊急立会調査）については、随時報告書が刊行されております。

しかし、南松原遺跡については、報告書原稿や、村長（当時中田又三郎村長）の序文まで執筆されながら、諸種の事情により発行されなかったのが現実です。また、調査報告書としてまとめられていない数多くの個人所有の遺物があったり、村の仮民俗資料館に眠る遺物があったのも事実でした。

現在では、文化財行政としての埋蔵文化財保護に、村としても力を注いでいるところですが、過去におけるような遺物の収集等は不可能に近いものがあります。一部埋設保存されたものもありますが、多くの遺跡がここ三〜四十年ほどの開発行為の中で、何の調査、記録もされないまま消滅する、いわゆる遺跡破壊、遺物の散逸の憂き目にあったことは否めません。私たちが住むこの地の埋蔵文化財の一つひとつは、祖先たちが苦勞の末、開発し、築き上げてきたものです。先人たちの生活の様子を知ることは、今ここに居る私たちの足元を見つめ直すことでもあります。

このような経緯の上に、南松原遺跡・個人所有の遺物・仮民俗資料館の遺物を、ここに資料集としてまとめることができましたことは、この三郷村に生活する私たちにとって大変意味深いものと考えます。この一冊が、地域の歴史への関心を高め、今後の文化財保護の意識の高揚へとつながることを期待するものです。

最後になりましたが、膨大な数の資料であったにもかかわらず、全面的にご指導、ご協力をいただいた山田瑞徳先生を始め、遺物の整理、製図、復元にあたられた方々、所蔵遺物を快く提供していただいた方々、調査協力者などの皆様にご心より感謝を申し上げますとともに、本資料集作成に優秀な技術と誠意をもって当られた、藤原印刷株式会社に対し厚く御礼を申し上げます次第です。

私たちがその重要性に気づく前から、個人でその資料の収集、記録、整理に当たられていた故日比野允夫先生、先生の残された功績は偉大です。

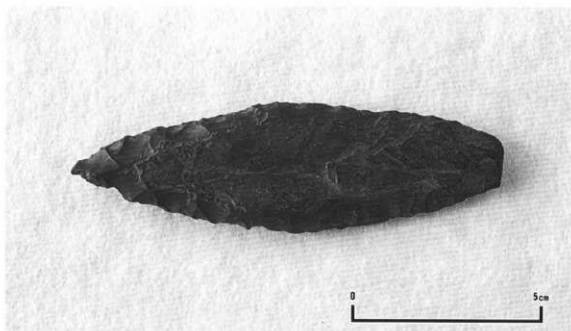
ご存命中に完成できなかったのが心残りですが、この資料集を捧げ、哀悼の意を表し、心より感謝申し上げます。安らかにお眠りください。

ありがとうございました。

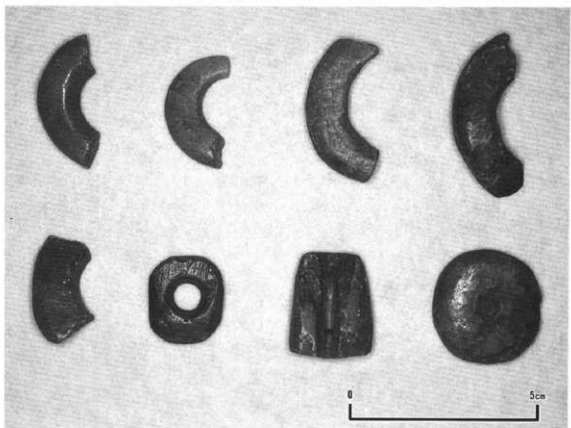
平成11年11月

三郷村教育委員会

教育長 中村孝信



調整池北遺跡出土石器（石槍）（小松明夫氏所有）



調整池北遺跡出土石器（軟玉製裝飾品の未製品）（小松明夫氏所有）



鳴沢A遺跡 (本文7頁)



鳴沢B遺跡 (本文10頁)



才の神遺跡 (本文13頁)



チンクラ屋敷道跡 (本文18頁)



堂原道跡 (本文21頁)



楡中村道跡 (本文35頁)



上総屋敷遺跡
(本文31頁)



三角原遺跡 (本文41頁)



長尾城址北遺跡 (本文43頁)



赤坂西遺跡 (本文44頁)



住吉竹原遺跡 (本文45頁)



ゆの久保遺跡（本文47頁）



千国橋北遺跡（本文48頁）



大室遺跡（本文52頁）



及木西村遺跡
(本文56頁)

(全景)



東小倉遺跡 (本文57頁)



南松原遺跡
(本文67頁)

(全景)



鳴沢尻遺跡 (本文89頁)

はじめに

1、三郷村の原始時代・古代については、昭和55年に発刊された「三郷村誌Ⅰ」にまとめて記述されている。その後、昭和58年に黒沢右岸遺跡、平成5年に東小倉遺跡に発掘調査が実施されて報告書も出され両遺跡の内容が明らかになってきている。これらが三郷村の原始・古代を知る手がかりとなる出版物であるが、これらに取りあげられない遺物が相当量、個人や民俗資料館等に所蔵されていることも判っていて、その資料の重要さから記録にとどめることの必要さが指摘されていた。遺構や遺物をもとにその時代の人々の生活やその文化内容を考究する考古学にとって資料の集積は何よりも大切なことであり、個人持ちの遺物は散逸の心配もあるので、早急な資料化が課題となっていた。本書は、こんな願いをかなえるために企画・編集された三郷村の考古学関係の資料集である。村誌記載の資料が一部再掲されているが、大部分は民俗資料館や各個人に所蔵されているものであり、できる限り多く図示することに努めて編集した。

2、本書の企画・編集には次の方々が関わった。

(1)企画・遺物の借用や庶務全般について

教育委員会、那須野雅好、飯田弘一

(2)本書の執筆・編集 山田瑞穂

(3)本書作成の分担は次のようである。

○遺物の洗浄・註記 那須野代史子、中村予至子、田々井誉子、牛山愛子

○土器の拓本・実測・トレース

那須野代史子、中村予至子、田々井誉子、牛山愛子、山田瑞穂

○石器の実測・トレース

主として降旗俊行が行ない、一部を上記5名が担当した。

○石器の石質については、木船 清氏の御教示を受けた。

○写真は、飯田弘一

(4)土器の復元は、福沢幸一氏に依頼した。

記してお礼申し上げる。

(5)本書作成に当たり、次の方々に御指導・御助言をいただいた。記して感謝とお礼を申し上げるものである。(敬称略)

樋口昇一、土屋長久、竹内靖長、平林 彰、島田哲男、山田真一、百瀬新治

(6)本書記載の遺物保管者は挿図、及び、本文に明記してある。記載のないものは資料館等、教育委員会の保管である。

本文目次

序	
はじめに	
1、鳴沢A遺跡	7
2、鳴沢B遺跡	10
3、才の神遺跡	13
4、チンクラ屋敷遺跡	18
5、堂原遺跡	21
6、上総屋敷遺跡	31
7、栗の木下遺跡	33
8、楡遺跡群	35
9、三角原遺跡	41
10、長尾城址北遺跡	43
11、赤坂西遺跡	44
12、住吉竹原遺跡	45
13、ゆの久保遺跡	47
14、千国橋北遺跡	48
15、西牧遺跡	50
16、大室遺跡	52
17、及木西村遺跡	56
18、東小倉遺跡	57
19、南松原遺跡	67
20、その他の遺跡	89
あとがき	

挿 図 目 次

第1図	三郷村遺跡地図	
第2図	鳴沢A遺跡出土土器拓影	8
第3図	鳴沢B遺跡出土土器拓影その1	11
第4図	鳴沢B遺跡出土土器拓影その2	12
第5図	才の神遺跡出土土器拓影その1	14
第6図	才の神遺跡出土土器拓影その2	15
第7図	鳴沢A・才の神・ゆの久保遺跡出土土器実測図	16
第8図	チンクラ屋敷遺跡出土土器拓影	19
第9図	堂原遺跡出土土器拓影その1	22
第10図	堂原遺跡出土土器拓影その2	23
第11図	堂原遺跡出土土器拓影その3	24
第12図	堂原遺跡出土土器	25
第13図	堂原遺跡出土土器その1	27
第14図	堂原遺跡出土土器その2	28
第15図	堂原遺跡出土土器その3、赤坂西遺跡出土土器	29
第16図	栗の木下・上総屋敷・及木西村遺跡出土遺物	32
第17図	楡遺跡群中村遺跡出土遺物	36
第18図	楡遺跡群上手遺跡出土遺物	38
第19図	楡遺跡群小路遺跡・丁田遺跡 出土遺物	40
第20図	三角原遺跡出土遺物	42
第21図	住吉竹原遺跡出土土器	46
第22図	千国橋北遺跡出土土器	49
第23図	西牧遺跡出土土器拓影	51
第24図	鳴沢尻・大室遺跡出土土器	53
第25図	大室遺跡出土土器	54
第26図	大室遺跡出土土器	55
第27図	東小倉遺跡出土土器その1	59
第28図	東小倉遺跡出土土器その2	60
第29図	東小倉遺跡出土土器その3	61
第30図	東小倉遺跡出土土器その4・土製品	62
第31図	東小倉遺跡出土土器その5	63
第32図	東小倉遺跡出土土器その6	64

第33図	東小倉遺跡出土石器その7	65
第34図	南松原遺跡全体図	90
第35図	南松原遺跡発掘調査トレンチ概念図	91
第36図	南松原遺跡第1号住居址	92
第37図	南松原遺跡第2号住居址と特殊遺構1、並びに土器出土状況	92
第38図	南松原遺跡第3号住居址	93
第39図	南松原遺跡第4・6号住居址	93
第40図	南松原遺跡第5号住居址	94
第41図	南松原遺跡特殊遺構2	94
第42図	南松原遺跡第1号住居址出土土器	95
第43図	南松原遺跡第1号住居址出土土器	96
第44図	南松原遺跡第1・2号住居址土器	97
第45図	南松原遺跡第2号住居址出土土器	98
第46図	南松原遺跡第2号住居址出土土器	99
第47図	南松原遺跡第2号住居址出土土器	100
第48図	南松原遺跡第2号住居址出土土器	101
第49図	南松原遺跡第4・5号住居址出土土器	102
第50図	南松原遺跡第5号住居址出土土器	103
第51図	南松原遺跡第5号住居址出土土器	104
第52図	南松原遺跡第5号住居址出土土器	105
第53図	南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その1	106
第54図	南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その2	107
第55図	南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その3	108
第56図	南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その4	109
第57図	南松原遺跡第2号住宅址出土土器拓影その1	110
第58図	南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その2	111
第59図	南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その3	112
第60図	南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その4	113
第61図	南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その5	114
第62図	南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その6	115
第63図	南松原遺跡第4号住居址出土土器拓影その1	116
第64図	南松原遺跡第4号住居址出土土器拓影その2	117
第65図	南松原遺跡第4号住居址出土土器拓影その3	118
第66図	南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その1	119

第67図	南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その2	120
第68図	南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その3	121
第69図	南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その4	122
第70図	南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その5	123
第71図	南松原遺跡第3・6・7号住居址出土土器拓影	124
第72図	南松原遺跡第13号住居址出土土器拓影	125
第73図	南松原遺跡第1・2号住居址出土土器	126
第74図	南松原遺跡第4・5・7号住居址出土土器	127
第75図	南松原遺跡遺構外出土土器及び表採遺物	128
第76図	南松原遺跡表採遺物	129
第77図	長尾城址北・白山神社横・龍峰寺跡・黒沢川右岸遺跡出土土器	130
第78図	黒沢川右岸遺跡出土土器	131

図 版 目 次

- 図版1、鳴沢A・才の神・鳴沢尻遺跡出土石器
図版2、才の神遺跡出土縄文前期土器
図版3、堂原遺跡出土弥生中期土器
図版4、堂原遺跡出土石器
図版5、堂原・南松原・黒沢川右岸・白山神社遺跡出土石器と土偶
図版6、ゆの久保・赤坂西・長尾城址北・住吉竹原・千国橋北の各遺跡出土石器
図版7、檢上手・中村遺跡出土陶器
図版8、大室遺跡出土石器
図版9、南松原遺跡遺物出土状況
図版10、南松原遺跡特殊遺構2（上）と第1・3号住居址
図版11、南松原遺跡発掘調査状況
図版12、南松原遺跡第1号住居址（上）と第3号住居址（下）
図版13、南松原遺跡第4号住居址
図版14、南松原遺跡第5号住居址
図版15、南松原遺跡出土縄文中期土器
図版16、南松原遺跡第1号住居址出土土器
図版17、南松原遺跡第2号住居址出土土器
図版18、南松原遺跡第2・4・5号住居址出土土器
図版19、南松原遺跡第5号住居址出土土器
図版20、南松原遺跡第5号住居址出土土器
図版21、東小倉遺跡出土石器
図版22、東小倉遺跡出土石器・石製品

なるさわ 1、鳴沢A遺跡

(三郷村遺跡番号No2)

1、所在地

三郷村大字小倉53-2番地～260番地一帯 (北小倉 ^{かく} 隠れ田)

2、遺跡地

鳴沢川扇状地の扇頂部に当たる左岸山麓に遺跡地は位置しており、北側はすぐに山地となるため日当たりの良い所である。遺跡地は通称山麓線と呼ばれる主要地方道塩尻・鍋割・穂高線が鳴沢川を渡る橋の北側一帯で、川に向かって南に傾斜する畑地となっているが、現在までの調査や遺物採集状況から考えると広範囲に及ぶものではなさそうに小集落が想定される。

本遺跡の東方には、一本松遺跡や鳴沢尻遺跡が、鳴沢川の対岸には鳴沢B遺跡や才の神遺跡が所在している。

3、時代

縄文時代

4、遺構・遺物

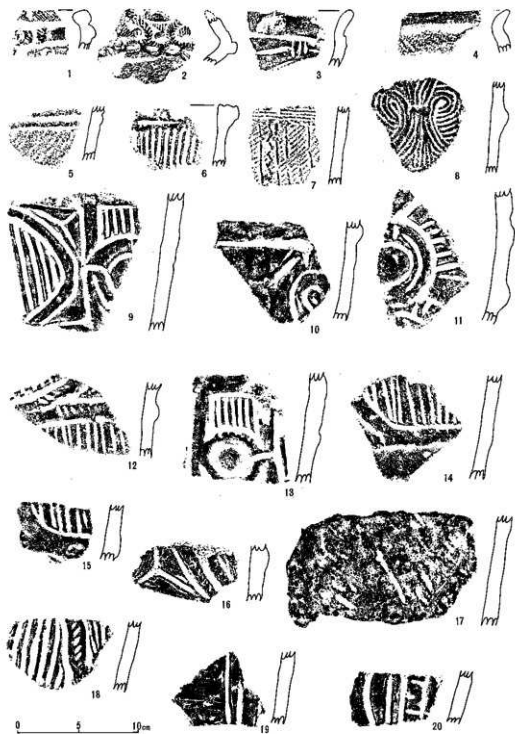
本遺跡での調査は部分的ではあるが今迄に2回行われている。1度目は昭和41年4月2～3日で、猿田文紀(中萱)、中村太郎(下長尾)、増田喜美人(北小倉)、河西清光、太田喜幸(共に豊科高校教諭)、布山章、古屋秀継、笠原直樹(共に松本県ヶ丘高校生)、布山正明(大町高校生)の諸氏によって実施された。その端緒は、山麓線(主要地方道塩尻・鍋割・穂高線)の一種改良工事に当たり、工事関係者の窪文夫氏より遺物の出土が報じられたことによる。

この際は、住居址と思われるものの確認と3個の縄文土器の出土をみた。3個の土器は復元困難な破片と写真の中期後葉Ⅱ期のものである。唐草文系土器で、よく埋塞に使用されるものである。

第2回目の調査は、平成7年4月、住宅建設に伴って立ち合い調査を行ったが遺構・遺物の確認はなかった。

本遺跡からは縄文中期・後期の土器が出土したと三郷村誌Ⅰや長野県史等には記載されているが所蔵等は不明である。

今回図示した遺物は、第2図の土器片と第7図の石器である。土器片の1～8は三郷中学生、原和明君の採集資料であり、9～20は資料館所蔵で中村太郎の記名のものである。



第2図 鳴沢A遺跡出土土器拓影(1:3)(1~8は原和明君所蔵)

いずれも深鉢形土器の破片であり、1～4、6は口縁部片、他は胴部片である。1、2は内弯、3、4はゆるく外反する口縁を示し、1、2には隆帯上に刻目文が、3には篋状工具による沈線が、4には縄文がそれぞれ施されている。胴部には篋状工具で横位の楕円文(9、12)や楕形文(14、15)、縦位の沈線文(19、20)がみられる。8にはあたかも左右対称の如くに弧線が施されている。いずれも縄文中期中葉VI期～後葉Iに比定されるものである。従って、昭和41年に出土した土器との間には時間差があり、本遺跡への人々の訪れは、何回にも及んだことが判る。

石器は第7図の1、2の打製石斧と3の不定形石器である(図版1)。石質は1が細粒砂岩、2がホルンヘルス、3が硅質細粒砂岩である。

なるさわ 2、鳴沢B遺跡 (新遺跡・三郷村遺跡番号No51)

1、所在地

三郷村大字小倉242番地一帯 (北小倉)

2、遺跡地

北小倉集落を南北に走る山麓線の東側に本遺跡は位置し、安曇平から松本市方面を見渡す眺望のよい地である。

今迄、才の神道跡出土遺物として処理されていたが、今回の遺物整理で出土地を再確認したところ、鳴沢川をはさんだ右岸であることから、新しくB地点として把握することにした。対岸である川の北側には鳴沢A遺跡が、また、西方には才の神道跡が所在している。

3、時代

縄文時代

4、遺物

第3・4図に示したもので「北小倉242、昭和32、11、26」と「33、4、5、小林」と2種類の記名があり、資料館に保管されていた。

縄文中期後葉Ⅱ～Ⅲに比定されるものが中心であるが、先行する中葉Ⅴ～Ⅵ期のものも若干(1、2、4、13～15、31、33、34)含まれている。いずれも深鉢形土器の破片のみで器形の判るものはない。

1～7、11、17、27、32は口縁部片、28～31は底部片、他は胴部片である。27は推定口径24cmほどの有孔罎付土器片で数少ない資料である。

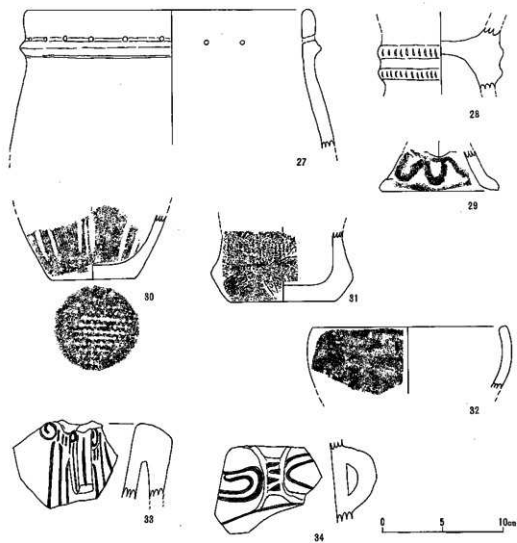
1、2、4は波状口縁をなす部分であり、刻目文が施されている。31は底部が張り出すこの時期特有のもので、胴部は縄文が付けられている。33、34は把手部分であり、これらは先行する時期のものである。

3、6～12等は渦巻文や懸垂文で飾られ、その間を綾杉文(17)や縄文(18、19、22等)が施されたものである。

これらの土器から、住居址の存在が確実視される遺跡であると同時に、大別して二時代に亘る人々の生活が考えられよう。



第3図 鳴沢B遺跡出土土器拓影その1 (1:3)



第4図 鳴沢B遺跡出土土器拓影その2 (1:3)

さいのかみ 3、才の神遺跡

(三郷村遺跡番号No.3)

1、所在地

三郷村大字小倉400番地～475番地一帯 (北小倉)

2、遺跡地

東流する鳴沢川が山地を抜け出た地点が遺跡地で、南と北には山地が迫っている。この扇頂部一帯は、現在北小倉集落の住宅密集地であり、また中世には小倉城に関わる地でもあって、小倉地区では中心的なところである。スカイラインへ接続するバイパス道路建設に伴って、昭和61年に遺跡地南方の調査を実施したが、遺構の確認はなく、僅かに土器片が出土したのみで、遺跡地は新設道路より北であることが判明している。小松荘介氏宅東方の畑では現在も表面採集が可能である。

本遺跡の東方には、鳴沢B遺跡が、南方山麓には浄心寺附近遺跡が所在している。

3、時代

縄文時代

4、遺物

地元の人の話によると北小倉の地からは多量の土器片等遺物の出土があったが、気味悪がってお寺へ奇贈したとの話がある。その数、カマスに幾つとか言われるので相当量であったことがうかがわれる。しかし、これらの遺物は現在不明である。

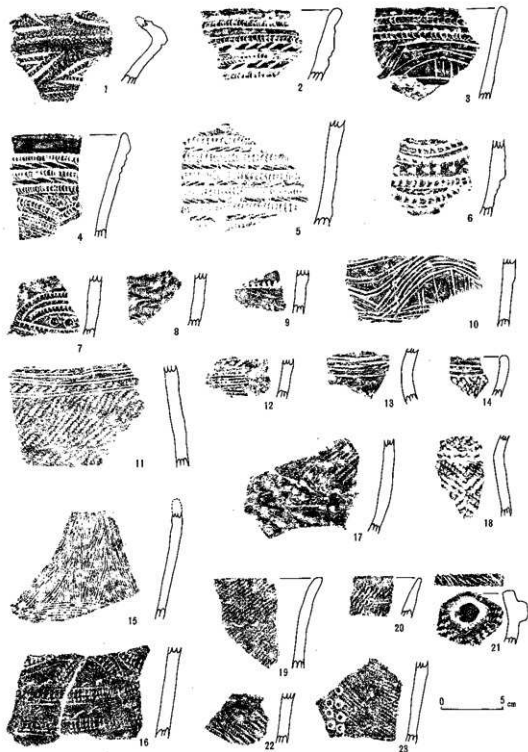
今回図示した遺物は、小松荘介氏所蔵のものと同資料館に保管されている「新屋敷、増田良平」と記名されたものである。

遺物は、第5・6・7図の土器(図版2)と石器である。土器はすべて破片で、器形の判明するものはなく、縄文前期に比定されるものであり、その中でも時期差がみられる。

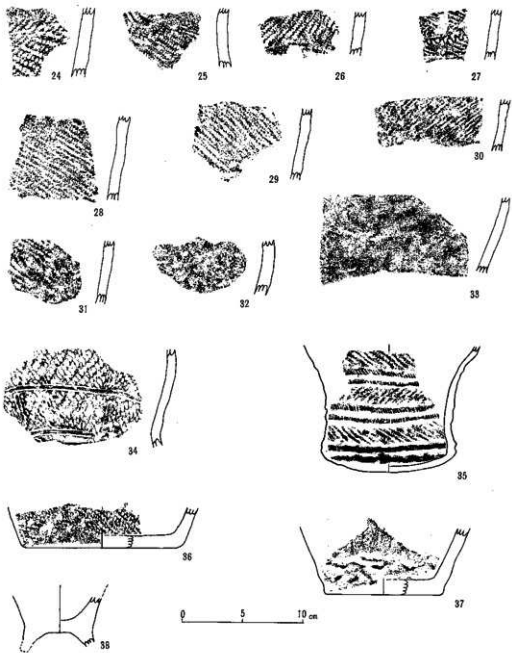
1～14は半截竹管状工具による平行沈線文と連続爪形文が特徴的なものであり、それが三角形(1、4)や半円形(3、6、7、10)に意匠されているものがある。口縁部は「く」の字状に内弯する1と外反気味に開く2～4、内弯気味の14がみられる。前期V期に比定されるものである。

15には平行条線文、16には刺突文がみられ、17～32には縄文が施されていて36、37の底部につながるものと思われる。

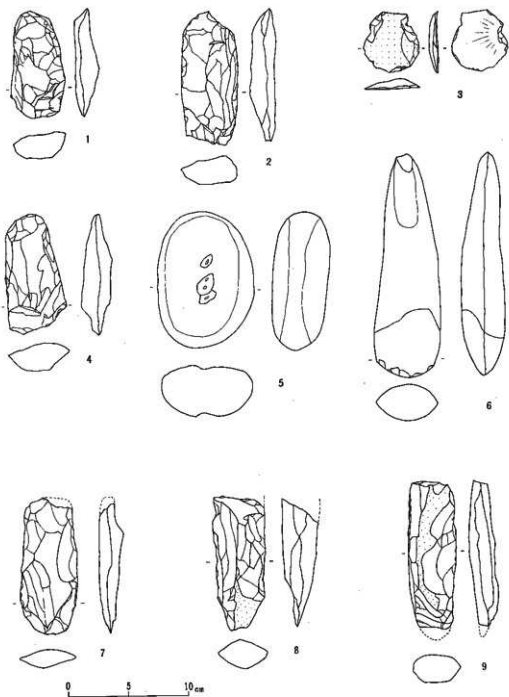
この縄文をもつものは、17、18、19、24の繊維を含む前期III期に比定されるものと繊維を含まない本遺跡の主体を占めるIV～V期のものに分けられる。口縁は外反



第5図 オの神遺跡出土土器拓影その1 (1:3) (小松荘介氏所蔵)



第6図 才の神遺跡出土土器拓影その2 (1:3)



第7図 鳴沢A (1~3)・才の神 (4~6)・ゆの久保 (7~9) 遺跡出土石器 (1:3)

気味の19、20と波状口縁をなす21のやや内湾するものとみられる。21にはボタン状の突起がつけられ、口唇には刻目が施されている。

33は無文の破片であるが、外面に赤彩がみられる。

34、35は5と共に明らかに胎土、焼成の異なるもので関西系（北白川下層Ⅱ式）の土器である。5は灰白色を呈する胎土、焼成とも良好なもので横走する連続爪形文の間に刻目文をもつ隆帯がみられる。34は竹管状工具による平行沈線文で縄文帯が上下に分けられてアクセントをつけ、しまった感じを与える。35は底径11cmの丸底をなす底部で、よく焼きしまっており、底面部は白っぽい薄茶色、立ち上がった部分には煤が付着して黒褐色を呈している。横走する刻目文をもつ2条の隆線によって分けられ、その間にはRLとLRの縄文がみられる。三郷村では数少ない他所との交流を物語る土器と言えよう。

石器は第7図4の打製石斧（珪質細粒砂岩）、5の凹石（砂岩）、6の磨製石斧（砂岩）である（図版1）。凹石は周囲が磨れていて磨石としての使用もあり、凹みの穴は両面にある。

以上が今回まとめた遺物であるが、三郷村誌Ⅰや長野県史によると本遺跡からは前期土器（有尾、上原、北白川下層Ⅱ）、中期土器（勝坂、加曾刊E）、後期土器（堀之内）、晩期土器（大洞前半、氷）、石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹石、石匙、石皿、磨石の出土が記載されていて、前期から晩期に及ぶ遺跡として周知のものであった。しかし、今回整理して中期のものは鳴沢B遺跡として分けたが、本遺跡としてまとめたものは前期のもののみで、後期や晩期の土器はみられなかった。

4、チンクラ屋敷遺跡 (三郷村遺跡番号No.9)

1、所在地

三郷村大字小倉4404番地～4420番地一帯 (室町)

2、遺跡地

室町集落を東西に走る道路と、黒沢川右岸に建設された長幸園とのほぼ中間地点が本遺跡地である。黒沢川右岸遺跡がすぐ北方に所在していて、広くとらえれば本遺跡はその南限に当たる位置と考えてもよいところである。黒沢扇状地の扇尖部に当たり、かつては「小倉官林」と呼ばれる林野地帯であったが開墾され、現在は果樹や普通畑となっている。

西方には調整池北遺跡、東方の段丘沿いには長尾城北遺跡や赤坂西遺跡が所在している。

3、時代

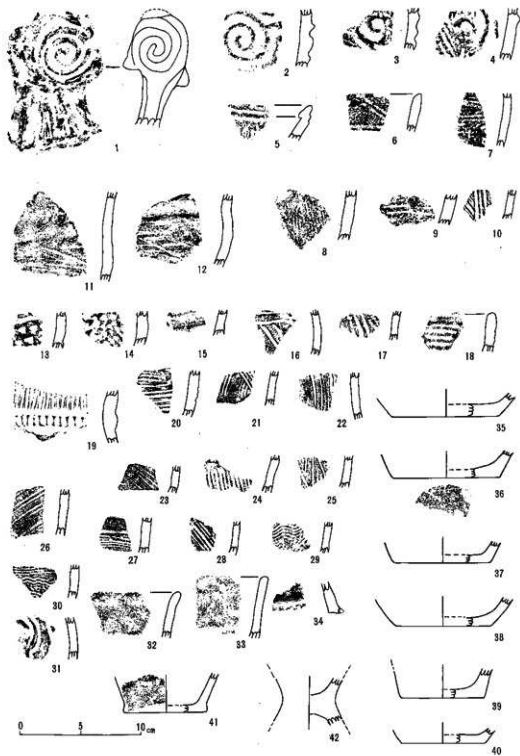
縄文時代、弥生時代

4、遺物

畑耕作中に採集されたものが全てであり、第8図に図示した土器で細片が多い。

縄文時代のものは、1～12であり、1～10は中期後葉のもので1～4の渦巻文に代表される。北方の黒沢川右岸遺跡ではこの期の竪穴住居址が検出されている。11、12はやや焼成がもろい感じで表面の磨減がみられるが、無文部の下にわずかの稜とつか段差がみられ、条線文が施されている。縄文晩期から弥生前期に位置づくものではないかと思われる。弥生中期土器片の出土や黒沢川右岸遺跡との関連から18と共に注目したい土器片である。

弥生時代のものは13～42である。13～17は壺形土器の破片で、棒状工具による刺突列点文(13～15)や沈線文(16、17)が施されている。19以下は甕形土器の破片で条痕文が付けられている。その方向は縦位(19、22、24)のもの、横位(20、27)のもの、斜位(23、26、28)のものの変化がみられる。29、30は波状文で飾られるものである。18は如何なる器形をとるのか細片のため不明である。口縁部に棒状工具による平行沈線文がある。縄文晩期のものかもしれない。35～41は底部片で、底径7～9cmを測る。36、37、40には目の細かい布痕がある。42は、高杯の破片である。これら弥生中期のものは、発掘調査・報告された北方の黒沢川右岸遺跡と同じ内容で同時生活が考えられる。また、三郷村誌I等では、本遺跡から縄文中期土器、



第 8 図 チンクラ屋敷遺跡出土土器拓影 (1 : 3)

土偶の出土と竪穴住居址の存在が記されているが、土偶は不明である。竪穴住居址も縄文期なのか弥生期なのか確認されていない。

5、堂原遺跡 どうばら (三郷村遺跡番号No23、24)

1、所在地

三郷村大字温4200番地～4370番地一帯 (上長尾)

2、遺跡地

黒沢川扇状地の扇端部に当たるところで、かつては黒沢川の氾濫原となった地である。上長尾集落の西方に平福寺が存在しているが、遺跡地はその南東部から南にかけての周辺住宅地一帯と考えられる。以前は、平福寺境内遺跡、堂平遺跡、川岸最氏宅遺跡等と呼んでいたものを村誌の際に一括して堂原遺跡とした経緯がある。川岸最氏宅でサイロを掘った際、多量の遺物出土をみたが、調査は行われなかったので竈穴住居址等遺構の確認はされていない。また遺跡の範囲は勿論のこと、各期に亘る複合遺跡であるが層序的な内容等も確認されていない。

付近の遺跡として北方に上総屋敷遺跡、西方に若宮遺跡、黒沢川右岸遺跡、南方河岸段丘(はば)の切れる近くには長尾城址、長尾城址北遺跡が所在して遺跡の密集する地である。

3、時代

縄文時代、弥生時代、平安時代、中世

4、遺物

遺物は先記した川岸最氏宅でサイロを掘った際に出土したものが中心になっている。

縄文時代

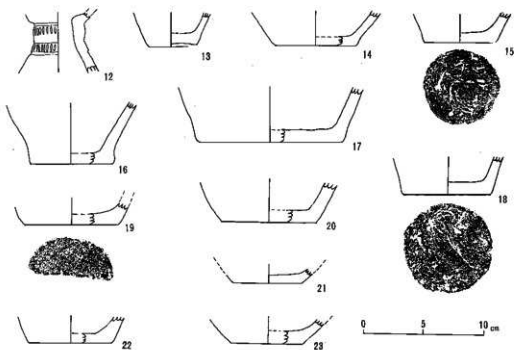
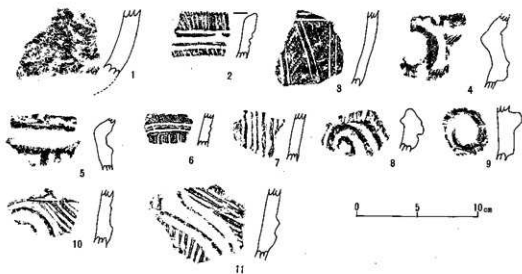
土器片と石器があるが打製石斧等弥生時代のものとの区別がむずかしいので、石器類は弥生時代のところ一括した。

縄文土器片は量的に多くはなく、図示したものは第9図1～11である。

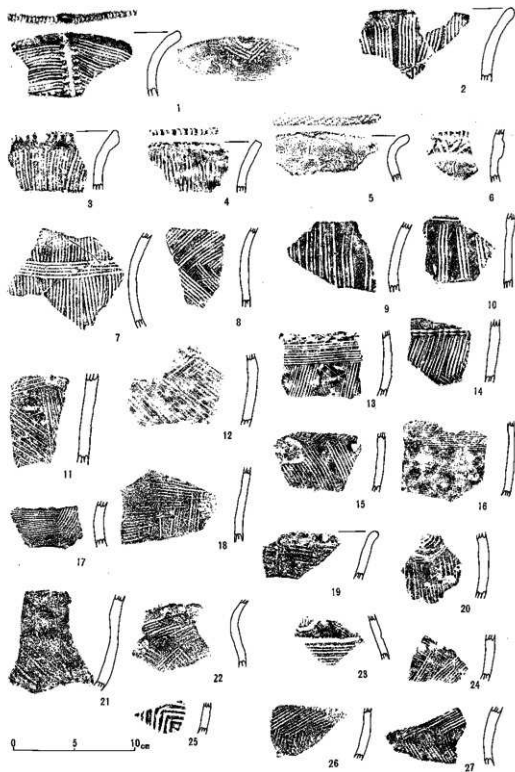
1は繊維を含む土器片で底部に近い部分である。丸底ないし尖底のもので縄文早期末から前期初頭に比定されるものである。2～11は中期後葉の渦巻文や懸垂文で飾られる深鉢形土器の破片である。3は縄文地に半截竹管状工具で付けられた平行沈線文がみられるもので、若干先行しよう。

弥生時代

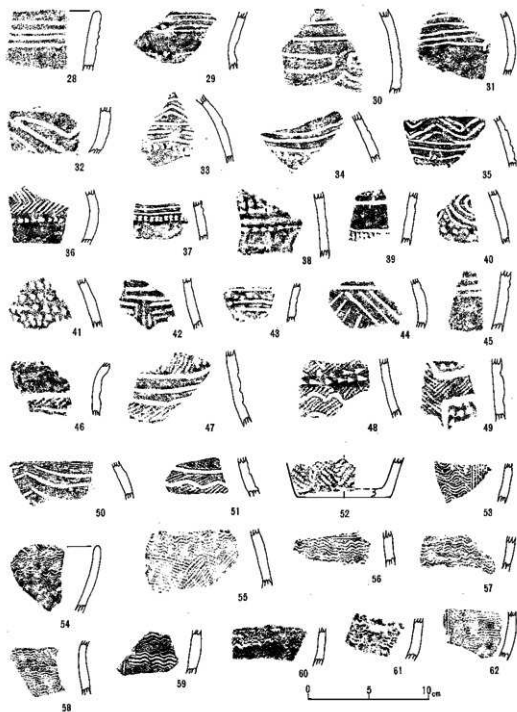
土器と石器がある。土器は第9・10・11図に図示したもので、いずれも弥生中期



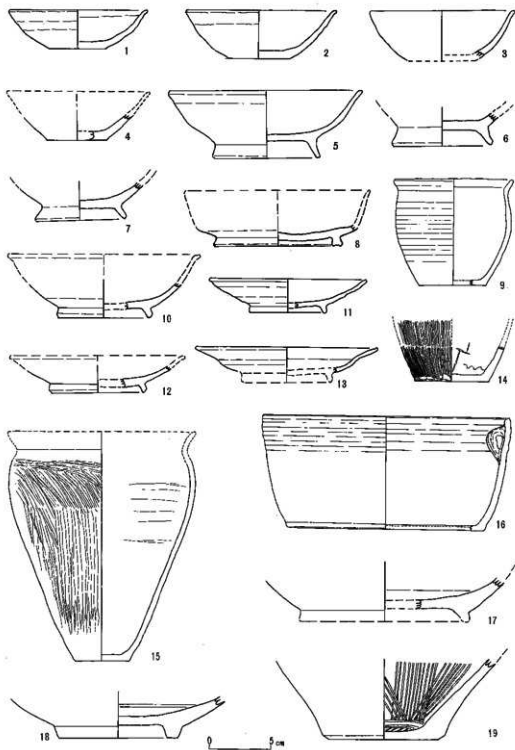
第9図 堂原遺跡出土土器拓影その1 (1:3)



第10図 堂原遺跡出土土器拓影その2 (1:3)



第11図 貴原遺跡出土土器拓影その3 (1:3)



第12圖 堂原遺跡出土土器（1：3）

に位置づけられるものであるが、破片のみで器形全体の判るものはない。(図版3)

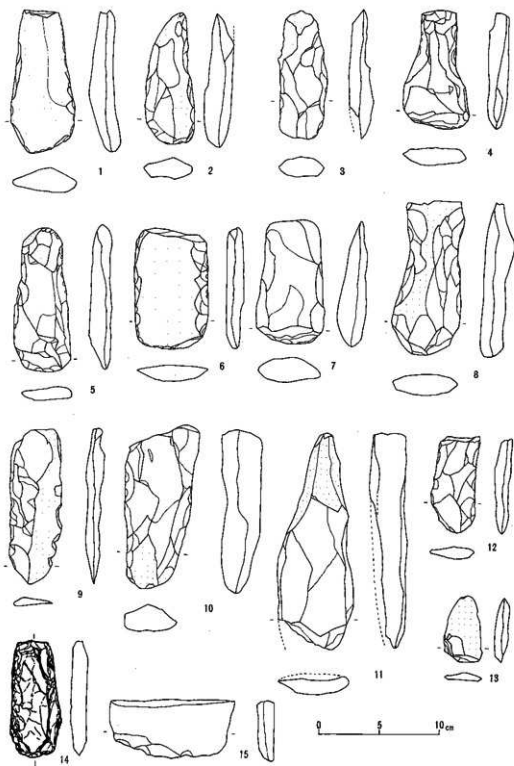
第9図12は壺形土器の頸部片で、最もくびれた部位に篋状工具で施された列点文が二重に回っている。13~23は底部片で、底径6cm以下のもの(13、21)、7cm前後のもの(14、16等)、12cm程のもの(17)と三大別される。また底部からの立ち上がり急な13、16、18等とゆるやかな14、21、23等があるが、これらは器形の違いによるものであろう。そして底面に布痕をもつ16、19、木葉痕をもつ14、無文の15、18がある。布痕からみる布目は非常に細かいもので紡織技術のよさがうかがえる。21、23には内外面に朱塗りがみられる。

甕形土器は第10、11図1~5、7~29、53~62で条痕文と波状文が中心になっている。条痕文は、3~5本の櫛齒状工具で縦方向(2~4等)、横方向(1、19)、斜め方向(8、12等)に施されており、中には条痕文に沿って刺突文(13、14)があるものや重弧文(20)のあるものがみられる。また口唇部に刻目(1、3、4)や縄文(5)を付けたものもある。波状文は同様工具で横方向に付けられ、中には垂下する条線で区切られる53、59、62や更に大きな波状というよりは斜め方向の条線といったほうがよいものと組み合わせられる55などがある。

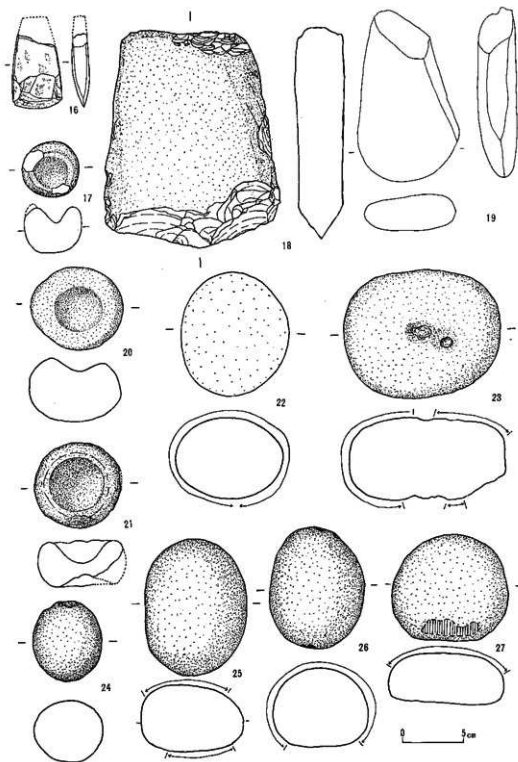
壺形土器は、6、30~51で、やや太目の沈線文、刺突文、縄文が目につく。沈線文のみのもの(30~32)もあるが、多くは沈線文と刺突文(33~37)で飾られるもの、沈線文と縄文(46~51)が施されるものというように文様が組み合わされている。中には48、49のように三つとも組み合わされているものもある。これらは個体の違いは勿論のこと、同一個体でも部位による違いがあるものと思われる。弥生期の土器は発掘調査された黒沢川右岸遺跡のそれと同一内容である。

石器は、第13・14・15図の1~33である。先記したように明らかに縄文期や弥生期と判るものもあるが区別し難いものもあるので一括して図示した。

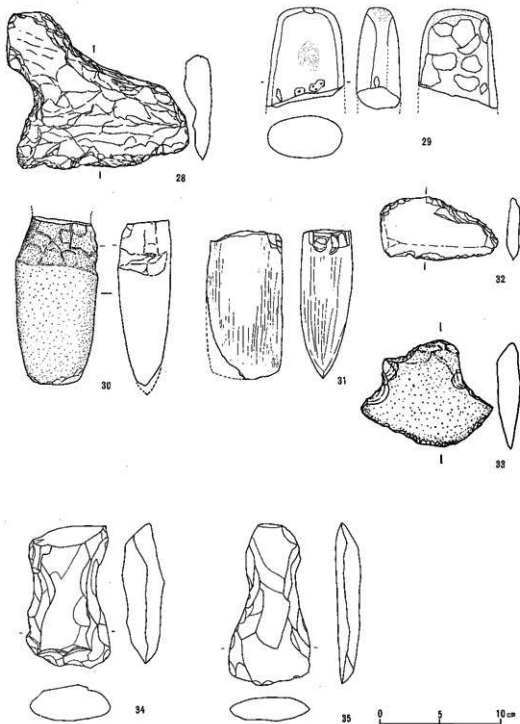
1~14・18は打製石斧であり(図版4上段と図版5)、使用によるのか欠損品が多い。18は大型品で巾広く重量感のあるもので、自然面を多く残すが両面から調整した楔形の刃をもっている。石質は粘板岩(3、6、18)、チャート(14)、層状砂岩(5、7、10)、砂岩(12)、で他は細粒砂岩製である。15は砂岩製の不定形石器、19は珪質砂岩の敲打器である。23は両面に凹みをもつ凹石であるが両面とも磨かれていて磨石としての役割も果たしている。17、20、21は臼状の凹石で安山岩製である。22、24~27は磨石(図版4下段)であり、24、26には打痕がみられることから敲石としての使用も考えられる。16は小形定角式磨製石斧、29~31は磨製石斧の欠損品であり、30は挟入りである。28は大形石匙の形態をとるが、33の有肩扇状石器と同様な用途が考えられる。33の刃部には使用による磨滅がみられる。32は半磨製ともみられる打製石包丁で、刃部には使用による磨滅がみられる。



第13図 堂原遺跡出土石器その1 (1 : 3)



第14図 堂原遺跡出土石器その2 (1:3)



第15図 堂原遺跡出土石器その3 (28~33)、赤坂西遺跡出土石器 (34、35) (1 : 3)

平安時代

第12図1～15の土師器、須恵器、灰釉陶器があるが、完形品はなくいずれも図止復元したものである。

1～4は土師器杯で口径約12cm、高さ3.5～4cmを計る。1、2、4は糸切底で底径5cm前後である。5～7は高台のつく土師器碗であり、5は口径16cm、器高5.5cmで内面に煤の付着がある。底部はいずれも糸切底に高台を付けたものである。9、14、15は土師器甕である。9は口径19.5cm、底径11cm、器高17.5cmの小形甕で横方向に調整痕が残る。15は底径9cm、推定器高は48cm、口径30cm程の大形甕で、胴部上部には斜め方向、それに続いて底部近くまでに縦方向の調整痕がみられる。内面底部付近には煤の付着があり煮沸用であったことが判る。14は大形甕の底部片である。

須恵器には、8の台付杯がある。高台部の径10.6cmのものを推定復元したが、器高、口径等不明である。

10～13は灰釉陶器で、10は碗、11～13は皿である。

中世以降

内耳土器(16)、灰釉陶器の鉢底部片(17)、陶器の鉢^{ハカバ}底部片(18)、播鉢^{フクハ}(19)の底部片がある。内耳土器は口径41cm、器高18.5cm、底径33cmのものであるが、他は器形全体は不明である。

以上、本遺跡出土の各期にわたる遺物について列記したが、それは各期にわたって人々の生活があったことを物語るものであり、黒沢川の氾濫を心配する地であるというよりはむしろ積極的に川水を利用した居住し易い土地であったと考えられる。注目したい遺物として、たった一片ではあるが繊維土器と多量の弥生中期の土器、石器類がある。繊維土器は現在までに採集された遺物の中では最も古く、この地への人々の往来を示す上限の資料といえる。弥生中期土器は黒沢川右岸遺跡のそれと同内容をもつもので、弥生文化の本郡への移入と定着を究明する貴重な資料である。土器底面についた布痕から技術的にも高度な紡織が推察されるし、打製石包丁は米作りを示すもので、その文化内容を知るために欠くことのできないものを得ているわけである。天竜川流域に多い有肩扇状石器の本遺跡での存在は、その分布を考える上で興味深い。

これらの遺物は先記したように点に近い範囲での出土である。面としての調査がほしい遺跡であるので住宅等新改築時には注意したいものである。

かずさやしき
6、上総屋敷遺跡

(三郷村遺跡番号No22)

1、所在地

三郷村大字温2070番地～4382番地一帯 (上長尾)

2、遺跡地

上長尾諏訪神社北西の県道小倉線沿いに共同墓地があるが、本遺跡はその周辺から神社北にかけての一角である。かつて宮北遺跡と呼んだものも含まれている。黒沢川扇状地の扇端部に当たり、同川の氾濫を受けた地であると同時に自然流のあった所である。遺跡名の呼称となった上総屋敷は長尾上総守なる中世土豪の屋敷があったことに由来している。

本遺跡の南方には堂原遺跡が、東方には栗の木下遺跡が続く地である。

3、時代

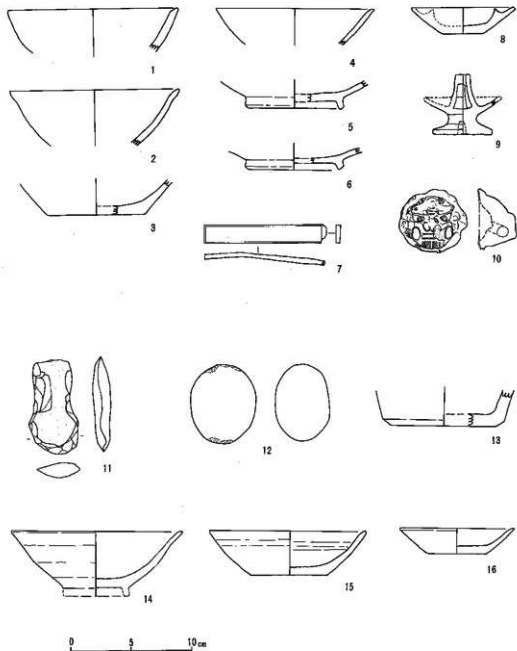
縄文時代、平安時代、中世

4、遺物

水道敷設工事の際に土師器杯、須恵器片、内耳土器（中世）の出土をみている。

今回図示したものは第16図11～13の3点のみである。11は砂岩製の打製石斧であり、12は花崗岩製の磨石である。磨石は両端に敲石として使用したのか打痕がある。共に縄文期の遺物である。13は土師器の底部片で推定径9cmである。堅く焼きしまっている。

図示し得なかったものに、磨滅した縄文中期土器片、土師器甕片、須恵器大甕片がある。



第16図 栗の木下(1~10)・上総屋敷(11~13)・及木西村遺跡出土遺物(14~16) (1:3) (14~16は降旗弘氏所蔵)

7、栗の木下遺跡 （三郷村遺跡番号No18）

1、所在地

三郷村大字温2150番地～2219番地一帯（下長尾）

2、遺跡地

温農協の北を走る県道小倉線の北方で小田多井堰を挟んだ東西一帯の水田・家屋地域（三沢薬局辺まで）が本遺跡地である。黒沢川の扇端部に当たり、かつてはその流域となった地である。

西方に上総屋敷遺跡、北方には坂がいと遺跡から楡遺跡群が続く地である。

3、時代

平安時代、中世、江戸時代、

4、遺構・遺物

昭和30～31年にかけての家屋建設や水道工事の際に遺物の出土があった。土師器坏、甕、須恵器杯、大甕、灰釉陶器碗、青銅製品、佛供具、内耳土器等である。今回図示したものはこの際出土のものである。

昭和62年11月、圃場整備事業のため試掘確認調査を実施したが、この時には堰西側の水田より、平安期の竪穴住居址が3軒確認されている。水田耕作土、水田床土、礫混り黄褐色土の土層となっており、竪穴住居址はこの黄褐色土を掘り込んで作られていて黒色土の落ち込みがみられた。この時に西方農免道路周辺まで調査したが、集落はそこまで及んでいないことが判明している。

また平成6年12月には県道拡幅工事に伴って、温農協北から上長尾の農道信号交差点にかけて、更に平成8年3月には三沢薬局西隣のアパート建設に伴って立合調査を実施したが、この2地点からは遺構の検出や遺物の出土はなかった。これにより本遺跡の集落範囲の南から西方が或る程度判明したと言えよう。

今回図示した第16図1～10は、先記したように昭和30年12月に出土したもので、土器片にその記名があり、民俗資料館に保管されていたものである。

1、2は土師器坏の口縁部片で、2は内黒になっている。2169番地の記名がある。3は須恵器杯の底部片、4は同口縁部片で三沢薬局前水道工事の記名がある。5、6は、2178番地の記名のある灰釉陶器の碗か皿の底部片である。いずれも破片で全体器形は判らないが平安期に比定されるものである。

7は刀子の柄と考えられるもので青銅製品である。芯の鉄を包む形になっており、

巾1.5cm、長さ10cm程である。余り見かけない遺物であるが、松本一ツ家遺跡に類例がある。15～16世紀中頃のものと思われる。

8は受け口付きの灰釉灯明皿で完形品である。口径8.5cm、底径3.5cm、器高2.1cmの小形品で瀬戸美濃系製品であろう。9は乗^{ひょう}觸^{じく}で皿の部分が僅か欠けるが、器形全体のよく判るものである。底径4.8cm、高さ5cm、中央立ち挙がり部の口径1.2cmを計る小形の陶器で、底面はざらついた面であるが全面に黄褐色の鉄釉が施されている。中央立ち挙がり部には1箇所に窓があいており、先端部は焼けている。瀬戸美濃系のもので、灯明皿と共に18世紀の所産と考えられる。

10の獅子頭は、瓦質火鉢の飾り部分ではないかと思われる。出土例の少ないもので類例を持ちたい。18世紀以降のものであろう。

以上本遺跡出土遺物を列記したが、図示し得なかったものに、須恵器大甕片や壺片の他に、18世紀代の灰釉丸碗片、天目茶碗片、染付湯呑片等がある。これら平安期（10世紀代）から江戸期に亘る遺物により、当地が生活立地として良好な地であったことがうかがわれる。水田下や宅地域下には遺構遺物の埋蔵があることゆえ開発等現状変更する場合には充分留意したい遺跡である。

8、^に楡遺跡群 (三郷村遺跡番号No15,16,17,26)

中村 (No15)、小路 (No16)、上手 (No17)、道下 (No26)

1、所在地

三郷村大字温	中村遺跡	4935番地～5626番地一帯
	小路遺跡	5408番地～5645番地一帯
	上手遺跡	4995番地～5590番地一帯
	道下遺跡	4461番地～4489番地一帯

2、遺跡地

楡地区を代表する住吉神社は、中世には住吉庄18郷の総社とされ、古い歴史をもっている。黒沢川の氾濫原に広大な社叢をもって氾濫を防ぐかの存在にみえる。この神社の東方一帯の水田、住宅地域が遺跡地で、上手、中村、小路、道下の各遺跡が近接している。これらは平安期からの連続する内容をもつ遺跡であることや精査すれば更に遺跡範囲の拡大が予想されて広く集落を考える必要があること等から本資料集では楡遺跡群として一括して把握することにした。

遺跡群一帯は黒沢川扇状地の扇端部に当たり黒沢川の氾濫を受けた地であると共に、その自然流路を利用して居住が始まった地と考えられる。道下遺跡の発掘調査ではそれを示す流路と思われる内容が検出されている。

西方には三角原遺跡、南方には坂がいと遺跡や栗の木下遺跡、北方には丁田遺跡が所在するという遺跡密集地域である。丁田遺跡は楡遺跡群に含めてもよい位置にある。

3、時代

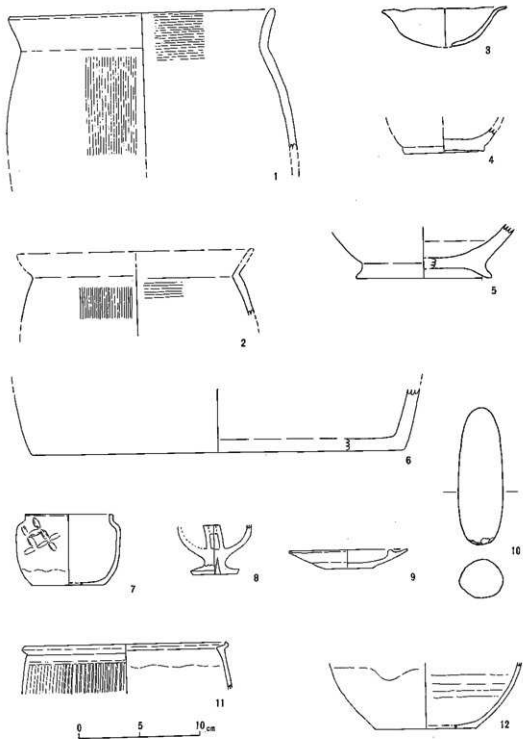
縄文時代、平安時代、中世、江戸時代

4、遺構・遺物

(1) 中村遺跡

昭和30年11月の水道工事の際に出土したものを地元の日比野允夫氏が適切に地点をおさえて収集され保管している。この際、石曾根・島田両氏宅の中間地点やや西寄りから炭化物の出土と共に炉址の存在が確認されている。

また、昭和59年9月、日比野允夫氏宅前の畑にフレーム温室の穴掘りをした時、約3尺下からかたまって遺物をみた。残念ながら遺構の確認はない。第17図に図示したものが、それら遺物である。



第17図 楯遺跡群 中村遺跡出土遺物 (1 : 3) (日比野允夫氏所蔵)

1、2、4は、土師器甕の口縁部と底部の破片である。1は推定口径22cm程で胎土・焼成共に良好で調整痕が器外面ではくびれた口縁部下から縦方向に、器内面は口縁部のみ横方向にみられる。4は糸切底の底部片で1や10の敲石と共に島田又一氏宅西道路下の炉址から出土したものである。敲石は砂岩製で一方に使用を示す打痕が残っている。

3は口径10.3cm、高さ3.2cmの土師質灯明皿であろうか。口縁は五弁花のように五つの波状を呈し、底部には径7ミリ程の円形の穴があり、その周辺に輪状に剥げ落ちた痕跡がある。3ミリ程の薄い器厚で胎土緻密であり器内外黄褐色である。煤の付着と外面には薄く剥げた漆状の被膜がある。中央の穴に棒状のものを押し入れて灯明皿として使用したものではないだろうか。(図版7)

5は灰釉の壺の底部片と思われる。表面が粗く、やや雑な作りである。6は内耳土器の底部片で推定底径31cm程の土鍋である。7は瀬戸美濃系弥七田織部の陶器片である。推定口径7cm、底径6cm、器高5.8cmで白い釉薬地にえんじ色の花卉状の模様と口縁下の緑色が鮮やかである。17世紀後半から18世紀の所産であろう。8は瀬戸美濃系陶器の乗^{ワラ}燗である(図版7)。一部欠けているが全体器形の判るものである。台部底径4cm、中央立ち挙がりまでの高さ4cmの小形品で内外黒色の鉄釉が施されている。中央立ち挙がりは上部は一周しているが下部は窓開きになっている。底面には穴があり、ロクロ糸切りが残っている。18世紀の所産であろう。

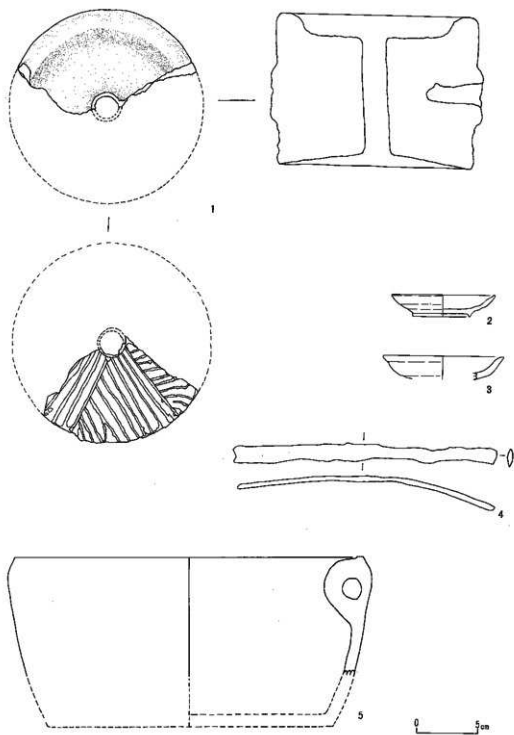
9は口径9.8cm、底径4.1cm、高さ1.5cmの受け口のある灯明皿である(図版7)。内側は黒褐色の鉄釉が施され、外側も口縁部のみに釉がかかっている。その下部は褐色で黒色煤の付着がみられる。底面にはロクロ痕が残る。19世紀代に在地窯で生産されたものらしい。11は推定口径17cm程の^{オボロなべ}行平鍋片であろうか。胎土緻密で焼きしまっており、器外面には赤褐色、器内面には黄褐色の釉がみられる。19世紀代の所産である。

12は薄い器厚の鉢の底部片であろう。破片上部に黄褐色釉が一部分みられる。以上は、日比野允夫氏宅前畑出土である。

(2) 上手遺跡

昭和30年の水道工事の際に出土したものを日比野允夫氏が採集保管している。第18図1～5である。1は茶白の上白芍程の欠損品で安山岩製である。推定径16cm、高さ12.5cmの大きさになり、挽き面は数分割されていて、一分割には10本前後の挽き目が刻まれている。

2・3は瀬戸美濃系の灰釉丸皿で、2は(図版7)口径8.7cm、底径4.8cm、器高1.9cmの、3は推定口径10cmの小皿である。胎土・焼成よく薄黄色を呈している。16世



第18圖 櫛遺跡群 上手遺跡出土遺物（1：3）（日比野允夫氏所藏）

紀中頃から後半の作であろう。丸山善作（丸善商店）氏宅前の地下3尺より出土したと記されてある。土層は上2尺は礫土、3尺辺は黒土、皿の下3尺5寸辺には鉄分を含むシキがあり、4尺には砂が出ると記されている。4は長さ22cm、巾約1.5cm、厚さ5ミリ程の鉄片である。使途不明。上手火の目の北からの出土とある。

5は内耳土器の口縁部片で、甕儀一氏宅北道路の出土である。推定口径29cm程で胎土・焼成共に良好で、器外面は黒色で煤の付着がある。内面は薄茶褐色である。この他に図示し得ない破片等があるが、特筆すべきものに、輸入品と思われる青磁碗の口縁部片がある。

(3) 小路遺跡

昭和28年に榎5535-2 藤松吉人氏宅地の地下3尺から遺物出土があり、日比野允夫氏が採集保管している。第19図1、2の縄文土器底部片と打製石斧である。土器底部片は大分摩滅しているが底面には網代痕が残る。打製石斧は粘板岩製で半欠品である。出土の際、木炭と焼土の層が5cm程ずつ確認されている。他に糸切痕の残る土器器片の出土もあった。

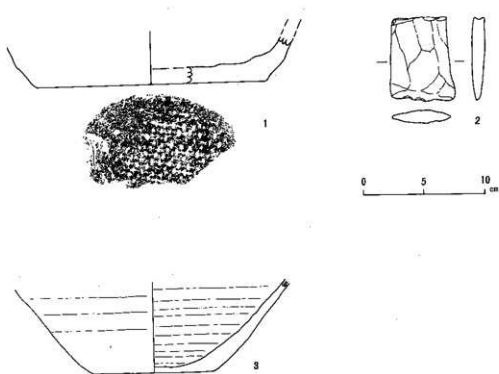
(4) 道下遺跡

昭和24年に藤沢宗平・中田令夫両先生を中心にして発掘調査され、2軒の竪穴状遺構と柱穴列が検出されている。出土遺物は少なく僅かに土器器片、緑釉陶器片があるだけである。既刊三郷村誌Iに記載されているので本資料集には再掲しない。

(5) 丁田遺跡

昭和30年の水道工事の際、野本茂氏水田（5825-3）の道路から遺物出土があり日比野允夫氏によって採集保管されている。地下2尺5寸の粘土質層からの出土である。第19図3であり、捏鉢として使用されたものであろう。

以上榎遺跡群出土の遺物について記したが、日比野允夫氏の採集保管によるものが全てで、小さな破片にまで配慮したその的確な業績に敬服するものである。水道工事という限られた幅の溝であるため遺構の検出は望めないが、炉址、焼土、炭化物の確認があつて、この検地区が広範に亘る遺跡地であることが証されたわけである。出土遺物から縄文期にも人々の訪れがあつたが、平安時代後半からは集落構成がみられ、現在に至るまで人々の生活が営まれた地であることが判る。住吉庄の実態を知る上でも重要な地であり、今迄の点ないし線的な調査から面的な調査を期待したい遺跡である。



第19回 椽遺跡群 小路遺跡(1~2)・丁田遺跡(3)出土遺物(1:3)
(日比野允夫氏所藏)

さんかくばら
9、三角原遺跡 (三郷村遺跡番号No14)

1、所在地

三郷村大字温6587番地～6717番地一帯 (楡)

2、遺跡地

住吉神社の西方、黒沢川が新堀堰に接続する左岸の僅かに残る河岸段丘上に立地している。大規模農道の住吉神社西交差点から東小倉へ通じる道路の北側一帯で、畑地帯と水田地帯とに分かれる地点であり、遺跡はその畑地帯にある。

住吉神社を挟んだ東方には楡遺跡群があって遺跡の密集する地である。

3、時代

平安時代、中世

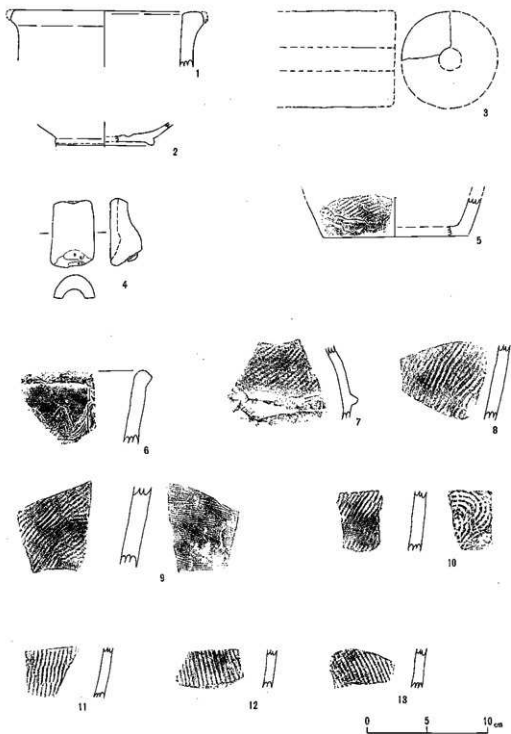
4、遺物

第20図に図示したもので日比野允夫氏の採集保管である。採集は昭和10年頃であり、氏のメモには「住吉神社西北、飯田虎男氏北西鉄塔付近畑 秋山光男6708、須恵器等数多い中にカナクソ等が混じる」ことが記されている。

1、5～13は須恵器の壺・甕の破片である。1は推定口径16cm程の壺の口縁部片であり、やや脆い焼成である。5は推定底径12cmの底部片で、底部近くまで敲目がみられる。7は四耳壺の破片で突帯が付けられている。9、10には器内外両面に敲目が施されている。

2は灰釉陶器皿の底部片で、糸切痕が残るもので高台は低い。白色を呈し胎土緻密である。3は藕かきの羽口と思われる破片である。円柱状の中央に直径2cm程の空気穴があるもので、穴の周辺は焼けて赤変している。大きさは不明であるが推定10cm程の円形であろう。4は不明土製品で、どのように図示してよいか迷う。凹んだ面には極細糸の布痕があり、膨らんだ一方には針のような細かい穴が2本通じている。

この他に図示し得なかったものに土師器杯・甕片、鉄釉の陶器片、溶滓等がある。藕の羽口や溶滓から鍛冶工房的な内容をもつ遺跡である。三郷村では特記すべき遺跡であり、楡遺跡群との関連もふまえて考えていきたい遺跡といえよう。



第20圖 三角原遺跡出土遺物（1：3）（日比野尤夫氏所藏）

なが おじょうし きた
10、長尾城址北遺跡 (三郷村遺跡番号No.29)

1、所在地

三郷村大字温1160番地～4262番地一帯 (上長尾)

2、遺跡地

野沢と上長尾集落の中間に当たる西方段丘上に長尾城址がある。黒沢川扇状地の扇端部で河岸段丘(はば)を利用して構築された城というより砦と呼んだ方がよいものである。この城址周辺が遺跡地であり、かつては自然流のあったことを示す地形が残っている。

南方には赤坂西遺跡、西方にはチンクラ屋敷遺跡や黒沢川右岸遺跡、北方には若宮遺跡や堂原遺跡が続くところである。

3、時代

縄文時代

4、遺物

中村太一氏採集の打製石斧がある。第77図1～3で、3は小形品である。石質は、1、3が層状細粒砂岩、2がチャートである。(図版6)

あかさかにし
11、赤坂西遺跡

(三郷村遺跡番号No.31)

1、所在地

三郷村大字温1040番地～1052番地一帯

2、遺跡地

室町集落を東西に走るメインストリートは赤坂を経て野沢の集落に続く。本遺跡は、この赤坂を登り切った西方平坦面に所在しており、黒沢川扇状地の扇端部に当たる所で、すぐ東には河岸段丘が続いている。現在リング畑になっている。

北方には長尾城址北遺跡が、西方にはチンクラ屋敷遺跡や黒沢川右岸遺跡が所在しているところである。

3、時代

縄文時代

4、遺物

三郷村誌に水谷清治氏採集の打製石斧が記されているが、今回はそれを図示した。第15図、34、35の2点で、共にホルンヘルスの岩石で作られている。34には使用による欠損が、35には磨滅がみられる。(図版6)

12、住吉竹原遺跡 すみよしたけはら (三郷村遺跡番号No32)

1、所在地

三郷村大字温6492番地～6542番地一帯

2、遺跡地

遺跡は黒沢川扇状地の扇端部に位置する原村の南西に所在している。ここは鳴沢川の川尻に当たるところで、かつて自然流のあったことを示す凹地状の地形を残していた。標高610～615mの平坦面であり、圃場整備されて現在は果樹畑等になっている。

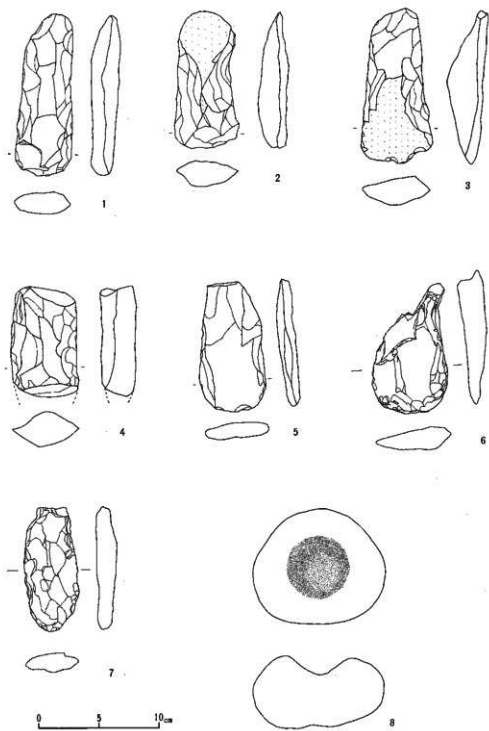
北西には鳴沢尻遺跡、東方には三角原遺跡、西方には千国橋北遺跡が所在している。

3、時代

縄文時代

4、遺物

土地改良事業の際に、相当量の遺物出土があったと聞くが、遺物の所在は不明である。今回、第21図に図示したものは、神谷(1～5)、寄藤美子(6～8)両氏の採集品である。1～7は打製石斧で、1～3はほぼ完形品であるが他は欠損部をもつ。8は石臼状の凹石である。石質は1、2、4が細粒砂岩、3、5が粘板岩である。(図版6)



第21图 住吉竹原遺跡出土石器 (1:3) (神谷氏、寄藤美子氏所藏)

13、ゆの久保遺跡 (三郷村遺跡番号No44)

1、所在地

三郷村大字小倉2687番地～6524番地一帯 (南小倉)

2、遺跡地

三郷村の西方山麓には、伝説の山「室山」がある。観光開発され念願の温泉掘削にも成功し、新しく変貌しようとしている地である。この温泉掘削地点の西方には室山の池があり、この周辺一帯が本遺跡地である。湯の久保なる地名の地点から温泉が出て興味深い。

本遺跡の南方には村史跡に指定されている南松原遺跡が、西方には中沢遺跡等が続くところで、遺跡の密集地帯である。

3、時代

縄文時代

4、遺物

三郷村誌 I には、本遺跡出土品に、中期土器、打製石斧、砥石が記されている。

今回図示したものは、第7図7～9の3点の打製石斧である(図版6)。7は細粒砂岩、8は細粒泥質砂岩、9は砂岩で作られており、いずれも使用によるのか欠損している。

ちくにはしきた 14、千国橋北遺跡 (新遺跡、三郷村遺跡番号No48)

1、所在地

三郷村大字温6252番地～6255番地一帯

2、遺跡地

千国橋から堀金村工場団地へ向かう道路と、大規模農道の住吉神社西交差点から東小倉へ通ずる道路との交差する付近が遺跡地である。黒沢川扇状地の扇央部近くで氾濫源となったところである。土地改良事業が行われて、果樹畑や普通畑が続く地であり、耕作者によって遺物採集が行われ新しく知った遺跡である。北方には住吉竹原遺跡、東方には三角原遺跡が所在している。

3、時代

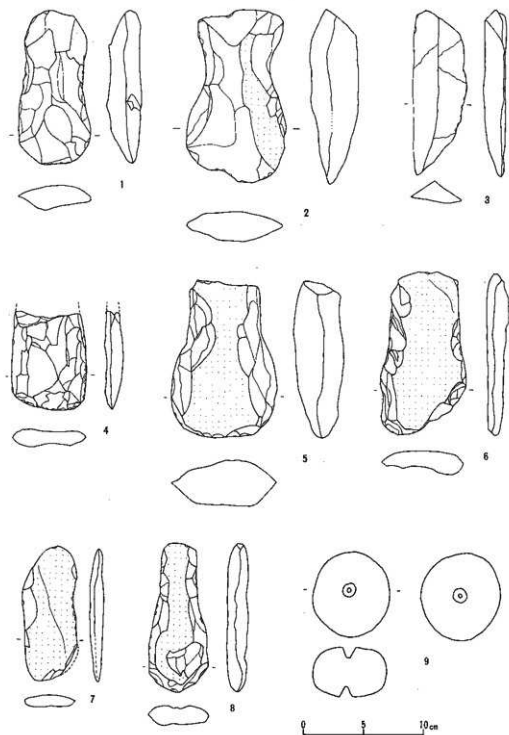
縄文時代

4、遺物

同地に畑を所有する種山重男（第22図4～8）、三沢晴勝（同図1～3、9）両氏の採集によるものを図示した。（図版6）

第22図3は砂岩の剥片石器で、弧状をなす方に使用痕がある。9は凹石で両面に深い穴を1つずつもつ。他は打製石斧で1、2、6、8は完形品に近いものである。石質は、1、6、8が細粒砂岩、2が砂岩、4が硅質細粒砂岩、5がホルンヘルス、7が粘板岩である。

石器の他に土器底部片が1片ある。



第22圖 千國橋北遺跡出土石器（1：3）（種山重男氏、三沢晴勝氏所藏）

15、^{にしまさ}西牧遺跡

(三郷村遺跡番号No.34)

1、所在地

三郷村大字小倉846番地～895番地一帯

2、遺跡地

遺跡は北小倉集落の東方、黒沢川扇状地の扇中央部に所在している。北小倉無線中継所の南方約200m辺で、土地改良事業が行われて、現在は果樹畑が続いている。

西方山麓には、一本松、鳴沢A、Bの各遺跡が、南方には地藏沖、犬塚の両遺跡が続くところである。

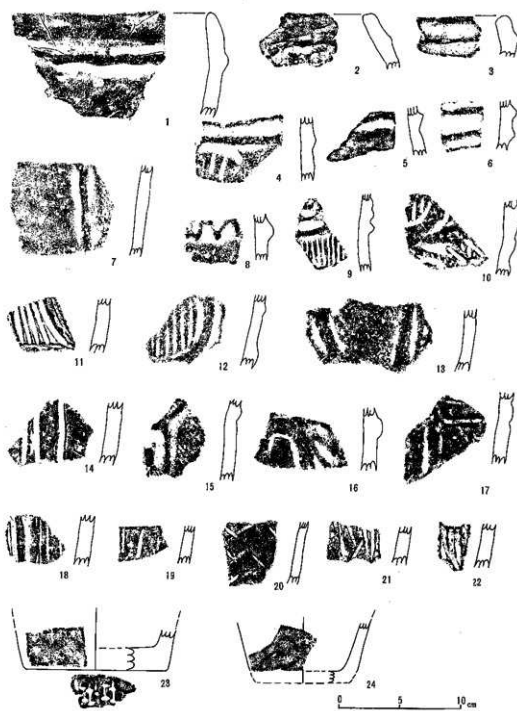
3、時代

縄文時代

4、遺物

民俗資料館に保管されていた土器片で、中に上條勘一の注記あるものがある。

第23図に図示した1～3は、無文帯の口縁部片である。この下の胴部に篋状工具で渦巻文、綾杉文等沈線文が施される土器で、4～22にそれがみられる。中期後葉Ⅲ期に比定される土器である。23、24は底部片で、23には網代痕が残る。



第23圖 西牧遺跡出土土器拓影(1:3)

16、^{おおむろ}大室遺跡 (新遺跡、三郷村遺跡番号No.49)

1、所在地

三郷村大字小倉3127番地～3129番地一帯 (南小倉)

2、遺跡地

黒沢川扇状地の扇頂部に位置する地点で、大室集落にある琴平宮^{ことひらのみや}の北方山麓が遺跡地である。山麓線(主要地方道塩尻・鍋割・穂高線)の西側、山際のゆるい傾斜地で、標高765mの地にある。現在果樹園になっており、採集者の話によると、深く埋もれている可能性があり、新しく知られた遺跡である。

南方、黒沢川沿いには浄水場東遺跡、北方には中沢遺跡が続き、山麓遺跡群の南端に位置する遺跡の一つである。

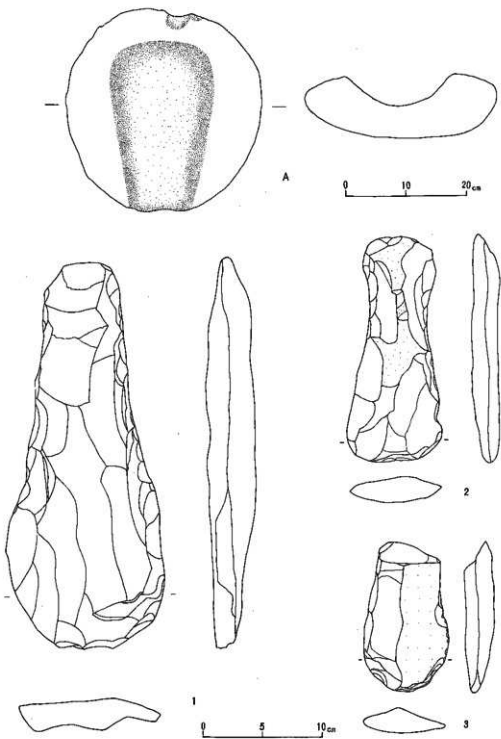
3、時代

縄文時代

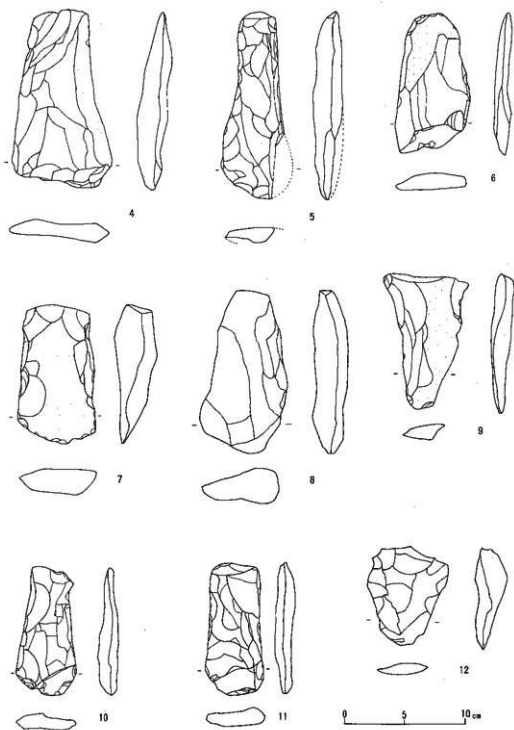
4、遺物

松岡勝人氏採集保管によるもので、第24～26図に図示した1～16である。(図版8) 打製石斧(1～8、10、11、13、14)、不定形石器(9、12)、敲石(15)、臼状の凹石(16)がある。この中で特に注目したいのは、1の打製石斧である。長さ32cmと超大形で重量1.8kgと重い。一般的な打製石斧の2～3倍の大きさである。本村からは類例が東小倉、南松原、黒沢川右岸の各遺跡で出土している。どのような使われ方をした打製石斧なのか興味深い。

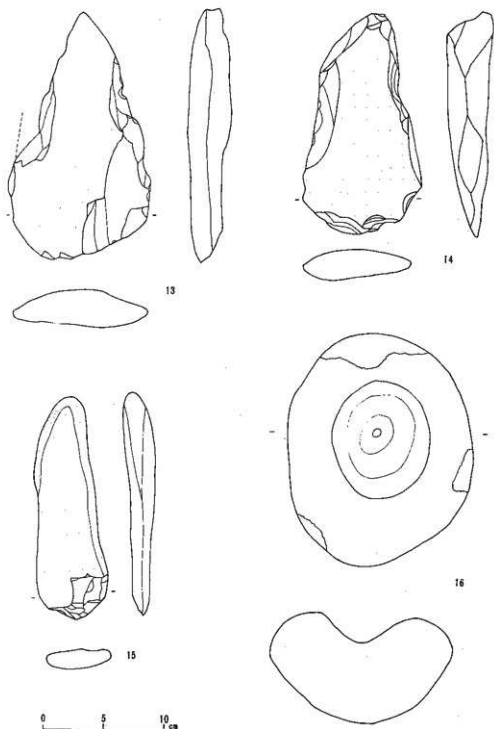
石質は、粘板岩(6、13)、砂岩(9、11)、硬砂岩(7)、チャート(8)、葦青石粘板岩(15)、石墨片岩(12)、安山岩(16)、であり、他はホルンヘルスである。



第24回 鳴沢尻 (A)・大室遺跡 (1~3) 出土石器 (Aのみ 1: 8、1~3-1: 3)
 (Aは丸山源一氏、1~3は松岡勝人氏所蔵)



第25図 大室遺跡出土石器 (1:3) (松岡勝人氏所蔵)



第26图 大室遺跡出土石器(1:3)(松岡勝人氏所藏)

およびき にしむら
17、及木西村遺跡 (新遺跡、三郷村遺跡番号No50)

1、所在地

三郷村大字明盛4119番地一帯 (及木)

2、遺跡地

一日市場集落と中萱集落の中間に及木集落が存在するが遺跡はこの水田地帯である及木集落にある。降旗 弘氏宅で基礎工事をした際、土師器の出土をみて新しく知った遺跡である。

西方には楡道下遺跡(発掘調査時は及木遺跡と呼称した)があって、広く捉えれば楡遺跡群の東方に位置する一つとも考えられよう。

3、時代

平安時代

4、遺物

降旗 弘氏宅の地表下85cm程から出土したもので、第16図14～16に図示した。三点とも土師器で、14は高台付椀である。口径14cm、器高5.3cm程で器外面は灰褐色の内黒椀である。糸切底に高台を付けてある。15は杯で口径13cm、底径6.5cm、器高3.5cmを計る。明褐色を呈し、底部は糸切痕が残る。16は口径9.5cm、底径5cm、高さ2cmの小皿と呼んだほうがよいもので糸切底である。

図示したものは三点のみであるが、この他にもおそらく破片となって出土したものもあり住居址の存在が考えられる。及木地区の開発を知る上でも大事にしたい資料といえる。現状変更等注意したい。

ひがしおぐら 18、東小倉遺跡

(三郷村遺跡番号No.6)

1、所在地

三郷村大字小倉1139番地～2450番地一帯（東小倉）

2、遺跡地

黒沢川左岸に位置する、アルプス学園の北方一帯が遺跡地である。広範囲にわたって縄文時代前期・中期・後期の遺物を出土することで周知された遺跡である。

この地は、江戸時代には「松本藩のお林」、明治時代には国有林となって「小倉官林」と呼ばれた地である。大正時代になって払下げがなされて、開拓が大正9年頃から始まったが、その当時より多量の遺物出土があった。「開墾地」と呼ばれ多くの人々に採集され保管されているが、その全てを知ることはむずかしい。保管された遺物に「開墾地」と注記されたものが幾つかある。

3、時代

縄文時代

4、遺構・遺物

多量の遺物出土をみた本遺跡での発掘調査は久しくなかったが最近になってその機会に恵まれた。

昭和61年2月には、村道514号線の工事に伴う立合調査が行われた。この時は若干量の縄文中期後半の土器片の出土をみたが遺構の確認はなかった。

平成5年5月に行われた発掘調査では縄文中期後半の竪穴住居 4、小竪穴1、土坑 2などの検出をみた。平成8年12月に行われた排水路工事に伴う立合調査では、同時期の竪穴住居 5、土坑6の確認を得た。その結果、本遺跡地での縄文中期後半集落の拡がり、南北110m、東西130mの範囲に及ぶことが明らかにされている。この調査結果については既に三郷村教育委員会より「東小倉遺跡」として2冊の報告書になって刊行されているので、ここでは再掲せず、そちらをご覧ください。

平成5年の発掘調査報告書では、調査遺構・遺物の他に既出遺物として一項を設けて若干量を報じたが、記載できずに残されたものが相当数あった。本資料集へはこれら残されたものをでき得る限り載せるよう努力したが、まだ残るものがあって残念に思う。裏をかえせば東小倉遺跡が如何に遺物出土量が多いかということにもなる。今回は民俗資料館に保管されていたもの、日比野允夫氏採集保管のもの、掘

内國利氏採集で教育委員会へ寄贈のものを中心に図示した。石器、石製品が中心で、土器、土製品が1点ずつである。

石器、石製品には、打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、石皿、砥石、石臼、蜂巢石、石棒、丸玉石がある。

打製石斧は第27図1～3、第29図33のみ図示したが、この他に堀内國利氏採集品が多量にある。多量な打製石斧のあり方は工房址を想定させるほどで本遺跡の遺物の一特長である。ここで注目されるものに1の大形品がある。長さ31cm、重量2.1kgというものである。類例が対岸の黒沢川右岸遺跡や南松原、大室の各遺跡にもあってどのような使われ方をしたのか興味深い。

磨製石斧は第27図4～9、第28図12～24、第29図25～32である(図版21)。完形品が少なく、使用によるか欠損品の多いのが注目される。乳棒状石斧(12、13)と定角式石斧の両者があるが数の上では後者の方が多い。また定角式には5～9のような小形のものがあり、これらは鑿形石斧とも呼ばれるものである。石質は、砂岩(12、19、26)、流紋岩(18、27、28)、輝石(21)、珪長石(22、24)、曹長石(23、31)、蛇紋岩(29)、斑縞岩(30、32)であり、研くと光沢をみせる岩石が多く使われている。姫川流域から運ばれたものが多いことがわかる。

敲石は第29図34、35で使用のためか欠損している。34は斑縞岩、35は砂岩である。

磨石は第29図36、37、第30図38、40である。いずれもよく研磨されて、すべすべしている。38には端に打痕があり、敲打具としての使用もあった。そのためか36、37はきれいな割れ口をみせている。石質は36が斑縞岩、37、38が砂岩、40が安山岩である。37には「小倉開墾地、昭和8年8月」、38には「開墾地」の注記がある。

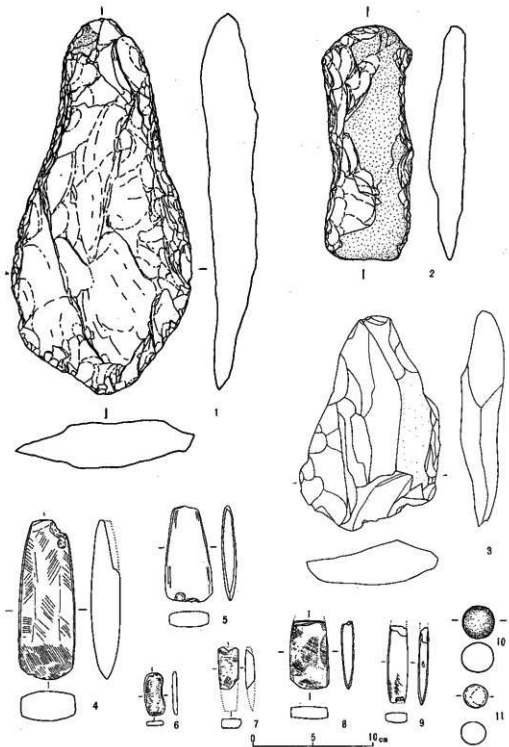
石皿は第32図50～52、54、第33図55～61である。50、52、54(図版22)は完形品であるが他は欠損している。縦方向に割れたもの(55)より横方向に割れたものが多いことに気づく。すべて安山岩製であり、51には「昭50、1 東小倉降旗弘志」の、57には「大正8年小倉開墾地」の注記がある。

砥石は第31図49と第32図53の二点がある。49は欠損しているが巾5cmの断面長方形をなす平砥石で、一面の中ほどに巾2cm程の研磨面をもっている。層状砂岩製である。53(図版22)は長さ25cmの砂岩の中央に長さ21cm、最大巾約2cmの凹んだ溝をもつもので玉砥石と呼ばれるものである。

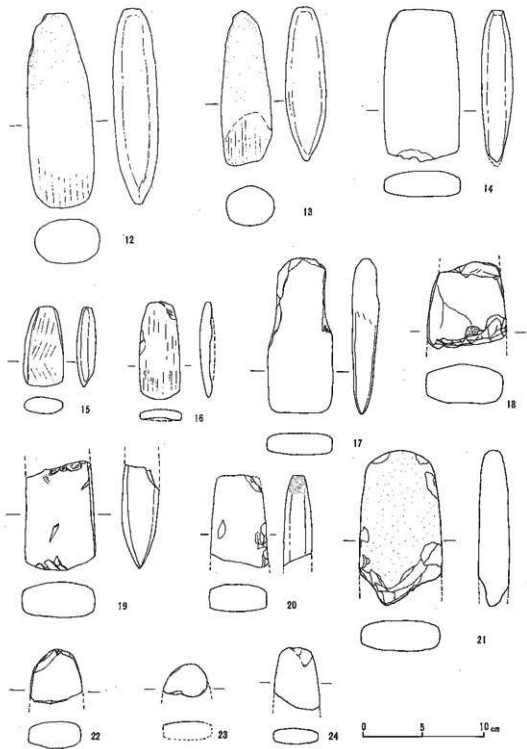
石臼は第30図39で、真中に径7cm、深さ3cm程の一穴をもつ。

蜂巢石は第31図48で、長径18cmの安山岩に20個程の凹みをもつもので「開墾地」の注記がある。多孔石とか雨垂石とも呼ばれるもので用途不明である。

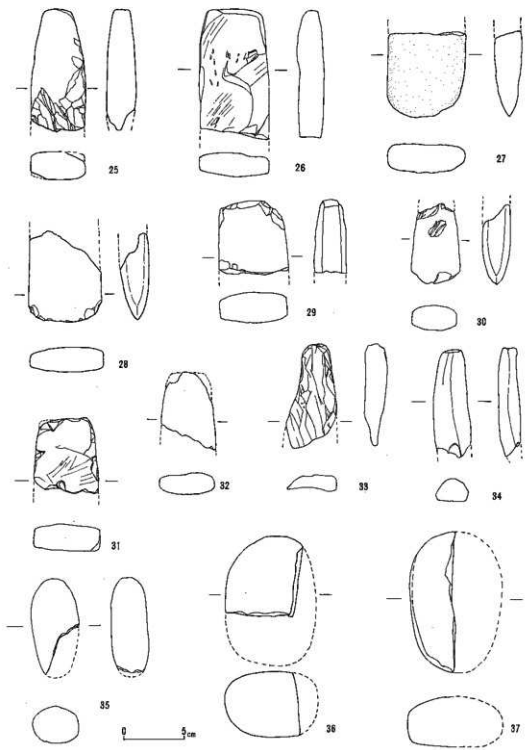
石棒は第31図43～47がある。43、44(図版22)は有頭であり、長さ21cmと23cmを計る。共に一部分が欠けている。46は棒状のもの、45、47は欠損品である。いずれ



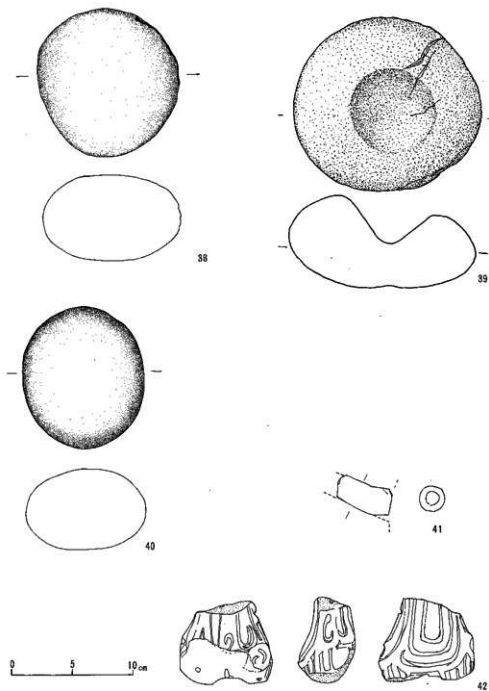
第27図 東小倉遺跡出土石器その1 (1:3)



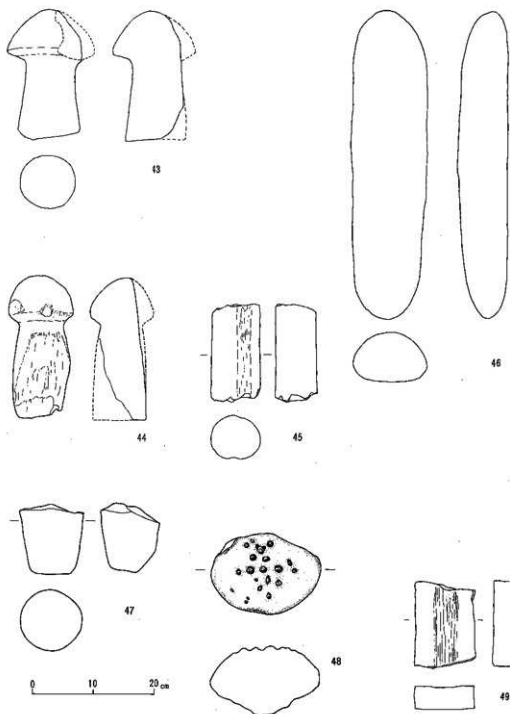
第26図 東小倉遺跡出土石器その2 (1:3)



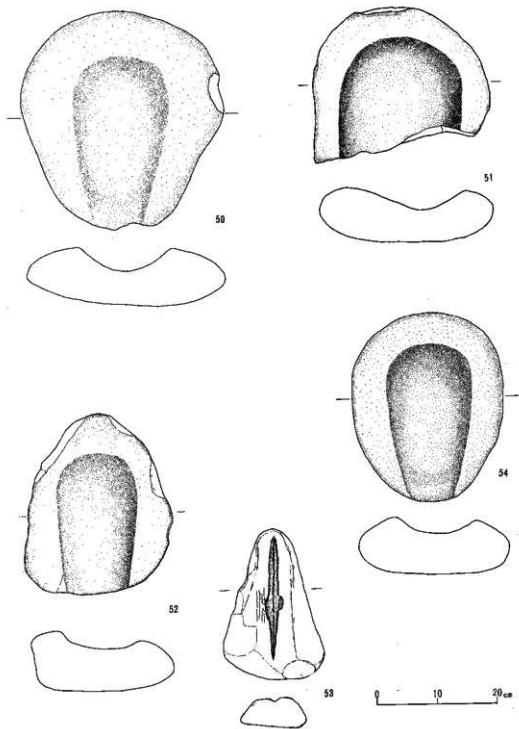
第29図 東小倉遺跡出土石器その3 (1:3)



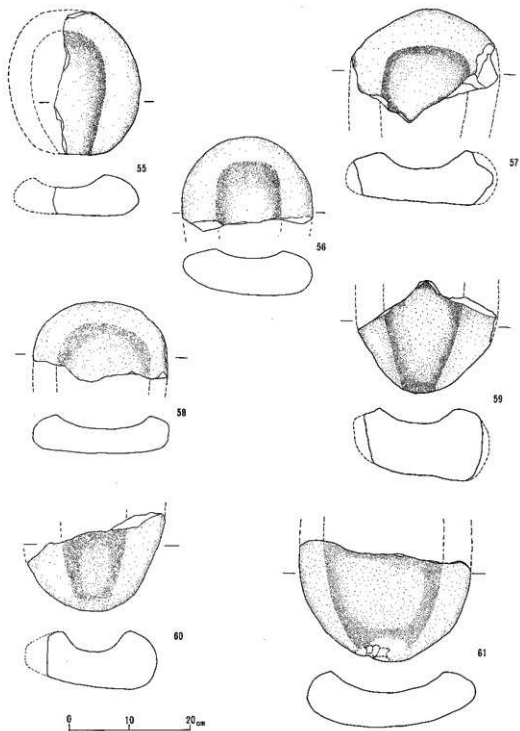
第30図 東小倉遺跡出土石器その4・土製品(1:3)



第31図 東小倉遺跡出土石器その5 (1:6) (49のみ1:3)



第32図 東小倉遺跡出土石器その6 (1:6)



第33図 東小倉遺跡出土石器その7 (1:6)

も堀内國利氏採集品であるが出土状況等不明である。石質は43が砂質凝灰岩、44、45が点紋緑泥片岩、46、47が砂岩である。

丸玉石は第27図10（径2.5cm）、11（径2cm）のもので、古墳時代の装身具としての丸玉とは異なる。

これらの他に第30図41の注口土器の注口部と42の土偶腰部がある。共に日比野允夫氏採集品であり、注口部は東小倉遺跡では数少ない資料で貴重である。土偶腰部には上体から続く沈線や勾玉状ないし蕨手状の沈線がみられる。股の付根から胴部中央へ完通する穴と、両脚部付根にそれぞれ穴がある。中期後半所産の土偶である。

以上図示した遺物であるが、既報告遺物の補充資料となるものである。それにしても本遺跡における遺物の種類の多さ、打製石斧の多量さ、磨製石斧の多さ、信仰関係遺物（石棒、土偶、石冠、三角壘形土製品、丸玉等）の多さに驚かされる。

みなみまつばら

19、南松原遺跡

(三郷村遺跡番号No10)

1、所在地

三郷村大字小倉1877番地～2419番地一帯 (南小倉)

2、遺跡地

黒沢川が山地より平坦部に流れ出たわずか下流左岸に伝説の山「室山」がある。この山頂には、保養施設「室山荘」があったが、この度新築なって農業体験実習館「ファインビュー室山」が開業している。西側からは温泉掘削に成功し、変貌著しい山である。

本遺跡地は、この室山と黒沢川に挟まれた畑地帯にあり、黒沢川の流路のように西から東へ緩く傾斜した地形をなしている。東小倉遺跡のところでも記したが、ここもかつて小倉官林と呼ばれた所であり、遺跡名のように松原の続く地であった。大正8年から始まった開拓によって畑地となり、現在は果樹園が多く営まれている。

室町方面からの道路が黒沢川にかかる赤沢橋を渡り、段丘を登り切った交差点に村史跡指定南松原遺跡の標柱が立てられてその所在を示している。昭和45年にこの農道工事の際、縄文中期の竪穴住居址が発見されたので発掘調査を実施し、その集落の一端を露呈することができた。

集落の中心は農道の東側になる模様であり、サカタ種苗にまで及ぶかは未確認である。黒沢川に寄った段丘沿いに近い地点にあることから、同川の水が生活のための水であったことが容易に理解できる地である。

上流方面には黒沢浄水場東遺跡、東方には東小倉遺跡が、対岸の西方には長者屋敷遺跡、東方には調整池北遺跡や黒沢川右岸遺跡等が続くところで遺跡の密集する地域である。

3、時代

縄文時代

4、発掘調査の経緯

本遺跡は昭和45年12月に三郷村教育委員会によって発掘調査が実施された。諸種の事情で発掘調査報告書は刊行されていないが、樋口昇一氏により「三郷村誌Ⅰ」にその結果が記載されている。しかし、報告書ではないため調査の経緯等は記されていない。当時調査に当たった教育委員会や調査団長樋口昇一氏、調査主任土屋長久氏、及び、調査員によって原稿執筆がなされたり、村長の序文も書かれて報告書

刊行の準備が進んでいた。ここではそれをもとに経緯を記して記録にとどめておきたい。

(1)発掘調査に至るまでの経過

昭和45年12月9日

県教委社会教育課文化財担当 金井汲次指導主事から埋蔵文化財包蔵地所在地番5251番附近の現在農免道路工事中の場所から縄文時代中期の住居址が出ていると豊科建設事務所大久保技師から連絡があった旨電話にて報告があり、すぐ調査するよう指示された。そこで午後大久保技師、村文化財審議委員長猿田文紀、教育委員会萩原の3人が現場へ行き話し合った結果、筑摩高校樋口昇一教諭から住居址かどうかを確認してもらうことになった。

12月10日

樋口、猿田両人と萩原、それに農免道路工事を進めている南安曇地方事務所耕地課職員4人を含め確認をする。樋口教諭から縄文時代中期の住居址には間違いはないという確証を得、発掘の計画などについて翌日金井指導主事と話し合うことになった。

12月11日

県から金井主事、地元から猿田、萩原、地方事務所耕地課から大沢課長外3人、工事請負の鶴見建設有限会社と発掘について具体的に話を進めた。その結果、県で工事費のうちから発掘費用20万円を支出するという内諾が得られ、年の瀬、降雪という条件などを考慮し、12月13日に第一次調査をすることになった。しかし、何にしてもリング畑ということと、リングを一時仮植してこの住居址の出た畑を床下げし、この畑へ植え戻すという非常に困難な発掘となったのである。

(以上教委の経過から)

(2)南松原遺跡発掘調査団

顧問 藤沢宗平、原 嘉藤

調査団長 樋口昇一

副団長 猿田文紀

調査主任 土屋長久

調査員 小松 虔、篠崎健一郎、山田瑞穂、神沢昌二郎、太田喜幸、大久保邦彦

調査補助員 白沢幸男、百瀬新治、白田武正、塚本俊一、中村あつ子、小林良子

(以上信州大学生)

調査協力員 松本正規、古屋秀雅、安高康行、松沢宗利、松本県ヶ丘風土研究部大沢哲他14名

このように調査団を結成して発掘調査に当たったが、実際に活動したのは、団長、調査主任、調査補助員の信大学生、県ヶ丘風土研究部の人達であった。

(3)発掘調査日誌

12月13日 (第一次調査)

樋口団長以下13名の調査員及び調査補助員と県ヶ丘高校大沢哲他8名、それに村から文化財審議委員4人と宮沢教育委員長他手伝う者8名が参加して、第一次調査を実施した。

遺跡全面にわたって表面採集をしたところ縄文中期(勝坂式)土器片が広範囲に散布がみられたり、既に道路工事で切断された地層断面には4箇所にロームを切り込んだ竪穴がみられたりすることからここに勝坂期の集落の存在が確実視されるに至った。

そこで室山山麓南に傾斜する段丘先端部に、南北に走る道路と概略平行に南北方向に3本のトレンチを設定した。各トレンチは、巾2m、長さ16m、西よりA、B、Cトレンチとし、各トレンチは、南から2m毎に区切り1区、2区……と呼称して総数24の区画を設けた。リングの木のためABトレンチ間は3.5m、BCトレンチ間は4m離れて平行にとった。そして遺構分布状況確認のため、12区画の掘り下げ作業にかかった。

地層は耕作土、黒色土、褐色土層からローム土へと移行し、ローム土までの深さはB1区で70~85cm、C7区で85~90cm程である。従って基盤のローム層は、南がやや浅く北にわずかな傾斜となっているのが観察される。

遺構の認められたのはA・Bトレンチで、A1及びB4区から竪穴の壁の一部分が、またA3、A5、B1、B7、B10区からは竪穴の柱穴及び床面が検出されて、トレンチ設定の範囲内に3~4軒の住居地の存在が知られた。

本日の遺構分布調査に基づき、後日、本格的な発掘調査を行うことで第一次調査は終了した。午後からは小雪まじりの強風の中での調査であったことが記されている。

12月16日 (第二次調査)

第一次調査の成果から、安曇平における勝坂期集落址の記録保存の重要さが、村当局、工事関係者、地主等に共通理解されて工事延期の配慮がなされた。リングの

植え替え作業もあって、12月20日まで発掘調査をすることになる。

調査は樋口、猿田、土屋が専従し、他に信大生白沢、百瀬、白田、中村、小林が主体となって、12月13日検出の遺構を中心に集落址全体の調査にかかる。住居址付近は地表より50cmをブルドーザーで除去し、B7区第1号住居址の調査を進める。また、各トレンチを北方に延ばし遺構の確認に当たる。村有線放送から取材がある。

12月17日

白沢、百瀬、白田、小林、中村、塚本の6名に樋口が午前中、土屋が午後担当した。

1号住居址の西側より2軒、東方から1軒が発見され、3～5号住居址と命名された。本日は各竪穴住居址のプランの検出を行った。

本遺跡における竪穴住居址は、道路工事面に露出しているもの等を合わせて11軒となり、その分布は4・6号址に切り合いがあるが、他の全ては約1m間隔の広さをもって構築され、集落は円形ないし弧状に営まれているように推定される。竪穴のプランも楕円形の状況をなしているものと観察される。

発掘が本格化するにつき、村から村長が現場視察に来る。

12月18日

猿田、土屋、白沢、百瀬、白田、中村、小林、塚本の8名。本日は2号址、5号址を明らかにすべき発掘に全力を注ぐ。

2号住居址は、竪穴上部のレンズ状に堆積した黒色土層中の土器群を取り上げ、床より15cm上、つまり土器群の最下部面に焼土3箇所が発見され、その規模は約70×80cmのもので厚さは5cmとなっており、この周辺を精査すると1辺3.5mの小竪穴が発見され、一括遺物はこれに伴うことが考えられた。隣郡朝日村熊久保遺跡や塩尻市小丸山遺跡に所謂「熊久保パターン」と仮称された遺物出土状況があって、本2号住居址は、それによく似た状態であるので興味深く炉の精査追求を行った。小竪穴下約15cmより、明瞭な床と炉を伴う住居址が検出された。そこで前述の小竪穴からは焼土の確認もあるので一応住居址とは分けて第1特殊遺構として扱った。

第5号住居址は、覆土上部より土器片が多量に出土し始め、更に床面上10～15cmから一括土器12個が出土し始めた。

また、南松原遺跡について村一円に有線放送を通じて報道されたので関心のある人々の見学が多くなった。特に本日は、信濃毎日新聞社、中部日本新聞社が来て記事にする。前者は20日、後者は19日朝刊に掲載される。午後には地方事務所松崎所長、大沢耕地課長も来られた。

12月19日

樋口、猿田、土屋、白沢、百瀬、白田、中村、小林、松本、塚本、松沢、古屋の12名に県ヶ丘風土研究部11名が加わる。

第5号住居址は遺物の取り上げを行い、床面の精査にかかる。竪穴は楕円形プランを呈し、周溝が存在し、焼土はわずかで炉縁石はすでに除去されていた。竪穴内は幾度か建て替えがあったようで柱穴が多い。主柱穴と思われる柱穴間には幅10～12cmの溝が発見された。

第1号住居址は、竪穴のプラン追求中に、ローム面近くの北側覆土に3個体分ほどの土器出土がある。床近くの中心部に自然石の堆積と共に遺物が12箇所より検出された。竪穴は本址も楕円形のプランであり、炉は小形のものである。

第3・4号住居址は、午後より完掘作業にとりかかった。第3号址は壁が12～15cmで床面となり、覆土中からは全く遺物が発見されない。第4号址は、覆土上部より遺物が多量出土となり、明日の工事作業と併行して調査を進めることとなる。

本日は定例村議会の合間に議員全員が視察し、樋口団長から説明を聞く。また小中学校の社会科担当の先生をはじめ、多くの先生方がみえた。午後には小中学生およそ500人ほどが見学に来て、発掘する者も非常にファイトが湧く。

12月20日

樋口、猿田、土屋、百瀬、白沢、白田、中村、小林、松沢、古屋に県ヶ丘風土研究部8名。

第4号住居址の完掘に全力を注ぐ。また1号住居址と5号住居址の空間8×6mの範囲を清掃し竪穴の壁外地域に何かあるのか追求作業に当たった。ここからは多数の柱穴群が確認されたのみで、焼土、炉、床面等の検出はなかった。また黒褐色土層中からも遺物の出土はなかったが、柱穴群をまとめて第2特殊遺構として扱った。

4号住居址は楕円形プランを呈し、炉の中央からキャリパー状の口縁と底部を欠いた埋甕炉が発見された。また、東壁からは本址に切られた竪穴が発見され、これを第6号住居址としたが完掘には至らなかった。かくして、5軒の竪穴住居址と2箇所の特殊遺構を調査し得て、第二次調査を終了した。調査時点では道路工事面で見られた竪穴を含め11軒が確認されていたが、調査後工事中に新たに東方地点から3軒の存在が知られて合計14軒となった。

この日も霜柱の立つ寒い日であったが、村長をはじめ多くの村民や新聞報道をみて知った村外からの見学者が多かった。そして、明日には潰される住居址を残念そうに見つめていた。この間、住居址をこのままに復元して代替地を探し、リングを

移植しようという意見も幾度かもち上がりながらも、道路事情という堅い壁にはどうすることもできなかった。

13日から20日まで急ぎに急いだ発掘も樋口団長をはじめ土屋氏、信州大学生、県ヶ丘高校生など、また、地主降旗光男氏、村当局の方々の暖かなご理解、ご協力のうちにスムーズに計画が遂行できたことに深く感謝する次第である。

(4)整理作業

12月21～25日、及び、2月19日～3月10日

樋口、土屋、白沢、百瀬、中村、小林が中心になり、団長宅にて遺物の水洗い復元土器の整理、及び、復元作業等を行う。復元実測可能な土器約65点、石器14点を数えた。遺物については、土偶等の土製品、また、該期特有の有孔罽付土器等が出土していないか注意して整理に当たったが見当たらなかった。

以上、発掘調査の経緯について、報告書刊行のために書かれた調査団の日記と教育委員会の経過とから編者がまとめた。ここに記して年月と共に忘れ去られようとする当時の情勢を記録にとどめておきたい。

また、報告書のために、村長から「序文」を、教育委員会からは「あとがき」をそれぞれ用意していただいた。これも当時をふり返る貴重な資料であるから載せておきたい。

序 文

当村小倉地区は太古から聚落の発達したところであると聞いていた。村内のいたるところで、農耕の鎌の下から、家を建てるため土台を築こうとして掘り起こした土の中から、また、ある時は大水が出て押し流された土砂の中にまじって、さまざまな土器がころび出て、それは大方個人の所有になっている。相当数のものは好事家の手に渡って村外に持ち出されているということも聞いている。

それで村の中にとどめておきたいということで、これらの出土品を学校教育に資するという目的で、村内の保持者から提供してもらって、現在中学校の社会科資料室に陳列されているものがかなりある。

はからずも昨年12月、南松原地籍の農免道路建設工事の現場から沢山の土器が出ているということで、県教育委員会の指示にしたがって発掘調査を進めたところ、縄文中期の住居址が密集していて、約五千年前のものであるということである。その中から学術上貴重な土器が幾点も発見されたということを楽しんでいる。

太古この辺一帯は、西に山を控えて獲物も多く、黒沢川の水便もよく、村人の生

活上の好適地であったと思われる。したがって住居址としては四千年前のもも、三千年前のももあるだろうということである。やがてこれらのものも発掘される機会を得て、遠い祖先の生活の有様を目のあたり想見することが出来ればという希望を持っている。そのためには、これまでの出土品もこれから発掘される出土品もまとめて展示する考古館のごときものを建設して一般の観覧に供したいと考えているのである。

今回の発掘調査が考古学や民俗学の研究に役立ち、わが三郷村の歴史の源流を明らかにすることが出来るということはまことに喜びに耐えない。

昭和46年3月10日

三郷村長 中田又三郎

あ と が き

年末の慌ただしい12月13日から20日まで8日間に亘る埋蔵文化財緊急発掘調査も樋口団長を始め、諸先生方の絶大なご協力を得て無事計画通り遂行できましたことは感謝に耐えません。また、その後の整理、復元作業においては樋口団長、土屋調査主任、信大生、県ヶ丘高校生には、昼夜をわかつた熱心にご尽力ください、20余個の土器が立派に復元されたことについても、また、感謝に耐えないところです。

ここに実に立派な報告書ができ上がり、私達の祖先の生活実態を知る貴重なものとなりました。ぜひいつまでも保存し、また、活用していただきたいと思います。一番残念なことは道路工事との関係もあり、住居址が保存できなかったことです。しかし、今後発掘保存計画、並びに郷土館の建築計画ができれば、という希望をもっております。今後村の歴史を知るうえで貴重な資料として広く村民一般のものとして生かしてもらいたいものです。

昭和46年3月10日

三郷村教育委員会

南松原遺跡構一覽表

(単位 cm)

遺構	プラン	規模 東西×南北	壁高	床面	炉	周溝	柱穴	内部施設	遺物	備考
1号住	楕円形	390×500	15~25南 壁が高い	水平で堅 い	中央に石囲炉 (石抜き)	なし	柱穴9 主柱穴は6 径20~30 深さ30前後	貯蔵穴 中央に馬蹄 形状に浅い 凹み	土器 石鏝 打石斧 磨石片	住居廃絶後に土 器投棄 北に特殊遺構2 (図版12)
2号住	隅丸方形 か不整形 形	400×400?	北51 西52	水平だがあ まり堅くな い ブロック状 に薄い砂	中央に石囲炉 45×50の五角形 で深さ12 伊織石5個わず かに焼土	なし	主柱穴3 (1未掘) 径25、深さ 15~30	土器片 数片	南部未発掘 上部に特殊遺構 I	
3号住	楕円形	460×520	南10 20	大半が固 められている	中央やや南に石 囲炉 径40の六角形 伊織石6 焼土・灰なし	なし	柱穴12 主柱穴 7~8 径・深さ 40~50	炉の周辺に浅 い凹み 柱穴間に溝 3本	床面遺物 なし	(図版12)
4号住	楕円形?	380×470	東40 西20	水平で堅 い	中央やや北に石 囲炉2個 伊織石8個 径20、深さ50の穴 の中に底部のな い土器 底に小礫と焼土	なし	主柱穴5~ 6になろう 径25、深さ 30前後	炉の西南に浅 い凹み	土器11 凹石	西南部未発掘 6号住を切っ ている (図版13)
5号住	楕円形	480×590	30	水平で固 められている	中央に石囲炉? くずされて伊織 石3個と焼土	巾10~15 深さ10 全周する	主柱穴 P1~P7?	中央部に浅 い凹み 多数の穴と 溝(間仕切 り?) 貯蔵穴	床面遺物 はない	住居廃絶後に土 器投棄11個体 (図版14)
6号住	不明 (円形?)	不明	南20~30	堅く水平	未掘	不明	不明	不明	なし	4号住に切られ る
特殊遺構1	隅丸方形?	310×310?	25~30で 壁は傾斜	部分的に 貼床状の 堅い面 焼土	なし	—	なし	北隅に3個 の自然石	半完形や 口縁部の みの土器 23個 打石斧8	10~15下に2号 住
特殊遺構2	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	列状に並んだピ ット壺約20個の 穴

5、遺構・遺物

(1)遺 構

本遺跡で14軒の壁穴住居址の存在を確認して、そのうちの第1～5号住居址と特殊遺構2箇所を調査検出したことは経過で記した通りである。また、この調査で得られた結果については、既に「三郷村誌Ⅰ」に樋口昇一氏によって詳細に述べられているので、本資料集では再掲することは控え、村誌をみていただくようお願いしたい。

しかし、村誌を見られない方のために、遺構図は再掲し、遺構についての状況は一覧表にまとめたので参考にしていただきたい。

(2)遺 物

①第1号住居址

土器と石器がある。土器は第42～44図の1～6と第53～56図の1～47の拓影である。

第42図1は、底部を欠くが口径26cm、現存高37cmを計るバケツ形の器形をとる深鉢である。いわゆる抽象文をもつ土器である(図版16-1)。明るい茶褐色を呈し、胎土に細かい石、砂を含むが緻密で、他の本遺跡出土土器とは若干の違いがみられる。他所から運ばれたものであろう。

文様は三区区分された横帯区画からなっている。口縁部は平行する隆帯の中に、円が2個と斜線に続く半円状が隆帯でつけられている。隆帯の両側には板ないし笥状工具による連続押引文が施されている。胴部も平行する隆帯の間に波状のうねりが5つあって一周している。この隆帯の両側は口縁部同様、両側に連続押引文がみられる。いわゆる山椒魚文とも呼ばれる一群の抽象文である。そして口縁部、胴部の隆帯間の空間にはRLの縄文が施されてある。底部は無文帯となっている。No.1土器である。

1と同様な抽象文をもつものに第55図27や第56図39がある。39は口縁部に縄文が施され、その下に楕円区画を構成し、以下に抽象文をつけている。

第42図2(図版16-2)は底部を欠くが、口径23.5cm、現存高29.5cmを計るもので胎土よく、黒褐色をしている。口縁部は直斜状に開く器形であり、4箇所に突起がつくため波状をなしている。突起の1つがキノコ状をなして装飾効果を見せている。文様は口縁に平行する横帯区画が2段あり、上下共に4区画されている。上の区画内には細かに沈線が刻まれ、それを2～3本まとめるかのように円弧が押されている。下は楕円区画内を斜めの沈線と板状工具による細かな押引文とが2組ずつ続いている。胴部は垂下する隆帯間を斜めの沈線で満たすという溝部をとっている。No.1土器である。

第42図3(図版16-3)も底部を欠くが、口径34cm、現存高34cmを計る深鉢である。口縁部は緩く内弯し、頸部が細まって胴部に膨む器形となっている。胎土に小石、霰

母を含むが焼成と共に良好で黄褐色を呈している。口縁部は突起が1箇所ある平縁で、頸部にかけて無文帯をなしている。頸部には平行する隆帯の間に楕円区画が7区画ある。楕円内には、まわりに連続押引文がその中に横方向の波状沈線がみられる。頸部から胴部にかけては縄文が施されている。No 4 土器である。

第43図4（図版16-4）も底部を欠くもので、口径38.3cm、胴径38cm、現存高46cmを計るやや大きめの深鉢である。口縁部は直立状で胴部がやや膨み、以下底部に細まっていく器形をとっている。口縁には6個の突起がつくため波状口縁をなし、突起は完通する丸い穴をもつもの、渦巻文をもつもの、山状のものがそれぞれ対になっている。そして口縁部には縄文が施され、その下は3段の横帯区画が、それに続いて再び縄文という文称構成をなしている。3段の横帯区画は上の2段が共に7個の長楕円区画で、隆帯で囲まれている。楕円内には中に沈線が波状に引かれ、周囲は板状工具による連続押引文が密にみられる。3段目は三角形が交互に20個組み合わせられて一周し、隆帯内には押引文と三叉文がある。No 6 土器である。

第43図5（図版16-5）は口径37.3cm、底部11cm、器高17cmの浅鉢である。黄褐色を呈し、胎土に砂を含むが焼成と共に良好である。文様は口縁部のみにあり、摺鉢状の下部にはない。口縁には4箇所突起があるため緩い波状をなしている。口縁下の最大径をなすところに隆帯があり、押指圧されたため波状に連鎖している。その一つ一つに三角押引文がみられる。No 2 土器である。

第44図6は全体の約半を図上復元したものである。推定口径31cm程で、黒褐色を呈し胎土に小石、砂を含むが焼成と共によい。平縁で平行する隆帯がめぐり、胴部にかけて楕円区画と長方形区画及び垂下する隆帯でバランスよく文称構成している。区画内には笥ないし棒状工具で引かれた沈線がある。また隆帯上には刻目文がつけられている。No 16 土器である。

以下、区画文をもつものについて記したが、2、6のように器全体にみられるものと3のように部分的にアクセントをつけるかのように構成されるものがある。

全体的にみても、区画が縦長方向のもの（第53図2、3、第55図19~25、第56図38、44）と横長区画のもの（第53図1、4、5、第54図6~10、第55図28~34、36、37、）とに大別される。縦長区画は、2、3、21、23等でみるように長方形、三角形、菱形等を巧みに組み合わせたり、円や渦巻文を加えて文様効果を高めている。区画内は沈線が密に描かれていて全体的にバランスのとれた美しさがある。これが区画文土器と呼ばれるにふさわしいものである。横帯区画のものは長楕円区画が多い。30~34、37のように三角形区画もあり、円に三叉文をもっている。また、2、38のように口縁に把手ないし突起をもつものがあって器形装飾にアクセントを付けている。

口縁部が縄文で飾られる11や14、胴部にそれがみられる15~18、35、40もある。

第56図40～47は底部片である。推定底径9～13cmであり、器外面は多くは茶褐色をして胎土・焼成共に良好といえる。器内面は一部黒変があったり、黒色炭化物の付着している41、45がある。また底面に網代痕をもつ42、43等がある。47はNo.12土器である。

以上が第1号住居址出土の土器であるがいずれも藤内I期に比定されるものであり、廃絶後の土器一括投棄の問題もあるが、本址の所属時期もその期に考えて問題はないと思われる。

石器には、第73図4～7がある。

4は細粒砂岩製の打製石斧で、欠損している。5は珪質細粒砂岩製の搔器状の石器である。剥片をうまく使い薄く剥離した一端に刃をつけている。6は長さ14cmを計る粘板岩の凹石である。凹みは両面にあり、一端には打痕がみられることから敲打器としての使用もあった石器である。7は石皿の破片である。石器出土の少なさが注目される。

②第2号住居址

本来ならば特殊遺構1として扱うべき遺物であるが、第2号住居址としてまとめたので了承されたい。それは若干の疑問点があって検討すべき問題が残されているのであえて第2号住居址出土としてまとめた次第である。

即ち、遺構一覧表でみるように、本址廃絶後に遺物の一括投棄があったが、特殊遺構1として扱ったのは、2号住居址床面上約15cmに部分的に貼床らしいものと焼土があることからであり、その点からは発掘時の所見を大事に考えたい。しかし出土土器をみた時、大部分は藤内期であるが、その中に若干量の曾利期の土器が混じることであり、それをどのように考えたらよいかということである。特殊遺構1の時期の問題、住居廃絶後の遺物投棄の問題など不明と言うほかはなく結論は出せない。発掘調査に参加しない者の勝手な推論として、第1号、第5号住居址にも廃絶後の遺物一括投棄があるので本址もそれと同様に考え、しばらく経過した曾利期に何らかの遺構が作られて焼土はそれに伴うものと考えれば両期の土器について説明はつく。ともかく第2号住居址と特殊遺構1には課題があるということである。

出土遺物には土器と石器がある。

土器は第44～48図の7～22と第57～62図の拓影1～57である。説明上、「図○」は44～48であり、「拓○」は57～62図である。

図7（図版17-6）は底部のみを欠くが、口径17.7cm、現存高22.5cmを計る。胎土に多量の石英、長石、雲母を含むが緻密であり、焼成もよくて明茶褐色を呈している。直立状の胴部から口縁部に直斜状に拡がり、口縁部は内弯している。平縁で口縁に平

行に刻目をつけた隆帯がまわり、6つの突起がある。その下は図でみるような楕円状の区画と斜めにつけられた先がまるまる隆帯で大きく分けられ、その間に沈線が施されている。胴部下半には波状の沈線が垂下している。遺物出土状況No.2の土器である。

これと同様に区画で構成されるものに、拓10、26、29、34、35、39、40、48～50がある。拓10、26、29、34、49は縦長区画でいわゆる区画文土器と呼んでよいものである。拓26、29はNo.10の土器であり、拓34はNo.21の土器である。

拓34は推定口径21cmで、緩く内湾する器形をとり、口唇部に刻目をもつ。口縁部は無文帯で以下に区画がみられる。拓35は推定口径11.5cmの小形品で、山形の突起を口縁にもつ。口唇部から下に巾広の刻目文がまわっており、頸部から胴部上部に2本の隆帯がつけられている。上の隆帯は押圧して円形状をなし、下のは刻目をつけている。口縁部には横長の区画がある。拓39は推定口径23cm程で、漏斗状に開く口縁をもつ器形で、口縁部には三角形の平行沈線で囲まれた横帯区画をもつ。区画内には三叉文、渦巻文状のものが描かれており、その間に縄文が施されてある。図2土器より若干先行する文様構成である。拓40は特長のある張り出した屈折底部をもつもので藤内Ⅱ期から井戸尻期にみられる。拓48～50は隆帯に特徴がみられるものであり、拓49には横区画と縦区画が巧みに構成され精巧な感じの土器にみえる。

図8(図版17-7)は底部を欠くもので、口径34.2cm、現存高38cmを計る。筒状に近い器形をとっている深鉢であるが、底部へはつぼまっていくものと思われる。黄褐色を呈し、小石、砂、雲母を含むが胎土も焼成も共に良好といえる。口縁部は低い波状となり4箇所のうち1箇所のみが把手状になっている。無文の口縁部下に刻目をもつ平行隆帯があり、その中に長楕円の横帯区画が4つある。区画内は縦方向の沈線で切れ、一つおきに刻目を施してアクセントをつけている。以下胴部には縄文がみられる。No.9土器である。

図9(図版17-9)は口径15.2cm、底径7cm、器高22cmの深鉢であるが文様構成は、図8に似ている。底部から口縁にかけてわずかに開く器形で平縁である。器外面は薄茶色で一部に黒褐色がみられ、器内面は底部が黒っぽい。胎土に極小小石を含むが焼成と共に良好といえる。口唇部には刻目が施され、口縁部は無文帯となり、以下に4区画された長楕円で飾られ、そして縄文となるのは図8と同じである。No.7土器である。

図10(図版17-8)は横帯区画がなく、波状の隆帯がめぐるので縄文となっている簡素な感じの土器である。底部を欠くが、口径34cm、最大胴部径37cm、現存高36.5cmを計る深鉢である。やや丸みをもった胴部から頸部にかけてつぼまり、そして口縁部に反する器形となっている。No.14土器である。

また図16も胴部以下が縄文で飾られる深鉢である。口縁部から胴部にかけての全体

の約 $\frac{1}{4}$ を図上復元したもので、推定口径35cm程を計る。口縁には把手がつき、わずかの無文帯の下に楕円区画と2条の平行隆帯がある。この隆帯を境にするかのように下は直立状であり、口縁部にかけて直斜状に外反する器形となっている。胎土に小石、雲母を含むが良好であり、器外面は赤褐色、器内面は黄褐色を呈している。また器内面は調整されてなめらかである。No.4土器である。

このように縄文をもつものに、拓11~13、16、25、27、28、30~33、37、41等がある。口縁部から施されるものは、11、37、41で口縁部まで直立気味の器形となっている。37は推定口径9cm程の小形品、41は推定口径16cm程で、口縁部にわずかの段差がみられる。また、縄文と隆帯で特徴的に飾られるものに図17、拓30~33がある。図17は図上復元したもので、推定口径33cm程である。胎土に小石、雲母、石英を含むが焼成と共に良く赤褐色に焼きしまっている。口縁には山状の突起があり、そこから隆帯が垂下して胴部を一周するものに接続している。隆帯上は押圧して平らにされ文様効果を高めている。縄文が全面にある。拓30~32は同一個体でNo.16土器である。口縁に穴のある把手がつき、頸部に横走する隆帯がある。隆帯には刻目文がつけられている。拓33はNo.19土器で、縄文地に垂下する隆帯がつけられている。

図11は、口縁部から胴部にかけての全体の約 $\frac{1}{4}$ 程を図上復元したものである。No.6土器である。底部を欠くもので推定口径約40cmの大きめの深鉢である。胴部からほぼ直立状に口縁へ至る器形をみせているが底部へはつぼまるものと思われる。胎土は緻密であり、焼成もよく堅く焼きしまつて赤褐色をしている。器面は調整され平滑である。口縁は4箇所波状の突起をもつらしい。そして口縁に平行な隆帯によって区画され、長楕円の横帯区画が3段みられる。楕円内には平行沈線がつけられており、板状工具を押してつけたようにみえる。この3段の横帯区画の下は波状の隆帯との間に平行沈線によって区画された五角形とも三角形ともみられる区画が作られている。波状の山になる箇所には小突起がつき、刻目がつけられている。

図12(図版18-11)は、図11に似たような文様構成をもつものである。4つの波状突起、口縁に沿った4つの長楕円の横帯区画、胴部の波状隆帯は共通しており、波状隆帯と横帯区画間が垂下する平行沈線と縄文で区画される点が違いをみせている。これも胴部以下を欠損するものだが、口径36cmの大きめのものである。黄褐色で一部赤褐色がみられるが少々もろい感じの胎土である。口縁の波状突起は波状と山状が対になっており、長楕円内の沈線にも横方向につけられるものがあるので変化があるように感じとれる。No.3土器である。

図15は、推定口径22cmの深鉢片である。平出3A式と呼ばれる一群で、特徴的な半載竹管工具による平行沈線が口縁部では波状に頸部から胴部へかけては縦方向に描かれている。口縁には山状突起が4箇所あるものと思われる。突起から垂下する隆帯は

押圧して平らにされ、刻目をつけている。胴部には隆帯が一周し、これも押圧されている。黄褐色で胎土も焼成もよい。本址でのこの平出3A式土器の出土は少ない。Na23土器である。

図21(図版17-10)は、口径37cm、底径12cm、器高19cmの浅鉢である。胎土に砂、小石を少量含むが焼成と共に良好で赤褐色を呈している。口縁部は、図11や12と同様に4つの突起と横帯区画で飾られている。突起には外側と内側に丸い凹みがつけられ、長楕円の横帯を画す隆帯上には刻目がつけられている。内は板状工具を押し込んだような沈線が密に施されている。以下底部へかけては無文帯となっている。Na12土器である。

図19も浅鉢であり、口縁部片を図上復元したものである。推定口径26cmで、胎土に小石、砂を含むが焼成と共に良好で茶褐色をしている。器内面はややざらついているが器外面はすべすべしている。文様は図21同様に口縁部だけである。口縁に平行に隆帯がまわり、押圧されて長円状に平らになっている。これに沿うように三角押し文が2条、更に口縁に2条つけられている。図21よりは先行する文様構成である。Na20土器である。

図22も浅鉢と思われる口縁部片で、推定口径42cm程となる。胎土に砂と雲母をわずかに含むが緻密であり、色調もオレンジ色がかった薄茶色で他の土器とは違いがみられる。他所からの土器であろう。文様は破片のため全体的には不明であるが、無文部が多らしく口縁下に円形の隆帯がみられるのみである。抽象文土器にみられる円と同様である。

この他、浅鉢に拓54~57がある。無文部の多いもので、口縁に沿って引かれた沈線内を交互に刺突したためにできる波線が特徴的である。56、57は同一個体で「く」の字に曲る口縁をなしている。54は内弯気味であり、55は隆帯をもつ。

次に拓影図の方で、まだ取り上げなかったものについて若干記しておきたい。

第57図の拓1~16は、発掘時Na1土器としてまとめられたものである。底部だけでも3個あり、それ以上の個体数になるのは明らかである。

第58図拓17~22は、Na6土器で指圧痕の顕著なものである。23~29はNa10土器であるが、縄文と区画文の2個体分である。

第60図拓36は、推定口径9cmの小形品であり、口縁部に半円弧状の刻目のついた隆帯が並び、その間から同様隆帯が胴部の下っている。胴部には沈線が施されるらしい。拓38は、口径14.5cm程になり、無文口縁部下に連続押しきされた楕円区画文をもつ。拓53は胴部片であるが大形のものであり、無文部に先端がまるまる隆帯が施されている。

以上、藤内期の土器について記したが、次に曾利期の土器について取り上げる。

図13は、口縁部が内弯するキャリパー形の深鉢で、口縁の2箇所に裝飾把手がつく。片方は立ち上がり、片方は山状で対象ではない。くびれまでは無文帯で、その下に沈線がハシゴ状に並んでいる。赤褐色をし、ぼろぼろしたもうい感じの土器である。曾利Ⅰ式期に比定されよう。№18土器である。

図18(図版18-12)は、口径24cm、底径6cm、器高35cmを計る深鉢で、胴部から口縁へ直斜状に外半する器形をとる。底部の大きさに比べて口径、器高があるため不安定な土器である。全面が縄文と唐草状文で飾られるもので曾利Ⅲ式期に比定されよう。№5土器である。

図20は胴部上半を欠くもので無文であるが器形から曾利期のもと思われる。底面には網代痕をもっている。ぼろぼろしたもうい感じのもので器外面は黄褐色、内面は黒褐色をしている。№8土器である。

図14は台付土器の台部である。径2.5cm程の円形の透し穴があり、縄文が施されている。茶褐色を呈し、ややもうい感じの土器である。曾利期のもと考えたい。

拓影では、拓47、52等がある。共に内弯する口縁部をもつと思われ、47にはこの時期特徴的なソーメン状貼布で飾られている。拓52は、図13と同様に無文口縁部となっている。飾られた隆帯が垂下しており、無文部下には沈線がみられる。沈線は縦方向の間に横線が密に入って、文様構成に変化をつけている。曾利Ⅰ式期に比定されよう。

以上が本址出土の土器である。藤内期のもは、指圧痕や三角押引文など先行する文様要素をもつものもあるが、主体が藤内Ⅰ式期のものであることから一体としてとらえ、第2号住居地の所属時期を藤内Ⅰ～Ⅱ式期におきたい。炉も該時期を示す小形石皿炉でうなずける。曾利期は曾利Ⅰ式期が大半を占めるが、図18のみ時間差があつて気になる。最初に記したように特殊遺構1と共に問題点としておきたい。

石器には第73図1～3、8～13がある。13はスクレーパーであり、1と2はその欠損品と思われる。石質は13が泥質砂岩、1が石英、2が硅質チャートである。3は蛇紋岩製の磨製石斧の剝離したもので土器内出土である。8は打製石斧(粘板岩)の欠損、11は小形打製石斧(泥質砂岩)である。

9、10、12は剥片石器と呼んでいいもので剥片を利用して刃をつけてあり、使用痕もみられる。12は横刃形石器の範疇に入るものである。石質は9が硅質細粒砂岩、10が砂岩、12が片状砂岩である。本址も石器類が少なく注目される。

③第3号住居址

出土遺物が少なく、僅かに第71図1～6の土器片があるのみである。

図1は胴部片であり、胴径9cm程と小形品である。細かに刻まれた横帯区画の下に刻目文のついた隆帯がまわり、その下に抽象文が描かれるものである。拓2～5は、

縦方向に長い区画文がみられるもので、いずれも藤内Ⅰ式土器である。本址の所属時期におけよう。持ち去られたのか整理されて遺物の少ない住居址として注意される。

④第4号住居址

出土遺物に土器と石器がある。土器は、第49図23～26と第63～65図1～38である。

図23（図版18-13）は、底部を欠くものであるが、口径23cm、現存高27.7cmを計る。胎土には多量の石英と雲母を含んでいるが良好と言える。暗っぽい黄褐色をし、内面一部には黒色炭化物付着がみられる。口縁部は内湾するキャリパー形のもので、口縁には把手と突起がつくが、把手は欠損している。刻目文のついた隆帯で区画された横帯区画が胴部上部に段違いつけられている。垂下する隆帯の片側は二個の楕円区画があり、一つには交互刺突、一つには沈線が施されている。反対側は入れ違いに三角形が4つ区画され以下は縄文となっている。Na9土器である。

図24は図上復元したもので推定口径17.5cm、器高22cm程になろう。器外面は茶褐色、内面に黒色炭化物の付着がみられる。筒状の胴部から口縁部に広がる器形で、口縁はやや内湾気味であり、底部は張り出した屈折底となっている。無文口縁帯の下に刻目文をもつつ隆帯間に波状の抽象文と三角押引文が連続している。底面には粗い網代痕がある。床面直上出土である。

図26も24と同様器形で、口縁部と底部に横帯区画、胴部に二段に画された平行沈線がみられる。口径16.8cm、底径7.4cm、現存高19.6cmを計る小形土器で、胎土に小石、砂を僅かに含んでおり、茶褐色を呈している。Na11土器である。

図25（図版18-14）は、口縁部と底部を欠いたもので、本址の炉内に埋められていたものである。現存高28.8cm、同部最大径34.5cmを計るもので茶褐色をし、胎土に砂と多量の雲母を含んでいる。文様はくびれ部に押圧した隆帯が一周し、上に沈線、下に縄文がみられるだけのすっきりした構成となっている。Na5土器であり、埋壺は調査住居址中、本址のみである。これら4点はいずれも藤内Ⅱ式期に比定されるものである。

拓影では、図24と同様に無文口縁帯をなす拓13や図26と同器形をとる拓7がある。拓1（Na6土器）はやや外反する口縁をなし、口縁に沿って楕円横区画がつけられ、隆帯で画された以下は縄文となっている。横帯区画の破片が多く拓3、6～27にそれがみられ、6、9～11には抽象文もみえる。また拓32（Na7土器）の屈折底をもつ底部にも楕円区画がある。口縁部が平行沈線で区画される拓2（Na8土器）や胴部以下が縄文となる拓30、31、34～36もある。拓5は口縁に沿って長い刻目文がつけられた浅鉢であり、拓38も浅鉢底部片である。

以上が出土土器であり、本址は土器の示す藤内Ⅱ式期におけよう。

石器は本址も少なく、第74図14～17だけである。14、15の打製石斧、16の敲石、17の横刃形石器である。敲石の一面には凹み状のものがあって凹石としての使用も考えられる。横刃形石器は横長剥片の一边に刃をつけただけのものであり、どれも砂岩製である。

⑤第5号住居址

出土遺物は土器と石器である。土器は第49～52図の27～41と第66～70図の拓影1～44である。

図28(図版19-17)は、口径17.6cm、底部7.6cm、器高22cmを計るものでキャリパー形の均整のとれた姿をしている。胎土に石英、砂粒を含むが緻密であり、焼成もよくて赤褐色をしている。器内面には黒変がみられ炭化物の付着もある。文様は半載竹管状工具でつけられた平行沈線と連続する刻目文で飾られている。くびれた頸部と口唇には一周する隆帯があり、その間の口縁部には入れ違いに三角状の区画が構成されている。区画内には刻目文、円形文、三叉文が配置されている。胴部は、対称位置に突起があり、突起の円形中央は貫通している。この突起間には縦方向の区画文が、片側に4区画、反対側に3区画つくられ、全体としてまとまった美しい区画構成をなしている。他所から運ばれた土器と思われる。No6土器である。

図31は、全体の写程を図上復元したものであるが口縁部と底部を欠く。器形は図28を圧縮した感じで、器内外面とも黒褐色をし、胎土に微小砂を含むが緻密で焼成と共によい。口縁部文様帯には図28と同様に三角状の横帯がみられる。くびれる頸部には長楕円区画があり、口縁部同様に半載竹管状工具による連続刺突がある。以下には波状に隆帯がめぐり、平行沈線が縦方向に引かれるので楕形文を作り出している。その間には刻目文で満たされた円形文があつて効果的な文様構成となっている。No13土器である。

図27は、口縁部片を図上復元したNo2土器である。推定口径25cm程で、胎土に砂、小石、雲母を含むが焼成と共に良好で器内外共に黒褐色をしている。口縁に平行な隆帯がめぐり、その下に隆帯で囲まれた三角形の横帯区画がある。連続刺突文、三叉文がみられる。

図33(図版18-15)は底部を欠くが、口径27.3cm、現存高34.5cmを計る。図28と同様器形をとるが、口縁部は正円ではなく楕円形をなし、全体的にもゆがんだ形となっている。胎土には小石、砂粒を多く含んでいて、ざらついた器面となり、かなりくずれたところがみられる。黒褐色をし、内面は黒変し、一部に炭化物付着がある。口縁部には4箇所に突起があつて、内1つはミミズク把手となっている。口縁部は三角形の横帯区画が15区画作られており、それが胴部にも見られる。胴部のその頂点には突

起が2箇所につけられ、円形の中央は貫通している。頸部から胴部にかけて三段に指圧痕が残っている。№1土器である。

図34(図版20-21)は直立状の胴部から口縁に開く器形で口縁部はやや内湾している。口径20.5cm、底径10.6cm、器高29.6cmのすらりとした深鉢である。胎土に雲母が僅か含まれているが焼成と共に良好で、暗茶褐色をしている。内面は調整されて平滑である。口縁部には2対の波状突起があり、U字状をして刻目が施されている。突起から垂下する隆帯と平行沈線によって縦長の区画が作られ、内部にR Lの縄文が地文としている。隆帯及び口唇上には連続刺突がある。№8土器である。

図35(図版20-22)も同様器形をとるもので底部を欠く。口径24cm、現存高31.5cmであり、小石、雲母、石英を含むが胎土、焼成共によく、茶褐色をしている。口縁は4つの波状をなすが、内1つが大きく飾られている。それは全体としては三角形状をなし、頂上部から隆帯がうねっている。見ようによっては蛇とも見れよう。これを境に半分には三角押しが半分には平行沈線が施されている。頸部を一周する隆帯の下には対称状に三角状の区画が作られたり、隆帯の垂下がみられる。№9土器である。

図38(図版20-24)も同様器形で底部を欠く。口径26.6cm、現存高28cmを計る。黄褐色を呈し、胎土に極小小石、石英を含むが良好で焼成もよい。器内面はすべすべしている。口縁は肥大した隆帯が相似形状にまわって口縁帯を作り、山になる空間に円形と長円が対になってみられる。隆帯上には縄文がつけられている。胴部には平行する連続刺突が一周しており、その間に三角形、平行四辺形、台形状の横帯区画が9区画構成されている。同様刺突がみられ、それを2~3本一括するかのよう半載竹管状工具が押されている。№1土器である。

図39(図版19-20)は底部を欠くが、口径24.4cm、現存高28.5cmを計り、底部から緩く直斜状に開く器形となっている。暗褐色をし、胎土に白っぽい砂粒を含むが焼成と共によい。口縁にはV字状の隆帯をもつ波状突起が4つある。この無文口縁部の下に2段の長楕円区画をなすキャタピラ文が4個ずつ入れ違いに配置されている。以下はR L縄文が全面にみられる。№3土器である。

図29(図版19-19)は大形深鉢であり、口径40.4cm、底径14.5cm、器高49.6cmを計る。キャリパー器形をなし、口縁は直立に近く、四つの波状口縁となっている。口縁に沿って横帯区画が作られ、突起の間に円区画を4箇所もつ。頸部から胴部には粘土帯指圧痕が3段に残っていて文様を思わせるかのようである。底部にも一部みられる。指圧痕の下には押しされた隆帯が波状にまわり、沈線が描かれて楕形状文5個で一周している。胎土は極小小石を含むが他の混入物はみられず、焼成もよくて茶褐色をしている。器内面には黒変帯もみられ一部に炭化物付着がある。№7土器である。

これと同内容をもつものに図32(図版19-18)がある。指圧痕が5段にわたってみ

られる。この方がやや小さく、口径26.8cm、底径11.8cm、器高37.2cmを計る。暗茶褐色を呈し、胎土に小石、雲母を含んでいて、ややざらついた器肌である。口縁には4箇所突起と7区画の横帯区画があり、突起から垂下する隆帯が胴部の波状のものと接続している。隆帯は押圧されている。図29のような櫛形文はみられない。No12土器である。

図36（図版20-23）は、一部欠損する部分があるが、ほぼ全体器形の判るもので、口径22cm、底径11.2cm、器高31.5cmの大きさである。胎土には白色の細かい砂粒を含んでやや粗い感じであるが、明るい茶褐色をしている。内面には黒色炭化物の付着がみられる。図正面になっている口縁には把手が付き、蛇状にうねる刻目文をもった隆帯が底部近くまで垂下しており、円形の穴は裏へ貫通している。対の位置には形状の異なる把手が付き、左右には山状の突起がある。密に押された刻目文をもつ隆帯で長方形、三角形、菱形やキャタピラ文が構成されている。No10土器である。

図30（図版18-16）は浅鉢で、口径18.4cm、底径8.4cm、器高8.8cmの小形品である。胎土に小石、砂、石英を含むが良好で、一部黒褐色部分もあるが全体的には黄褐色をしている。全面に縄文が施されており、口縁が内湾して全体として丸い感じの鉢である。

図40と41（図版20-25、26）は、焼町式土器と呼ばれるもので、特異な突起をもち、その間を半隆起線文で弧状に結ぶ特徴がある文様を構成している。半截竹管状工具で、その上に平行沈線を施したり、口縁に沿って同文様を描いたりしている。口唇には両土器とも刻目がつけられている。40（No2土器）は全体の約1/3を図上復元したもので、口径21.8cm、底径9.8cm、現存高24.7cmを計る。胎土には小石、砂を多量に含んでやや粗い感じの器面となっている。赤褐色をし、内面底部に黒変がみられる。41（No11土器）は底部を欠くもので、口径16.4cm、現存高18.5cmであり、40よりやや小さい。赤褐色をし、胎土に極小小石、砂、雲母を含んでやや粗い感じの器肌である。内面には黒色炭化物の付着があり、かなりの使用がうかがわれる。

図37は無文の底部片であるが胴部には縄文がつくらしい。底面に粗い網代痕をもつ。No1土器である。

拓影の拓1～9は焼町式土器の破片であり、No2土器である。拓10～15は平出3A式土器の破片で量的には多くない。拓16～23は横帯区画を構成するもので、拓16～18がNo2土器、拓19～23がNo9土器である。拓24～29は縄文をもつもので、24は口径22cm程であり、25は底径7cmで現存高15cmの小形のものである。拓26は口径20cm、現存高24cm程で全面に縄文がある。拓29は底径8cm、現存高16cm程で、胴上部に刻目文がまわり、下は縄文となっている。25がNo2土器、26がNo4土器、拓24、28、29、30、31の5個体が共にNo5土器となっている。拓32は横帯にキャタピラ文をもつもので

No.4土器である。拓33、37、38、41等は立体的、豪放的に飾られるもので芸術性の高い土器である。拓34の底部には押圧した隆帯が交差してみられる。拓40、44は浅鉢の破片であり、40の口縁には連続刻目文と押圧した隆帯がめぐっている。44は底径約13cm程である。

以上が本址出土の土器であり、藤内Ⅰ式、藤内Ⅱ式土器に比定されるもので量的にはⅠ式土器の方が多いという状態であるが、明確に区別することはむずかしい。両期にまたがるというか続く時期と解すべきで、それは住居址からもうかがえる。即ち、遺構図でみると柱穴も多く改築があったものと考えられ、長期に及ぶ使用が読みとれるからである。

石器は第74図18～24である。

18はチャート製の三日月形をした石器で、釣針形石器とか鈎形石器とも呼ばれるもので使途不明と言わざるを得ない。しかし長さ3.5cmあり弧状をなす外側には刃がついていて石匙同様の働きは可能であろう。

19はチャート製のスクレーパー、20、21、23は打製石斧である。21、23は欠損している。石質は3つとも片状砂岩である。

22は粘板岩製の敲打器、24は安山岩（軽石）製の凹石である。一面に凹みをもつ他、磨石としての使用もみられる。

このように本址も石器の出土が少ないが、18の釣針状石器は注目したい。

⑥第6号住居址

出土遺物は少なく、図示したものは第71図7の1点のみである。縦長の区画をもつ藤内Ⅰ式土器の口縁部片である。本址は第4号住居址に切られている住居址であることは遺構一覧表にも記してあるが、未調査に終わっている。第4号住居址は藤内Ⅱ期と考えられるので、それより先行することは確かである。たった1片のみで時期決定するのは問題であるが、出土遺物や他の調査住居址から推察して藤内Ⅰ期におけよう。

⑦第7号住居址

本址は位置確認のみで未調査の住居址であるが、少量の土器、石器の出土がある。

土器は第71図8～16で、8～12は楕円区画内に沈線をもつもの、13～16は無文の胴部片である。12～16には黒色炭化物の付着がみられる。

石器は第74図の25、26の2点である。25は安山岩製の磨石で僅かな凹みもみられる。26は片状細粒砂岩製の打製石斧である。

⑧第13号住居址

確認された住居址の中では、最も北に位置し、本址も未調査で終わった。出土遺物に第72図の土器片がある。区画文土器（1、2、7～12、17）と口縁部に縄文をもつもの（3～6）で藤内Ⅰ式土器に比定される。9は推定底径7.5cm程のもので底部まで縦長の区画で飾られている。14は推定口径12cm程の小形の無文土器であり、13、15には底部にまで縄文が施されている。13の底面には網代痕がある。

⑨遺構外出土及び表面採集遺物

第75～76図に図示した石器と土偶がある。石器は27～30が遺構外出土であり、31～42が降幡隆夫氏採集・所蔵のものである（図版5）。降幡氏表採品は発掘調査地点より北西に離れた地点であるが、南松原遺跡の範囲内と考えられるところである。

遺構外出土の27、28は黒燻石製の石鏃であり、28は脚部が欠損している。29、30は細粒砂岩製の打製石斧である。このように発掘調査で得られた石器は全てで30点という少なさで、石製品の無出土と共に問題点の一つにされよう。

降幡氏採集の31、32はスクレーパー状の石器で、31は珪質細粒砂岩、32はホルンヘルズ化した粘板岩である。33～41は打製石斧であり、特に37は大形で長さ25.3cmを計り、重量も1.4kgと重く注目される。東小倉遺跡、黒沢川右岸遺跡、大室遺跡にも同様大形品があってその用途が問題となる。37、41は剝片を利用したもので剝片石器とか不定形石器と呼んでもよいものである。石質は、33～36、40が細粒砂岩、37～39、41が珪質砂岩である。42は珪質細粒砂岩製の敲打器である。

土偶2点は日比野允夫氏採集・所蔵品である。43（図版5）は腰部片で、先が渦巻状にまるまる沈線が、44は胸部片で、片方だけであるが乳房が表現されている。

発掘調査では一点の土製品も得られなかったが、表採で2点も土偶が拾われて皮肉なものである。

以上が南松原遺跡出土の遺物であるが、この他に図示できなかつた土器片が多量にあることを付け加えておきたい。

発掘調査より二十数年を経ての整理であるため困難な点もあつたが一応の終了をみた時点で気づいたことがいくつかあり、それはすでに三郷村誌Ⅰに樋口昇一氏によってまとめられ、記述されていることとほぼ同じ内容であるので、ここでは省略したい。ただ、新しく判明したことのみについて記す。それは藤内Ⅰ・Ⅱ式土器の他に、曾利式土器が存在したことである。曾利式土器の存在内容を遺構との関連でどう捉え理解するかは課題であり、このことについては第2号住居址と特殊遺構Ⅰのところでおいた通りである。

この曾利期を除けば、本遺跡は藤内Ⅰ～Ⅱ期へ続く単純な遺跡で注目すべきものと

言える。昭和45年当時、この時期の遺跡としては塩尻市平出、小丸山、朝日村熊久保の三遺跡が松本平では調査された程度で、本遺跡は調査住居址や出土遺物からみて抜き出る遺跡内容であった。これは今でも変わりはない。その後松本平では、松本市雨堀、牛の川、塩辛、柳田、堀の内、石上、山影、塩尻市峯畑、小段、俎原、吉田向井、波田町葦原、麻神、明科町ほうろく屋敷等の各遺跡の発掘調査が行われて藤内期の遺跡の広がりやその内容が判明してきているが、本遺跡はこれらの中でも単純遺跡として、その資料性は高い。

次に石器の少ないこと、土製品、石製品のないこと、有孔罎付土器や釣手土器のないこと等は指摘されたことで注目されよう。しかし、今から考えると緊急調査でも更に緊急を要した発掘調査であったともあるし、土偶、玉類、石棒、有孔罎付土器、釣手土器等はどの住居でも所有するものではないことが判明してきていること等から未調査住居に期待がもたれる。現に表面採集で2個の土偶を得ている事実もある。

また、1、2、4、5号住居址には、住居廃絶後に、いわゆる吹上パターンと呼ばれる土器等遺物の一括投棄があったとされているが、この住居に限ってであろうか。それとも、未調査の他の住居址にもみられるのであろうか。出土状況から投棄を考えたいが、床面出土遺物の少なさや、更には1軒の住居で所有する土器・石器等の遺物の数量の問題もあるので、2、5号は確実に投棄が行われたであろうが、他は疑問点も残る。床面出土遺物の少なさは、凍上現象で石等が持ち上げられることもあるので問題点として残したい。

20、その他の遺跡

1、^{なるさわじり}鳴沢尻遺跡（三郷村遺跡番号No33）

堀金村との境界近く、堀金村工場団地の南に遺跡はあり、村誌Ⅰには打製石斧出土の記載がある。第24図Aの石皿は、丸山源一氏所蔵のもので、径34cm程の安山岩の丸石に粉砕部が作られている（図版1）。他にも遺物出土があったと聞くが所在不明である。

2、^{りゅうぼうじ}龍峰寺跡遺跡（三郷村遺跡番号No52）

楡中村にあった寺であるが明治の廃仏毀釈で廃寺となった。開基の年代も不明であったり、鎌倉期の宝篋印塔があったりしてその古さがうかがえる。楡遺跡群に入れてよい遺跡であるが、第77図5の石臼1点のみであるためここで扱った。長径15.5cm、厚さ7cmの丸石に大きく凹みが作られ、よく使用されたとみえて底に穴があいてしまっている。

3、^{はくさんじんじやよこ}白山神社横遺跡（三郷村遺跡番号No20）

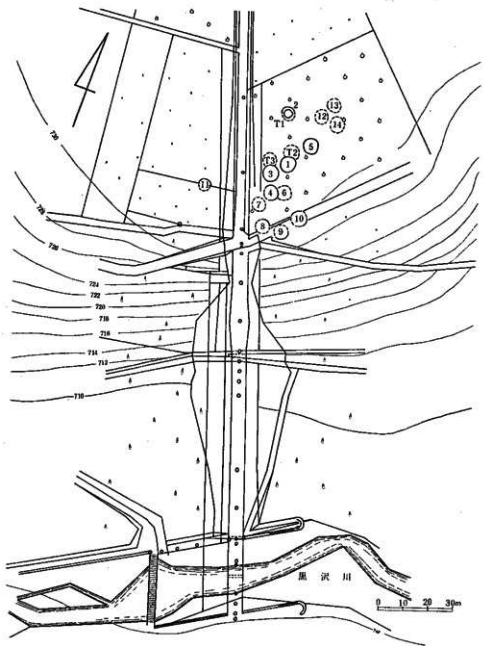
一日市場の白山神社横から、第77図4の凹石が採集されている（図版5）。長径7.8cmのものであり村誌Ⅰにも記載されている。

4、^{くろさわがわうがん}黒沢川右岸遺跡（三郷村遺跡番号No8）

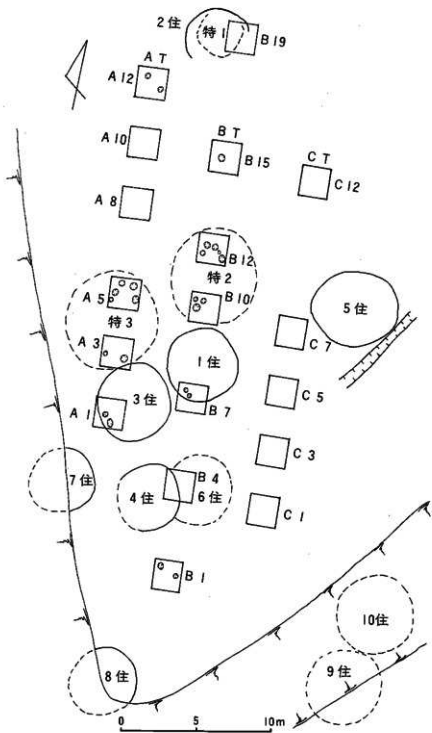
社会福祉法人老人ホーム建設に伴う発掘調査が昭和58年9月に実施され、その報告書は三郷村教育委員会より発刊されているので、内容についてはそれをご覧いただきたい。ここでは、縄文早期末～前期初頭、中期後半、弥生中期の各住居址とそれに関わる遺物出土のあったことのみ記しておく。

今回の整理中、日比野允夫氏所蔵遺物中に第77図6、7の太形蛤刃磨製石斧があったので図示した（図版5）。7は半折している。石質は、6が輝岩、7が斑礫岩である。

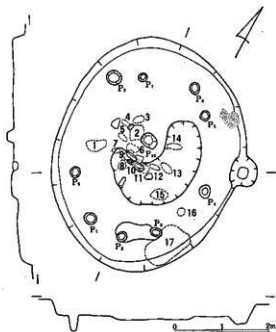
また、第78図に村誌Ⅰ記載の石器を便宜的に再掲しておいた、8～11は磨製石斧、12は石戈である。



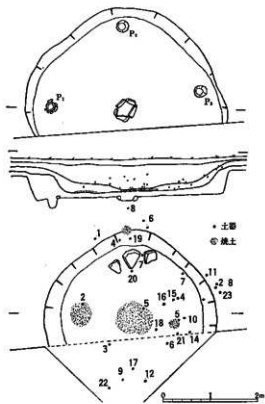
第34図 南松原遺跡全体図 (1 : 1500)



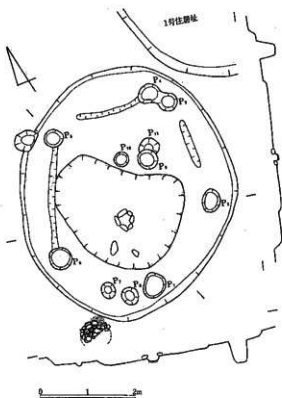
第35図 南松原遺跡発掘調査トレンチ概念図 (1:250)



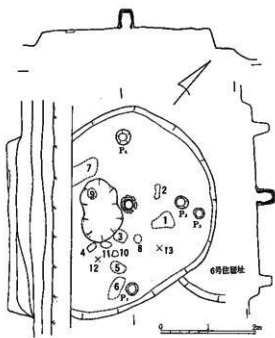
第36図 南松原遺跡第1号住居址(1:80)
(破線は土器一括出土部分)



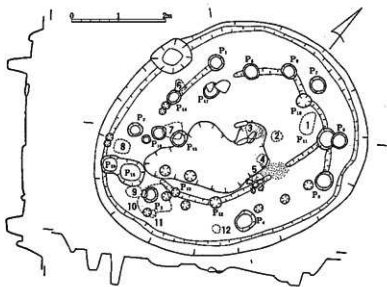
第37図 南松原遺跡第2号住居址(上)と特殊遺構1並びに土器出土状況(下)(1:80)



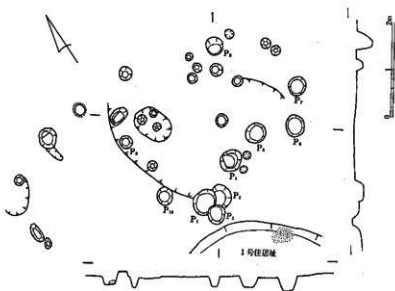
第38图 南松原遺跡第3号住居址 (1 : 80)



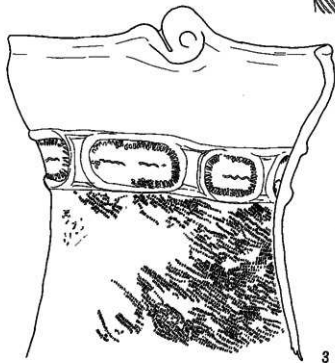
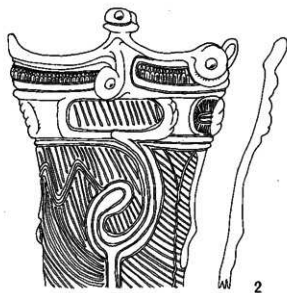
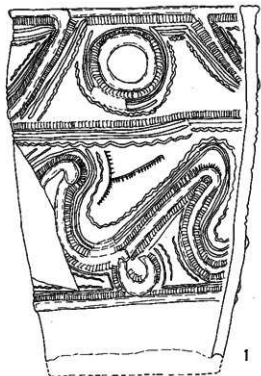
第39图 南松原遺跡第4・6号住居址 (1 : 80)



第40图 南松原遺跡第5号住居址 (1:80)
(破損は土器1~11)

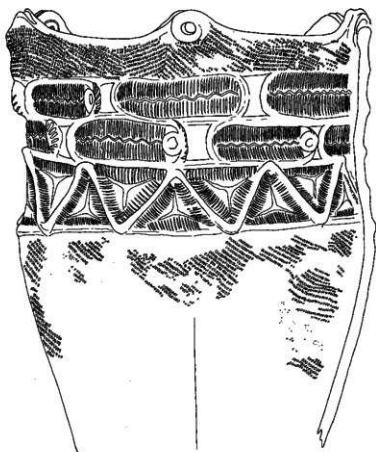


第41图 南松原遺跡特殊遺構2 (1:80)

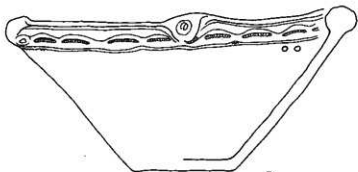


0 10 cm

第42图 南松原遺跡第1号住居址出土土器(1:4)



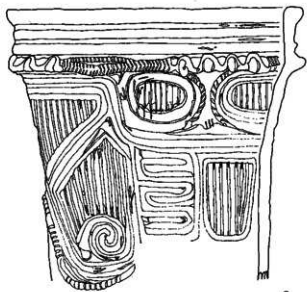
4



5

0 10 20 cm

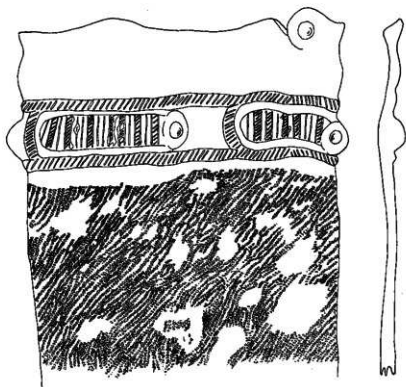
第43图 南松原遺跡第1号住居址出土土器(1:4)



6



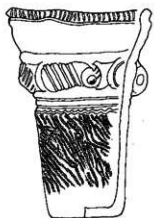
7



0 10 20 cm

8

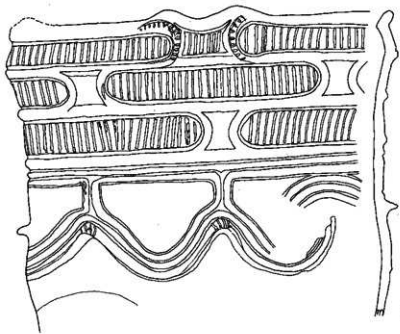
第44图 南松原遺跡第1・2号住居址出土土器(1:4)



9



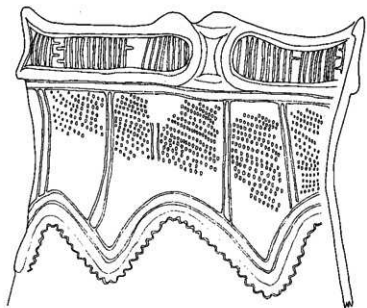
10



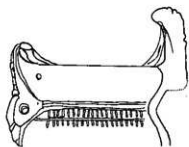
11

0 10 20 cm

第45图 南松原遺跡第2号住居址出土土器(1:4)



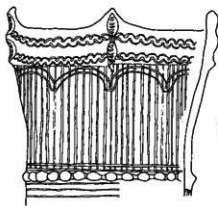
12



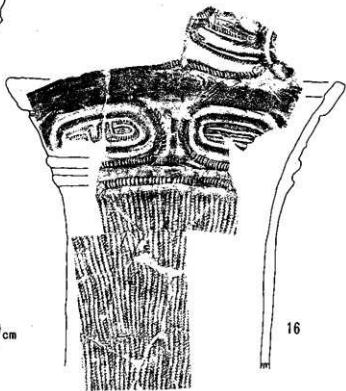
13



14



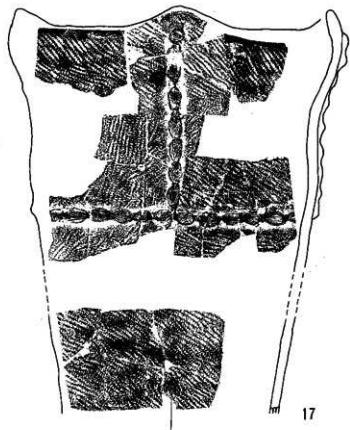
15



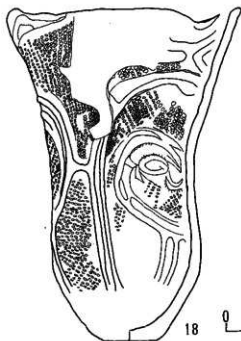
16

0 10 20 cm

第46图 南松原遺跡第2号住居址出土土器 (1:4)



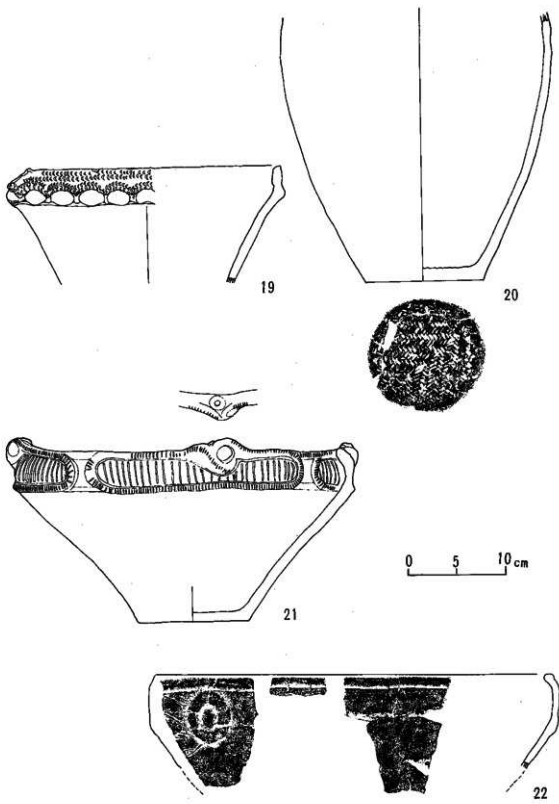
17



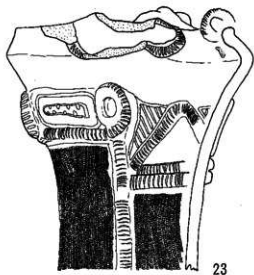
18

0 10 20 cm

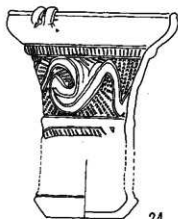
第47图 南松原遺跡第2号住居址出土土器(1:4)



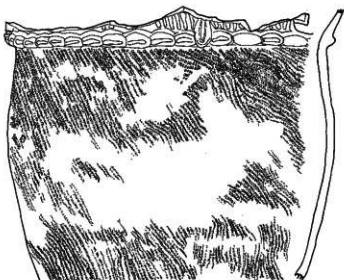
第48图 南松原遺跡第2号住居址出土土器 (1:4)



23



24

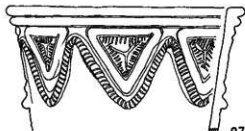


25



26

0 5 10 cm

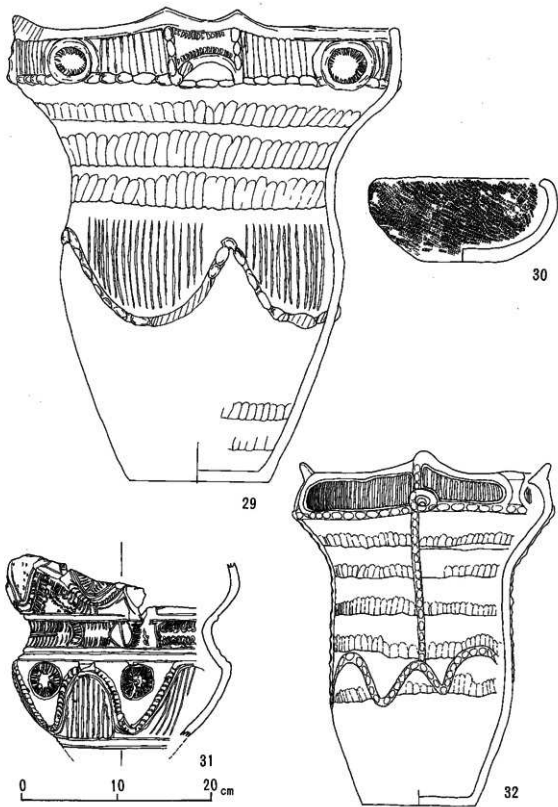


27

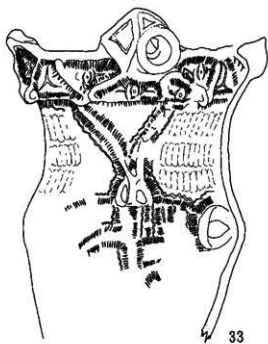


28

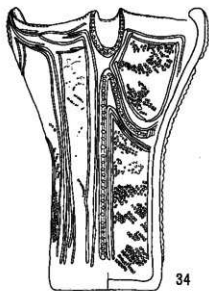
第49図 南松原遺跡第4・5号住居址出土土器(1:4)
(23~26は4住、27~28は5住)



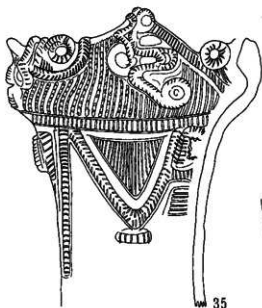
第50圖 南松原遺跡第5号住居址出土土器 (1:4)



33



34

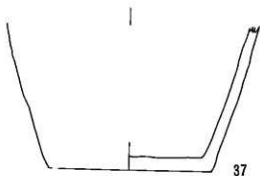


35



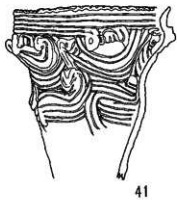
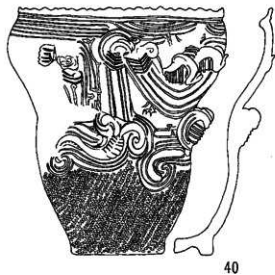
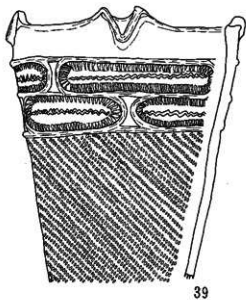
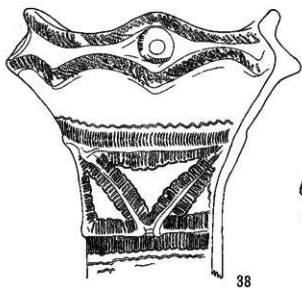
36

0 10 20 cm



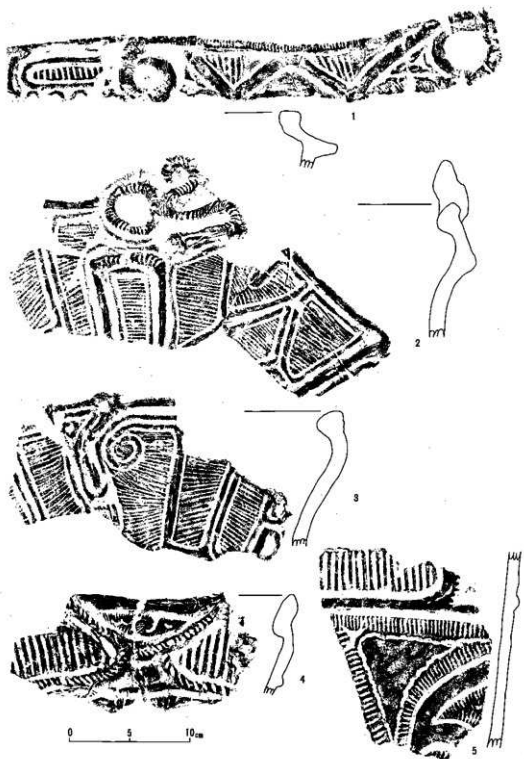
37

第51图 南松原遺跡第5号住居址出土土器 (1:4)

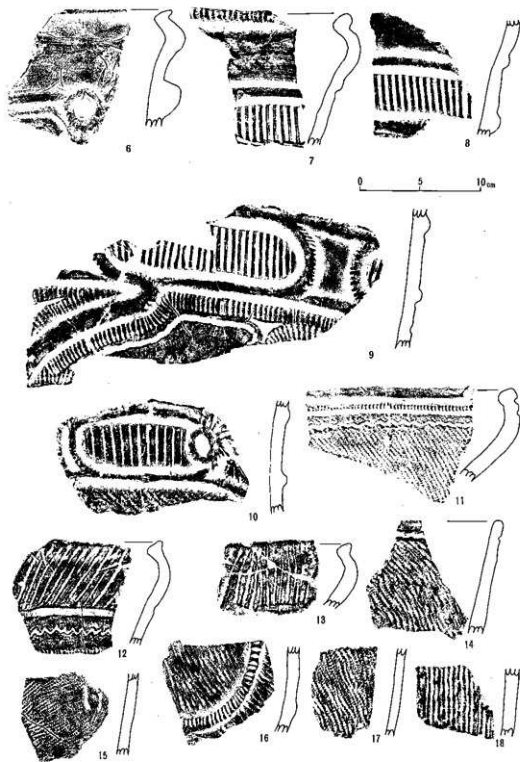


0 10 20 cm

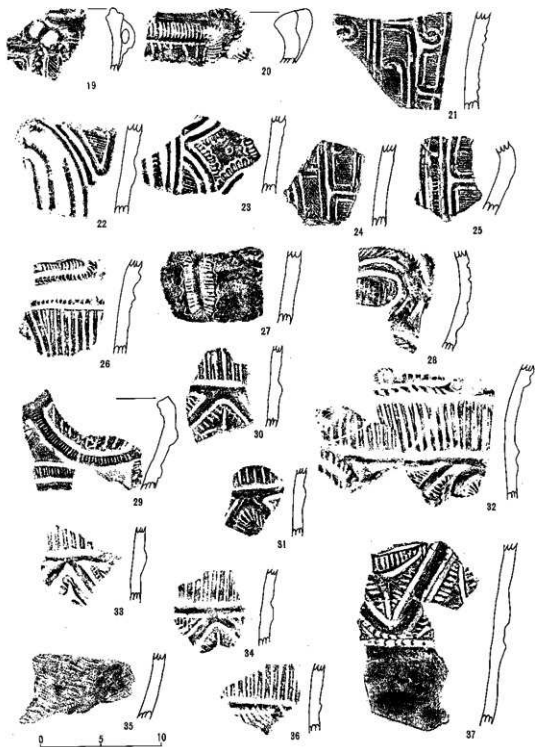
第52图 南松原遺跡第5号住居址出土土器(1:4)



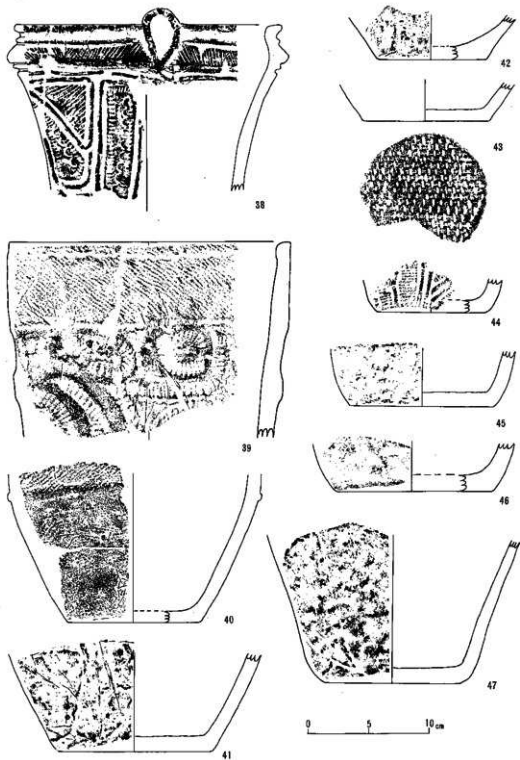
第53図 南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その1 (1:3)



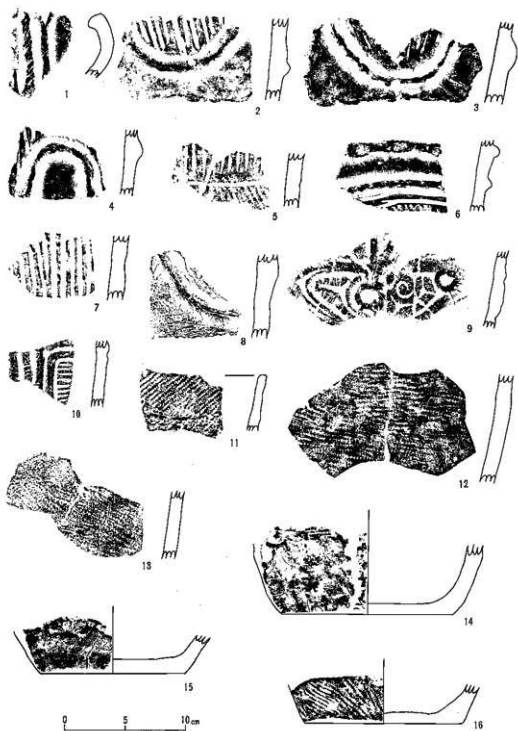
第54図 南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その2 (1:3)



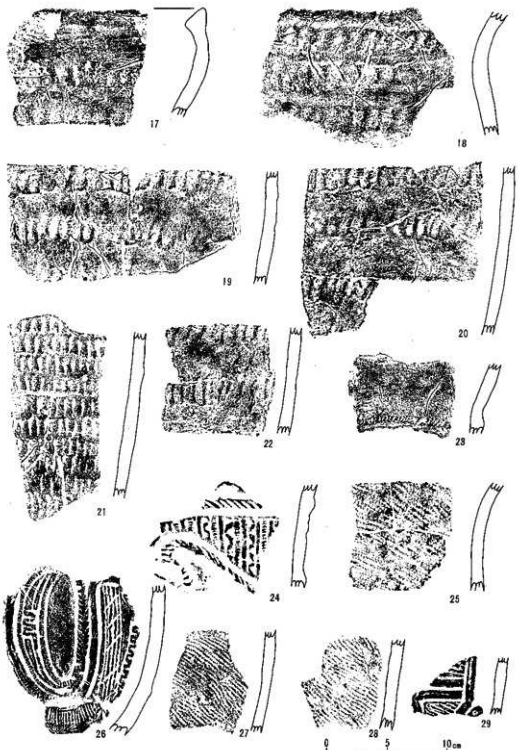
第55図 南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その3(1:3)



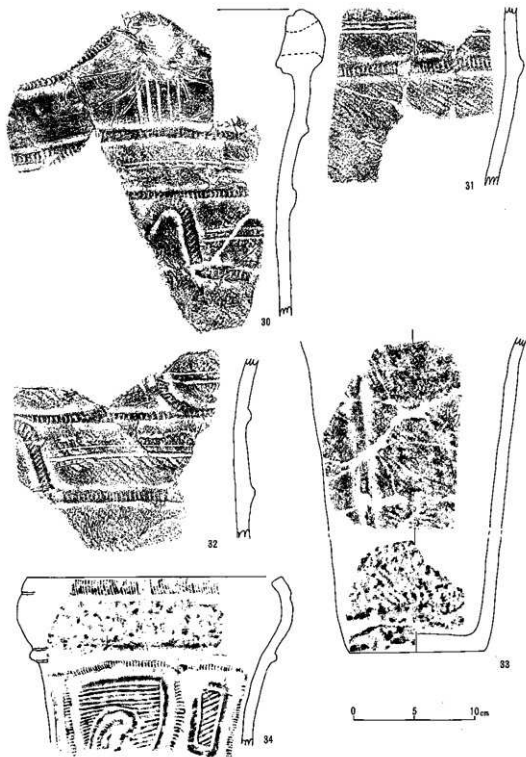
第56図 南松原遺跡第1号住居址出土土器拓影その4 (1:3)



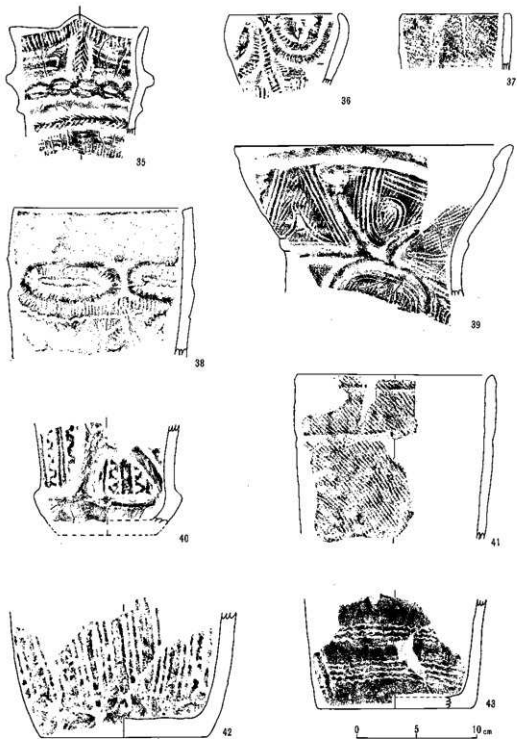
第57図 南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その1 (1:3)



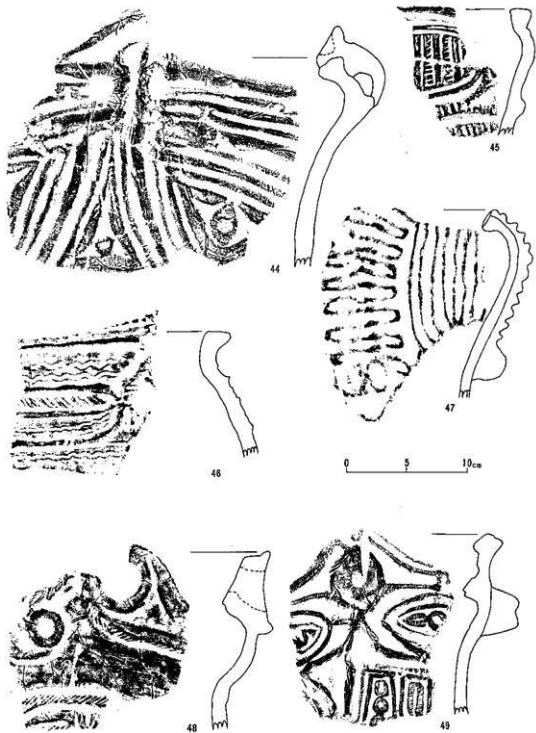
第58図 南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その2 (1:3)



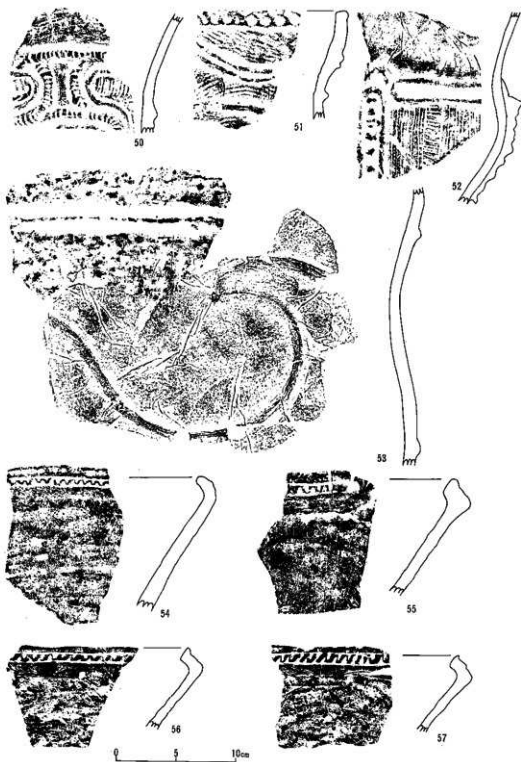
第59図 南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その3 (1:3)



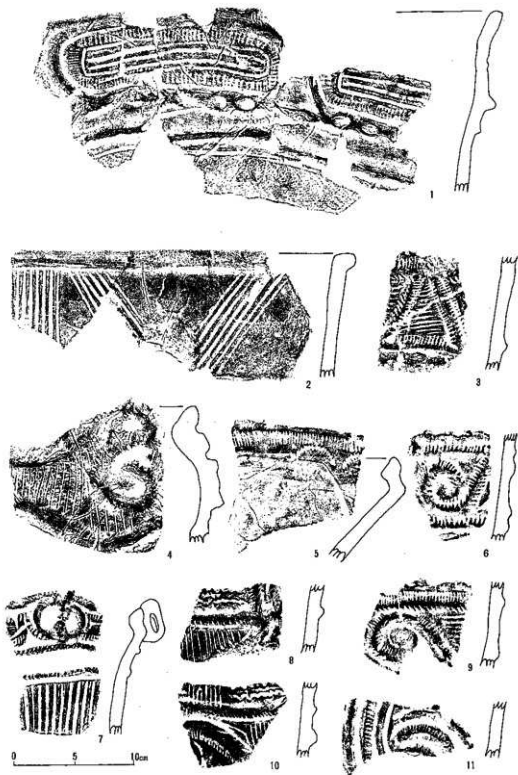
第60図 南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その4 (1:3)



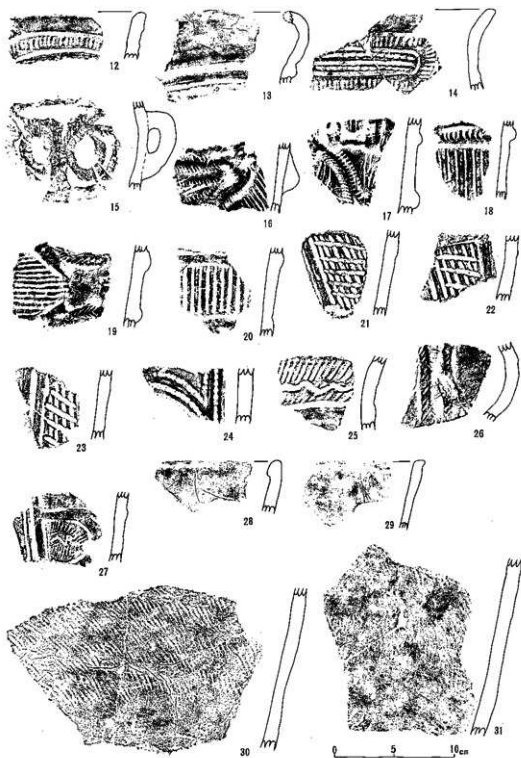
第81図 南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その5 (1:3)



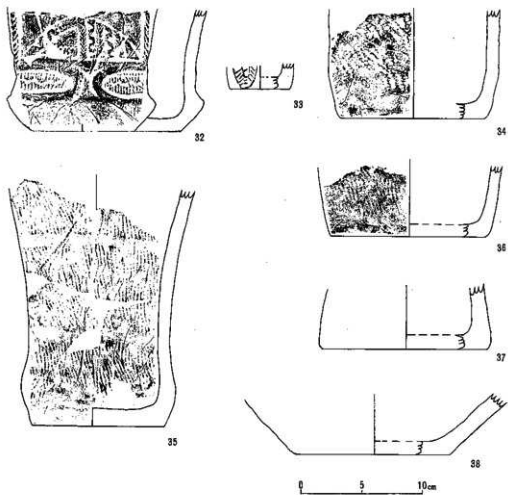
第62図 南松原遺跡第2号住居址出土土器拓影その6 (1:3)



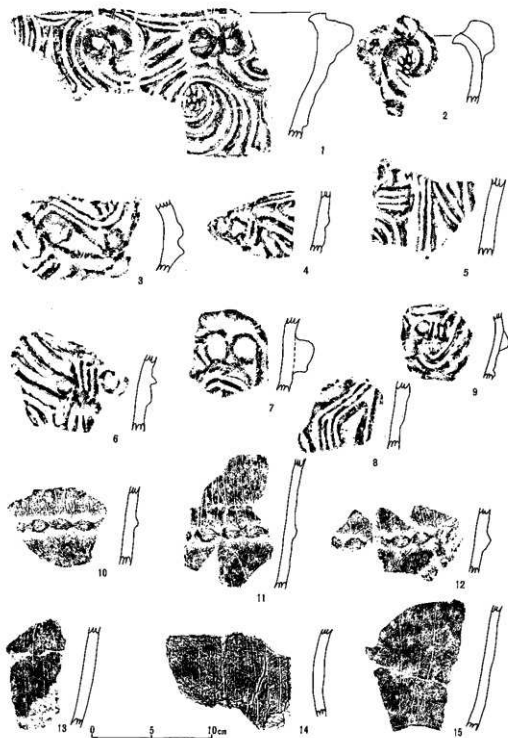
第83図 南松原遺跡第4号住居址出土土器拓影その1 (1:3)



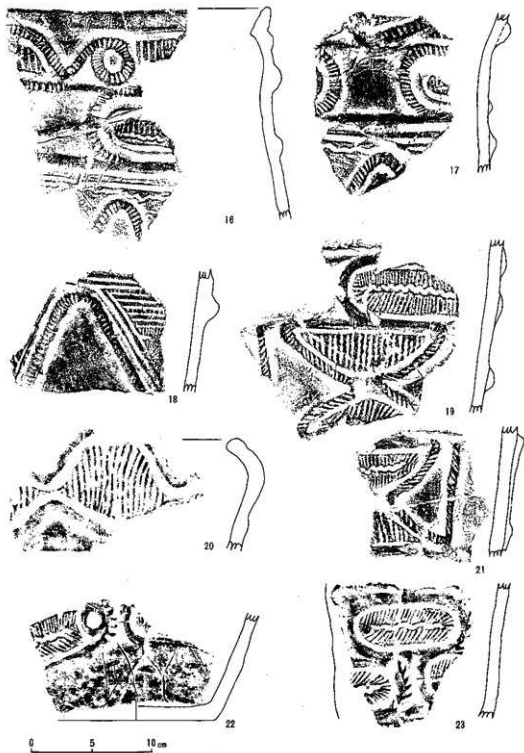
第64図 南松原遺跡第4号住居址出土土器拓影その2 (1:3)



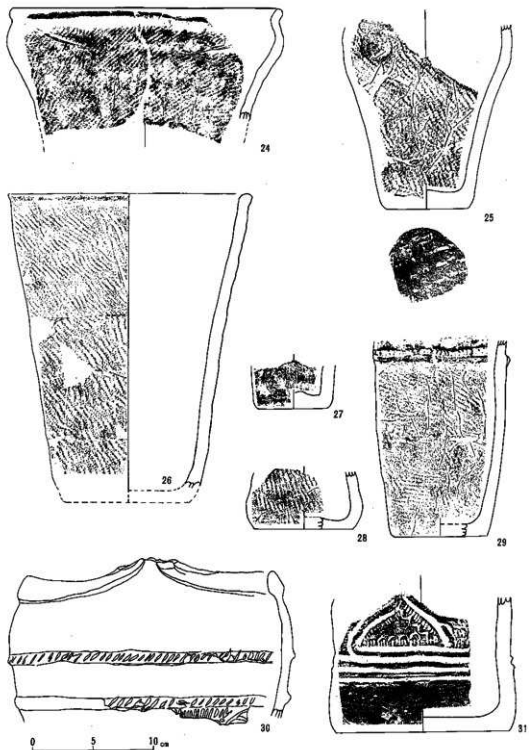
第65図 南松原遺跡第4号住居址出土土器拓影その3 (1:3)



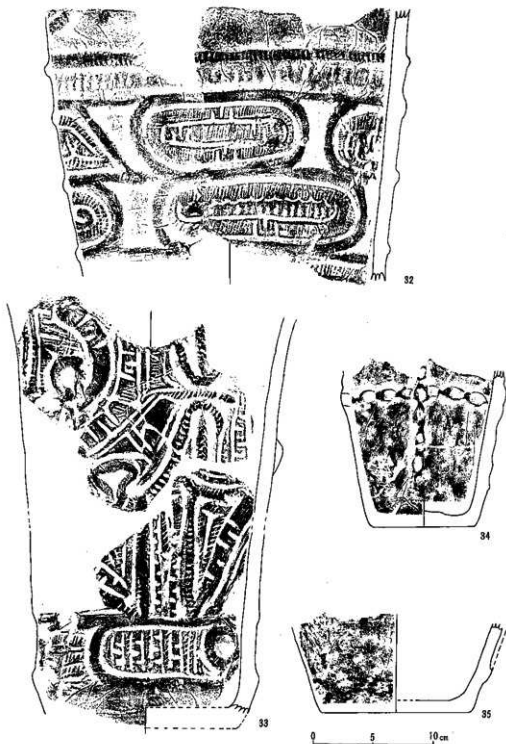
第66図 南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その1 (1:3)



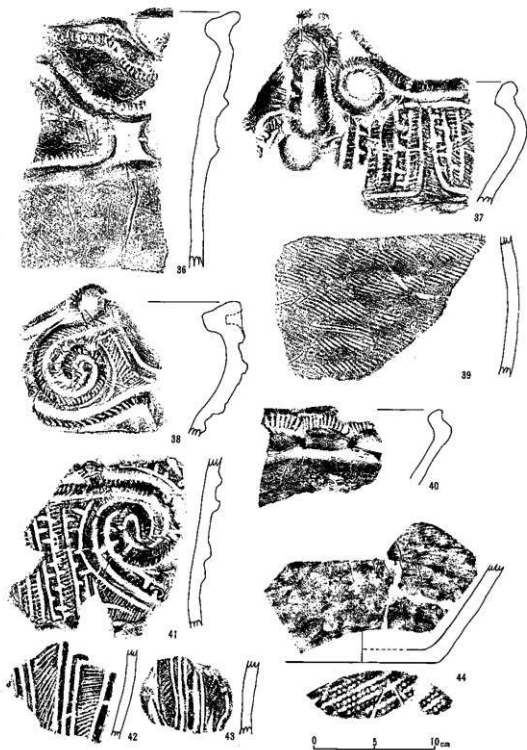
第67図 南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その2 (1:3)



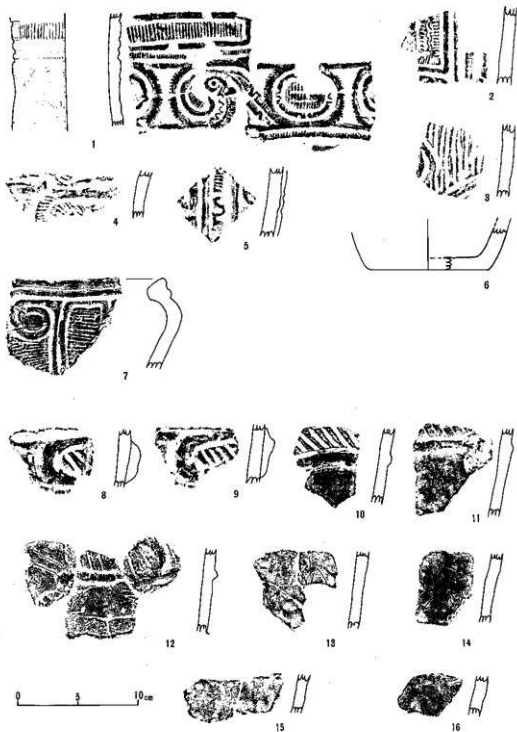
第68図 南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その3 (1:3)



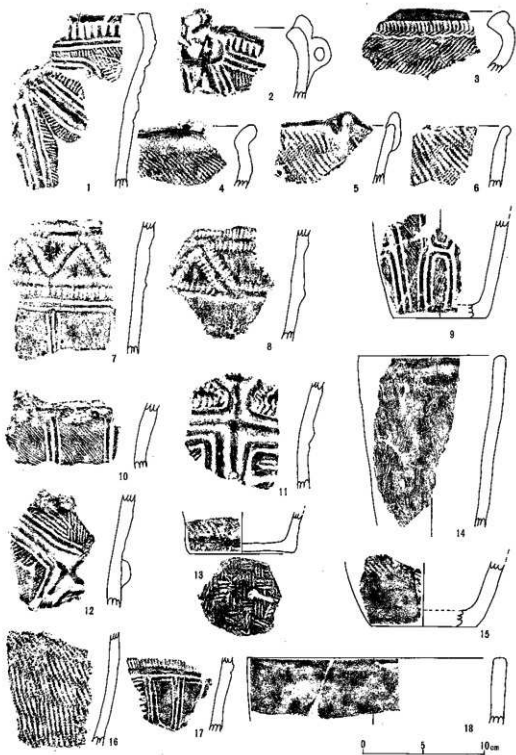
第69図 南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その4 (1:3)



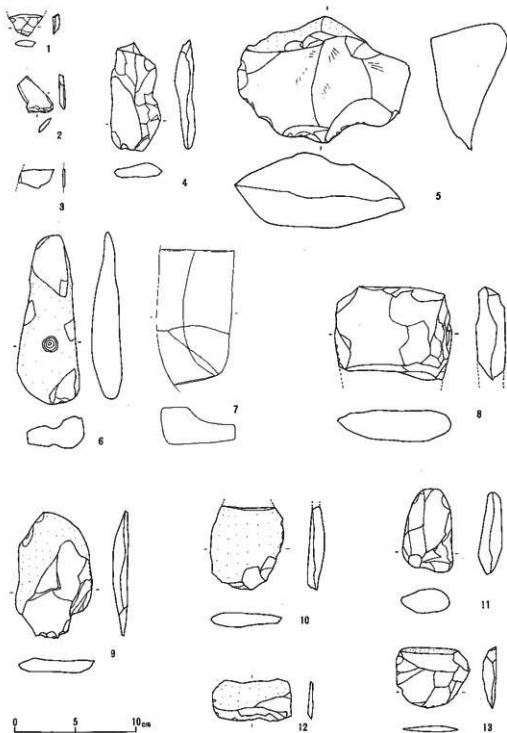
第70図 南松原遺跡第5号住居址出土土器拓影その5 (1:3)



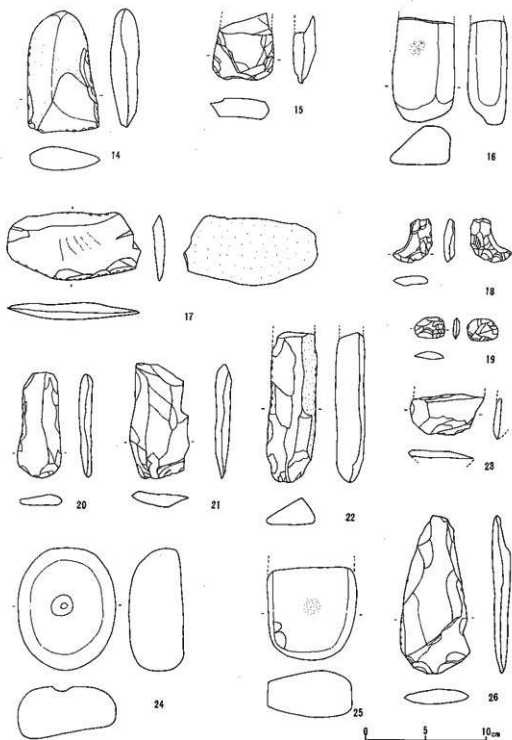
第71图 南松原遺跡第3・6・7号住居址出土土器拓影(1:3)



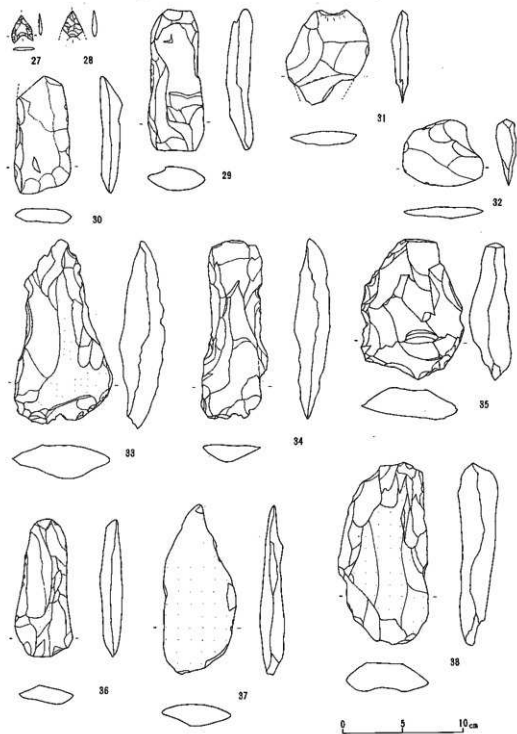
第72图 南松原遺跡第13号住居址出土土器拓影(1:3)



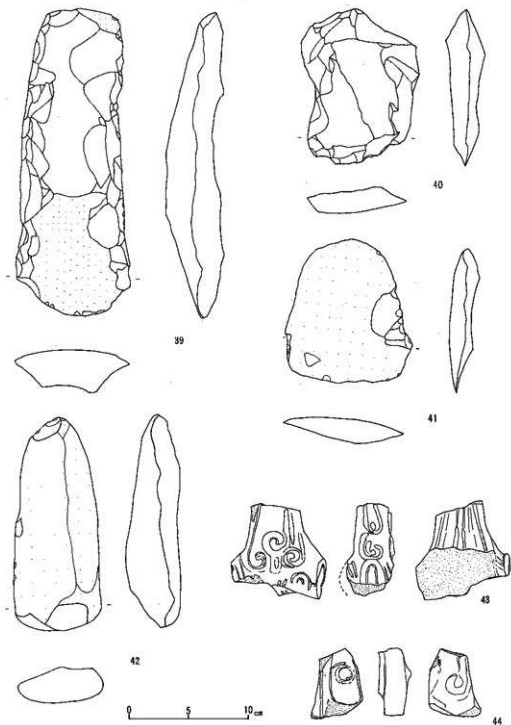
第73図 南松原遺跡第1・2号住居址出土石器(1:3、7のみ1:6)



第74图 南松原遗址第4·5·7号住居址出土石器(1:3)

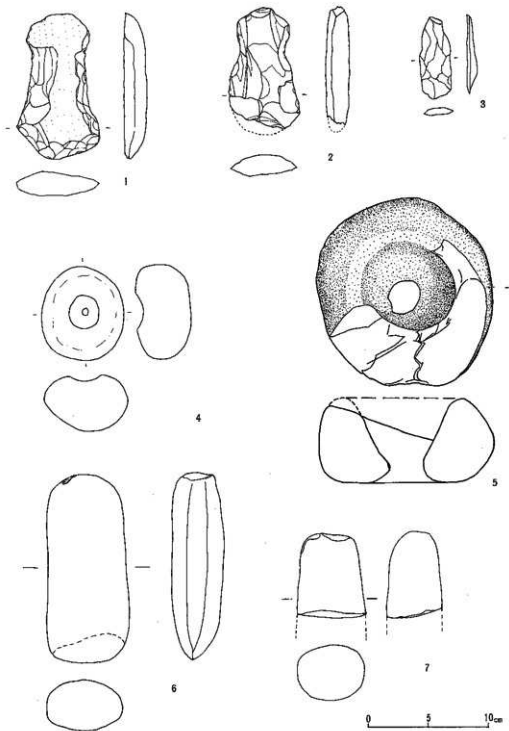


第75図 南松原遺跡遺構外出土石器及び表探遺物 (1:3)
 (31~38は降旗隆夫氏所蔵)

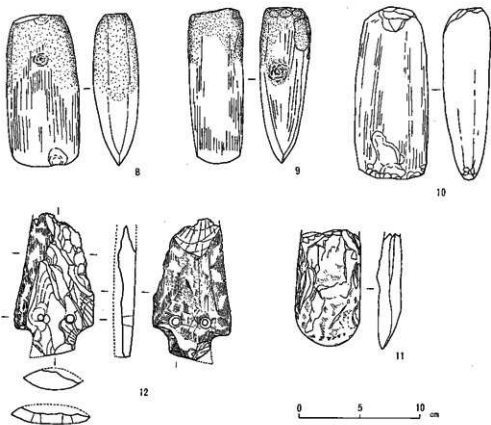


第76図 南松原遺跡表探遺物 (1:3)

(39~42は降旗隆夫氏、43~44は日比野尤夫氏所蔵)



第77図 長尾城址北・白山神社・龍峰寺跡・黒沢川右岸遺跡出土石器 (1:3)
 (1~3) (4) (5) (6~7)



第78図 黒沢川右岸遺跡出土石器（1：3）

あ と が き

三郷村誌Ⅰ発刊当時、三郷村での人々の生活（歴史）は、稲荷西遺跡出土の楕円押型土器の破片によって、縄文時代早期から始まったと考えられ、そのように説明されてきた。東小倉遺跡の発掘調査が平成5年に行われた折、堀内國利氏の東小倉遺跡での採集遺物に、有舌尖頭器が1点のみであるが所蔵されていて、人々の訪れは縄文草創期にまでさかのぼることが判った。

このことは数少ない遺物であっても、歴史を考える大事な資料となり得ることの好例であると言える。昔の人の残した遺構・遺物をもとにして当時の生活を再現し、その文化内容を追究する考古学にとっては欠くことのできないもので資料の集積は何より大切なことである。

三郷村には多くの遺跡が所在し、多くの人々によって多くの遺物が採集保管されている。その中の代表的なものが取り上げられて、村誌Ⅰに記載されたが、取り上げられない資料の方が多く、散逸等の心配もあって、何よりも資料化の必要性が考えられていた。そんな願いが叶って、ここに整理が終わって資料集の発刊をみることができ、教育委員会の英断に心より敬意を表するものである。市町村誌の発刊には、どこの市町村でも取り組むが、このような資料集作りの例は余り知見にふれない。三郷村でこそその感が強く、文化、学問へ寄せる村民性というかその高さに感じ入るところである。

資料集は測定数値等も加え、よりよいものを志向すべきであったが諸種の事情からそれは無理であり、このような内容となった次第である。編者の力不足もあってお許し願いたい。しかし個人所有の遺物の提供もあって、目的とした半分以上は達せられたのではと勝手に自賛している。未収録のものは、今後新たに採集されたり、調査されたりする機会があると思われるので、それらと合わせ今後に期待したい。

企画運営に当たって種々ご配慮いただいた教育長はじめ教育委員会の方々、所蔵遺物を快く提供して下さったの方々、整理作業に熱意をもって当たられた方々に心より感謝とお礼を申し上げ、まとめとしたい。

(山田瑞穂)

参 考 文 献

- 三郷村誌編纂会 三郷村誌 I (1980年)
- 松本市 松本市史 第2巻歴史編1 (1996年)
- 塩尻市誌編纂委員会 塩尻市誌 第2巻歴史 (1995年)
- 藤森栄一他 井戸尻 (1965年)
- 塩尻市教育委員会 塩尻市焼町遺跡発掘調査報告書 (1970年)
- 長野県教育委員会 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・諏訪市その1・その2〈荒神山遺跡〉(1973年)
- 長野県教育委員会 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・諏訪市その3〈荒神山遺跡〉(1974年)
- 長野県教育委員会 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・茅野市・原村その1・富士見町その2〈大石遺跡〉(1975年)
- 塩尻市教育委員会 小段遺跡 (1979年)
- 松本市教育委員会 松本市笹賀牛の川遺跡 (1980年)
- 松本市教育委員会 松本市内田雨畑遺跡第1次 (1981年)
- 松本市教育委員会 松本市内田雨畑遺跡第2次 (1982年)
- 樋口昇一 「熊久保遺跡」長野県史考古資料編 主要遺跡 (1983年)
- 小林康男 「小丸山遺跡」長野県史考古資料編 主要遺跡 (1983年)
- 松本市教育委員会 松本市前田木下遺跡 (1984年)
- 桐原 健 「縄文の石鈎」中部高地の考古学Ⅲ 長野県考古学会 (1984年)
- 野村一寿 「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例の位置づけ」中部高地の考古学Ⅲ 長野県考古学会 (1984年)
- 三上徹也 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」長野県考古学会誌51 (1986年)
- 寺内隆夫 「組原遺跡出土土器の検討」塩尻市立博物館紀要第5集 (1988年)
- 寺内隆夫 「長野県上水内郡三水村上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」長野県考古学会誌61・62 (1991年)
- 塩尻市教育委員会 峯畑遺跡発掘調査報告書 (1994年)
- 堤 隆 「川原田遺跡」信州の大遺跡・郷土出版社 (1994年)
- 小林真寿 「焼町土器の研究」長野県考古学会誌80 (1996年)
- 山形村教育委員会 淀の内遺跡 (1997年)

三郷村の埋蔵文化財第4集

三郷村埋蔵文化財
(資料集)

平成11年11月25日 印刷

平成11年12月1日 発行

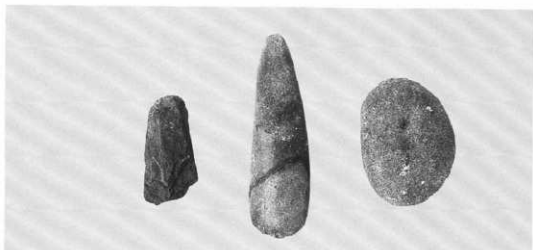
編集発行 三郷村教育委員会
長野県南安曇郡三郷村大字明盛4810-1

印刷 藤原印刷株式会社

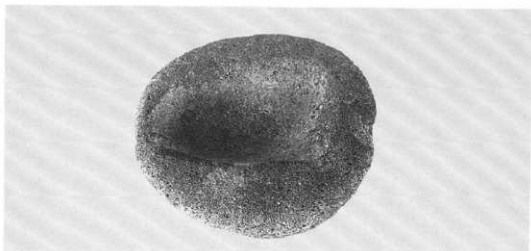
图 版



(鳴沢A)

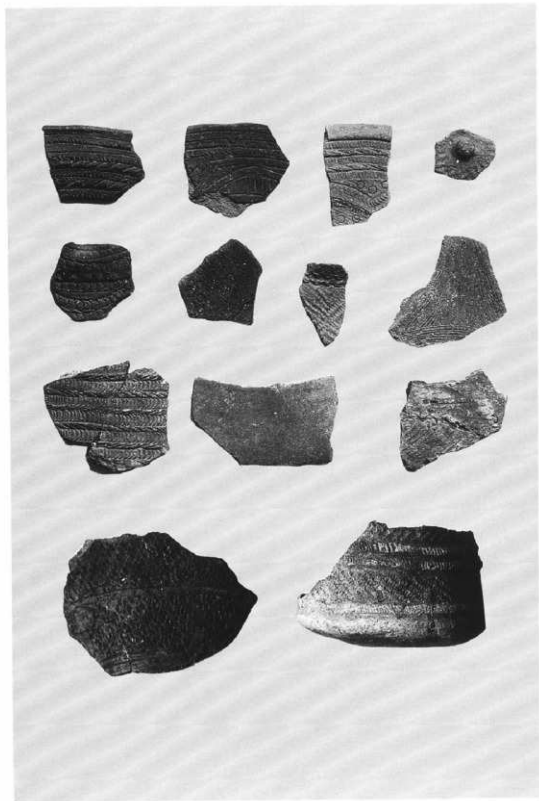


(才の神)

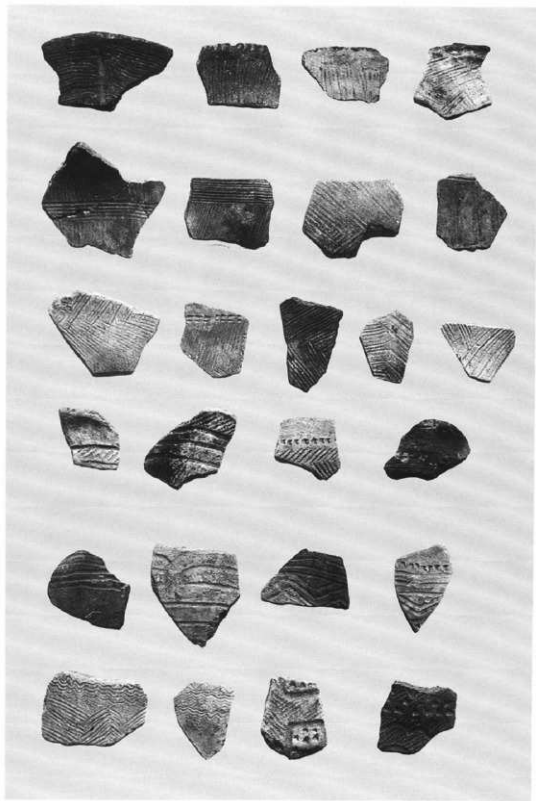


(鳴沢尻)

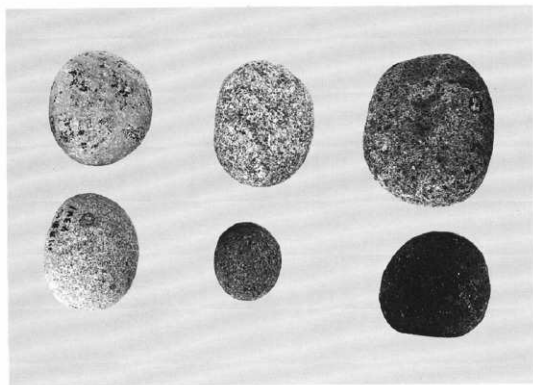
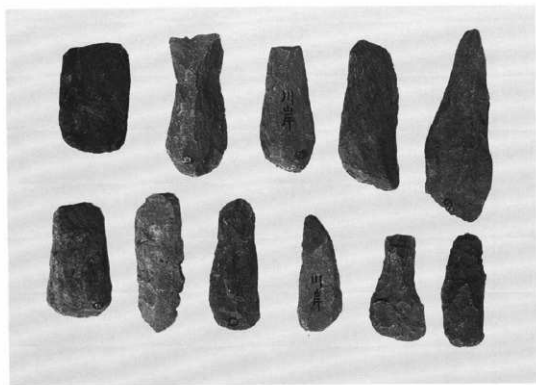
図版1 鳴沢A・才の神・鳴沢尻遺跡出土石器



図版 2 才の神遺跡出土縄文前期土器



図版 3 堂原遺跡出土弥生中期土器



図版 4 堂原遺跡出土石器（上、打製石斧 下、磨石）



(堂原)



(南松原)



(南松原)



(黒沢川右岸)



(白山神社)

図版 5 堂原・南松原・黒沢川右岸・白山神社遺跡出土石器と土偶



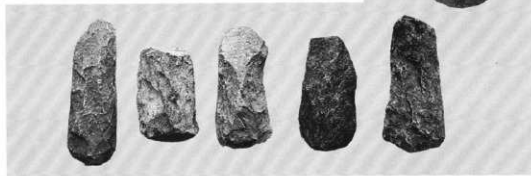
(ゆの久保)



(赤坂西)



(長尾城址北)



(住吉竹原)



(千国橋北)

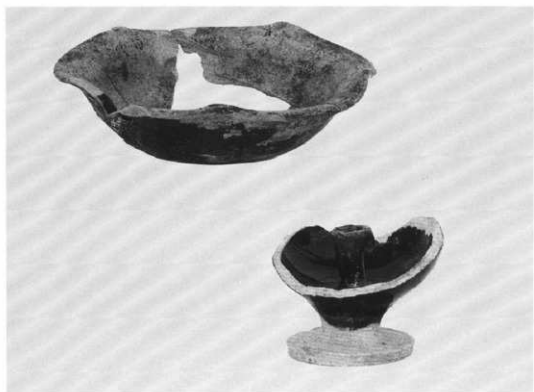
図版 6 ゆの久保・赤坂西・長尾城址北・住吉竹原・千国橋北の各遺跡出土の石器



(上手)

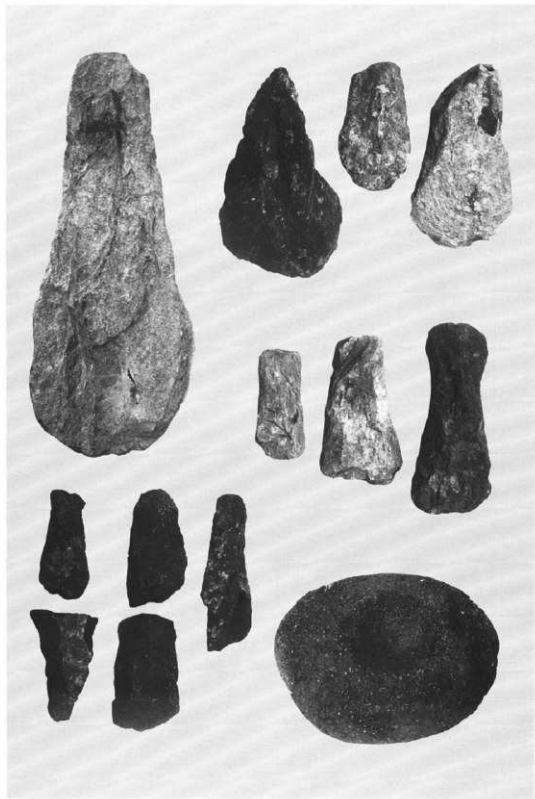


(中村)



(中村)

図版 7 楡上手・中村遺跡出土陶器



图版 8 大冢遺跡出土石器



(1号住)



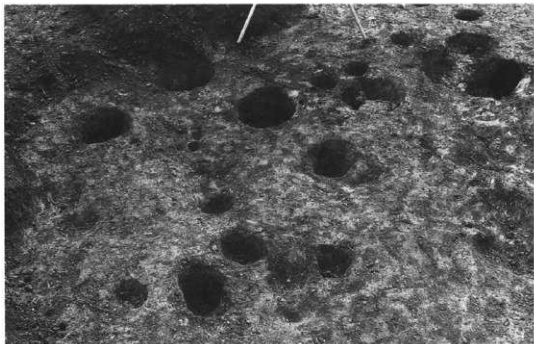
(1、3号住)



(5号住)



(5号住)



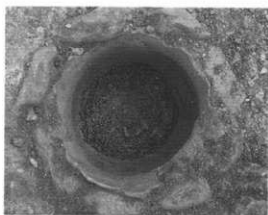
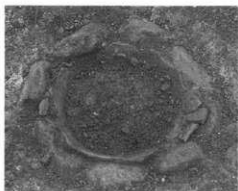
図版10 南松原遺跡特殊遺構2(上)と第1・3号住居址(下)



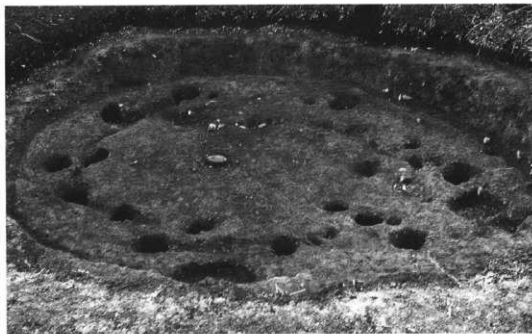
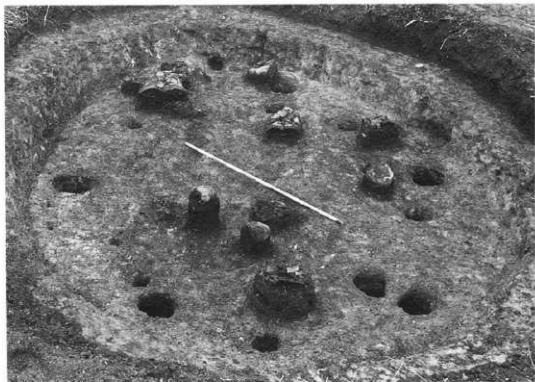
図版11 南松原遺跡発掘調査状況



図版12 南松原遺跡第1号住居址(上)と第3号住居址(下)



图版13 南松原遺跡第4号住居址



图版14 南松原遺跡第5号住居址



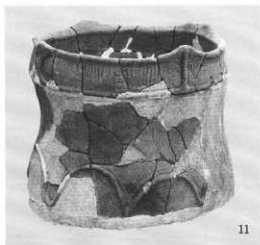
図版15 南松原遺跡出土縄文中期土器



图版16 南松原遺跡第1号住居址出土土器



图版17 南松原遺跡第2号住居址出土土器



11

(2住)



12

(2住)



13

(4住)



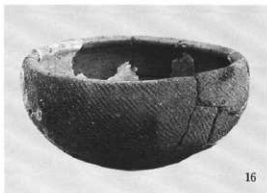
14

(4住)



15

(5住)



16

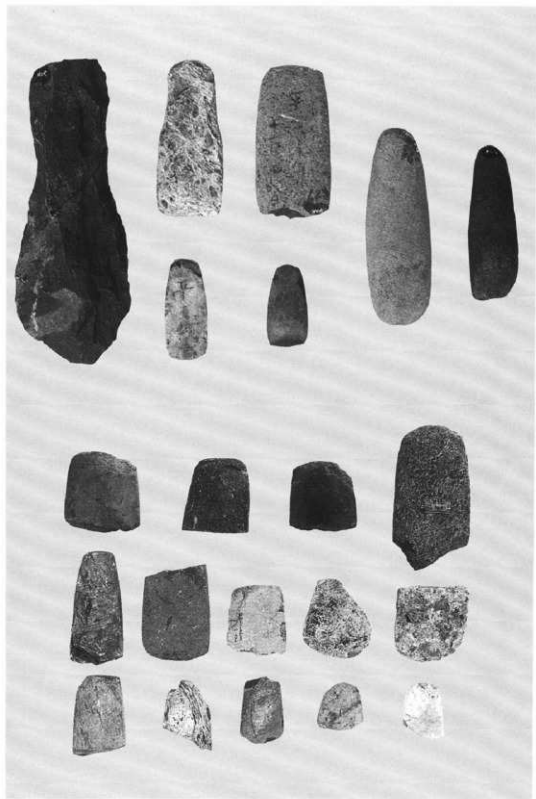
(5住)



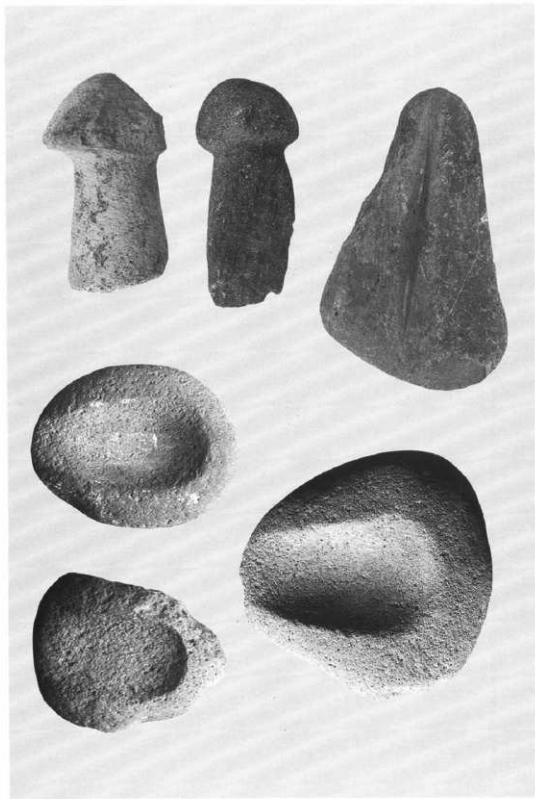
图版19 南松原遗址第5号住居址出土土器



图版20 南松原遺跡第5号住居址出土土器



図版21 東小倉遺跡出土石器



図版22 東小倉遺跡出土石器・石製品

